

にはなれません。それ程此の本は馬鹿氣た書き物です、本當に奇怪な本です。」と相當に猛烈な書き方である。又、九一四信には、右と反對に、

「貴方が豫て研究されてゐる問題、即ち未來の科學の基礎に關する貴著ランコニー（未知の世界へ）に對して御参考までに卑見を申述べたる事は私の義務と存じます。

一八七八年の冬に私はオーレヤクに住んでゐました。そして妻と娘はイル、エ、ヴィローヌのサン、セルバンに残して置きました。

十二月二十二日午後八時半頃、私がカフェーに居つた時、一種異様の堪へ難い苦悶に襲はれました。私は何かの豫感らしく感じたので、家へ歸つて次の様な手紙を妻に書きました。

「私は例もの友達と一緒にカフェーに居ると、私は悲し相なお前の呼び聲を聞いたので、何となく氣になつて、友達の留めるのも聽かずに家へ歸つた。屹度お前は何かで苦悶して一生懸命に私を呼んだに違ひないと思ふ。さもなければ非常に危険な事でもあつたのか。詳しく知らして呉れ。私は何とは知らずに苦しみに堪へないで家へ歸つた。これをお前に知らせずには居られない。」——十二月二十二日、午後九時。（以下本書に關係ない事であるから異す）

妻は二十四日の朝この手紙を受取つた。そして直ぐ返事を寄越した。彼女は先づその手紙の冒

頭に「子供に大變な事があつた日」と書いた。

以下サン、セルバンでその日起つた出來事です。

二十二日の午後八時頃、妻は生れてまだ六週間にしかならない私の娘の足の所に湯タンポを入れてやつて寝かし、妻も後から床に這入りました。二、三分すると子供は突然苦し相な聲を張りあげて泣き出したのに驚いてよく見ると、瓶から熱湯が漏れて子供は無慘にも足に火傷をして苦しんでゐたのです。

妻はこの有様に仰天して殆んど氣を失ひ、三十分以上の後で、醫者が來た時にやつと正氣に回つた程でした。

私の手紙の日附は十二月二十二日午後九時であるから事件の時刻と恰度一致してゐる事が確かである。

私が前記のカフェーで食事したのが七時と八時の間で、それから歌留多を弄んで間もない時分です。ですから、呼聲を聞いたのは早くも八時半頃と思ひます。そこから私の部屋までは一五九米突あります。

子供は八時に床に就かせたので、湯漏れが八時半過ぎであるとすると、その頃は火を冷めて來

るので、火眼にならずに済んだ事でせう。恐らく妻は混乱中に私の事を考へ出して呼んだのだと思はれますが、彼女は一向それを記憶して居ません。

終りに私は、自分の性質と職業の上から、單に心靈界の不思議な現象丈の研究に止らず、進んでその科學的眞理の研究に向て多大の趣味を有つてゐる者であるといふ事を附け加へて置きます。

ギゴン』

この珍らしい話はアルポーソフ(第四章)及びガリソンの話(同章)に極めて酷似してゐるではないか。これもすべて超自然的心靈の力の表現である事は言ふまでもない。

茲に亦、思想の遠感的傳達を示した最も明確な若干の實例がある。その中から巴里大學のポアルソ博士の報告(三四八二信)を紹介する。

「私は茲に自分の經驗した幾分性質の違つた三つの場合をお知らせする。それは貴下の研究の上に有益な参考にならうと信ずるからである。

(イ)二ヶ月許り前、巴里郊外ベルフォール附近を逍遙してゐる時、不圖、ジュラに居る同僚の或る一人の事が心に浮んだ。それが奇妙に執拗こく附け纏ふのである。

私は十三年前から彼を知つてゐた。けれども職業以外には彼と何の交渉もないので、その後彼と會つた事もなければ、年に一回も彼の事を考へた覚えもない。何の爲めに今、偶然彼の事を考へ出したのか自分にも分らなかつた。更に不思議な事には、それから二、三分すると、廣場で、彼が直ぐ私の近くに居るのを見つけた。彼は自轉車で私に直角に町を降りて行つたのであるから、彼が遠方にゐた時分には私から迎も見えない筈である。私はこの理由を説明する事は出来ないが、兎に角私を感動せしめた事實である。

(ロ)私は職業柄夜間屢々起される事がある。尤も私に關係のない人が大勢私の家の前を通る。けれども自分の家のベルを鳴らさうとする人が来る時にはその人がまだ二十米も離れてゐる時から私は自然と眼が醒める。誰かゝ来るなと云ふ事が分るのである。

私はこの現象を過去十二年に百回餘も經驗した。唯だ、私が醒めてゐる時、又は晝の疲れでぐつすり寝込んでゐた時だけは誰れが來やうと少しも知らずに居る事を特に御断りして置く。

(ハ)私の取扱つてゐる多くの患者の中にはヒステリーの若い婦人があつた。そして、この婦人を催眠術で眠らせ、暗示を與へる事は極めて容易である。私は屢々彼女の目覺める時と、起きる時とを定めた。彼女はよくそれを守つた。これは多少催眠術を心得てゐる人には不思議でも何ん

でもない事だが、唯茲に一寸面白い話があつたといふのは、ある日この婦人の夫は妻の起きるのを待ちきれないで、ほんの氣紛れから彼女の寢臺の側の卓上に在つた時計の針を進めて置いた。その時は午前六時半であつたのを七時半の所に進めたのである。彼女は七時に起きる事になつてゐた。然るに長針が丁度七時を指した瞬間に彼女は急いで起き上つた。男は驚いて態々この話を私に知らせにやつて來た。それから私は幾度もそれを確めて見たが、矢張り本當であつた。

この婦人は寢てゐる時でも、眼を閉ぢたまゝ私の時計の時間を讀む事が出来る。私が自分で時計の針を見て居さへすれば、たとひ時間を變更しても間違ひなくそれを讀む事が出来るのである。それと同じ様に私が自分で物を持つて居る限り、彼女に隠れてゐても、彼女はその物の名を容易に當てる。

これ等の現象は凡て説明され得る事實である。それは一般の人々には分らなくとも、たとひ人々には魔法使の様に思はれても、豫て心靈學上に造詣の深い貴方には容易に解説され得る事と思ふ。

貴下はこの報告を如何様に利用さるゝも御隨意である。又、小生の名を發表されても差問題は無い。小生はこの方面に無智の人々から受ける嘲笑を反て喜んで迎へる者である。

一九一六年十月九日

醫師 ボアルソン

右の中最初のもは珍らしくない現象である。それはエーテル波の様に腦から腦へと思想を傳へる場合の一つである。二番目のも同様である。三番目のものは手段によらず作用する暗示である。思想の傳達である事は言ふまでもない。殊に醫師が時計の針を變へた場合などに於てはさうである。又、自分が考へてゐた人と全く偶然に會ふ事のあるのは誰でも知つて居る。吾々は恚うした例を到る所で見ると、醫者のフォアサツク氏はこの種の例で特に彼が自ら驚いた暗合の場合を擧げて居る。けれども此の現象に就ては今日まで未だ本當に研究されてはゐないが、心靈の放射作用である事は殆んど疑ひがない。

遠感的透視力や、聴力には一層著しいものがある。

次はトブリーの醫師バルター未亡人からの報告で、それは幸ひに大事に到らなかつた事件を遠距離から見たと云ふ例である。時は一八七四年、所は羅馬尼亞で起つた事である。(四〇七五信)

『醫師は馬に乗つて往診に出かけました。妻君も午後には二、三の友達と外出したのです。彼女は道々友達と話し合つてゐる最中に、俄に彼女の夫が馬から道に放り出されたのを見てあつと恐怖の叫びを擧げました。友達は彼女を囓ひました。夕方夫が歸つて來た時、まだ幻の印象がはつ

きり残つてゐた妻は、怪我がありませんでしたかと尋ねたので、今度は夫が驚きました。事實、彼はこの日稍々急な坂路を登つた後で、馬の歩みを緩め、手綱を腕にかけて煙草を巻かうとする途端に馬は躓いて膝をついたので、彼は地上に振り落され、顔や肩に負傷したのである。豫て遠感現象の事を知つてゐた彼は決してその話を否定しなかつた。

左に掲ぐる幻想の例はロンブローゾ氏が、大學の同僚ド、サンクテイス教授から送られた報告である。

『私は今、田舎に残してある家族と一緒に曾て羅馬に居た事がある。それから一年許り前に弟が強盗に遭つて以來夜だけ私の家に寝る事にした。或る晩、彼はコスタンチ劇場に行きたいと言ひ出したので、私だけ家に残つて書物を読み始めた。すると何やら一種異様の恐怖に襲はれた。ふと劇場が焼けて弟は今危険な所に居るのではあるまいかといふ考へが湧いて來た。けれども私は強てその恐怖を押へて、着物を脱ぎ例もの通り燈を消して床に入つたが、何うしても不安が先に立つて眠れなかつた。十二時半頃門が開いて弟が歸つて來た。彼は観劇中に火事が起つて非常に怖ろしかつた事を告げられた時には私も餘りの不思議に驚いて了つた。その時間も私が恐怖に襲はれた時刻と恰度一致してゐた。』

キンタール博士がアンチエルの醫學協會で發表した報告は思想傳達の顯著な例である。

「ルドビコと云ふ七歳の小兒は、彼の有名なイナウヂの様に何んな問題でも解く奇才を有つてゐたが、ある日この兒の父は、この小兒をして解かしめやうとする問題を當の小兒が殆んど聽いてゐない事と、母が其處に居なければ小兒は問題を解き得ない事を發見した。

つまりこの小兒に問題を解かしめる爲めには母はその答を見てゐるか又は心中に有つてゐなければならぬのである。この事から父は、子供が推理するのではなくて、推測するのであるといふ事、言葉を換へて言へば、子供は母の心を読むのだと考へついた。そこで彼はそれを確める爲めに妻をして辭書を開かしめ、母が今、何頁を見てゐるか子供に尋ねた。子供は即座に四五六頁と答へた。十回も同じ様な事を繰返したが何れも間違ひはなかつた。

斯様な原因から、或る文句でも一と通り母の眼に入れば子供は誰れに問はれても、すぐ答へられる譯である。』

凡てこれ等の觀察は、心と心との間には相通する何物かの存在を吾々に證明するものである。夢の中で、遠距離の物を見たり、聞いたりする事の例に就てはモーリス、ローリノー氏から知らせて呉れた。それは氏が瑞西のフリボルグ縣ドムデイデーイルの牧師タツツ氏から得たもので、次はそ

の概畧である。

1100

「一八五九年十一月の中旬、私は當時十八歳の青年であつたが、一夜、床に入つて寝てゐた。

夢の神が何時間前から私を揺すぶつてゐたかは知らないが、私の心に不思議な幻影が現はれた。私は年寄つた父の悲し相な顔を見た。父は私の住んで居るフリーボルグの近くの町から二十四吉米も離れてゐる田舎の古い家から、「愛するヨセフよ？ 今、父はお前の妹のヨセフィンが巴里で死にかゝつてゐると言ふ悲しい知らせをお前に向て書いてゐるのだ。」と話された聲に眼が覺めた。私はその時、「あゝ夢でよかつた」と獨り言を言つて再び寝つて了つた。すると又、同じ幻が現はれ、「愛するヨセフよ！」と言ひ出して前と同じ事を繰り返した。そして最後に「お母さんはこの悲しい出来事を知らないのだ」と附け加へた。

私は驚いて床から飛び起きた。そして、「何うやら唯だの夢ではない様だ」と考へた。兎に角、着物を着て時計を見た。丁度十二時半であつた。

翌朝、私は大學へ出かけた。所が、少し忘れ物に氣が付いたので、再び自分の部屋に戻つて來た。是時向ふから室を監督してゐる門衛の爺さんがやつて來て、私に何やら小さな包を渡して、「今し方貴方の郷里から來られたと云ふ立派な紳士が見えて、これは貴方の父さんからの大切な

御手紙が入つてゐるのだから、貴方が歸られたらすぐ渡して貰ひたいと被仰つてお歸りになりました」と云ふ。私は大急ぎでその包を開いて見ると、父からの走り書きの手紙が入つてゐた。「愛するヨセフよ！ お前の妹のヨセフィンが今、巴里で死にさうになつてゐる。この悲しい知らせをお前に知らさなければならぬ。お前の母はまだこの悲しい事を知らないでゐるのだ。電報が來たのは今晚十時であつた。その時私はこれをすぐお前の母さんに知らしては可くないと思つた。今は十一時だ。間違ひなく明晩此處へ來て呉れ。私はこの老齡では迎もこの悲しい勤めを果す事は出来ない。お前が代つて行つて貰ひたい」と

右の記述に間違ひのない事を誓言する。私は尙昨日の出来事の様記憶して居る。

一九一八年四月十八日、ドンデエにて 牧師 ヨセフ、ドータツツ

夢と現實との一致を論證する事は、此處では未だ不可能である。この場合は息子に向て書かんとした父の思想がすぐ傳はつたものと認容する外はない。

凡てこれ等の事實は何れも、心靈の作用は肉體と獨立して存在するものであると云ふ事實を立派に裏書して居るのだ。

次はフオアサツク博士が自身に起つた遠感的現象の經驗である。實際この種類の事は當時に於ては

1101

餘り注意も拂はれてゐなかつたのである。

『私がまだ醫學研究生としてドビューレンの病院に助手をしてゐた時であつた。一夜、私は父が病死した父を見て、堪らない苦しさを感じた。前の日曜に會ふた時には父は丈夫で居つたので、餘りこんな事に懸念するのは自分の意志が弱いからだ、自分で氣を取り直さうと思つて見ても、瀕死の父の姿が絶えず心に浮んで來て私を苦しめた。そこで念晴らしに出掛けて見る氣になつてサン、ジェルマンへ行くと、果して父は肺炎を起して寝てゐた。それから五日後には遂に此の世を去つたのである。』

遠感即ち以心傳心的現象はあらゆる形で現はれる。毎日の新聞からもこの種の觀察の反響が尠なからず見出される。中にも、一九〇六年八月二十三日のデーリー、テレグラフに見えた一通信員の娘の話などは一寸面白い現象である。それは三つになる娘が毎晩皆んなと一緒に祈禱してゐたが、ある晩、彼女は露西亞から英國に向つた祖母の爲めに航海の安全の祈禱を拒んだ。彼女は「祖母さんは今着いたのだから今晚からお祈りしなくてもいいのよ」と再三繰返して言つた。そこで、「なぜお前は今夜に限つてそんな事を言ふの？」と聞くと、娘は極めて眞面目に、「え、私は祖母さんの乗つたボートが港に着いたのを見たもの。」と答へたので、通信員は念の爲めにその日を書き留めて置いて、後

で母からの通知と照して見ると、事實、子供が祈禱を拒んだ晩の前日に祖母が無事に彼地に着いたと云ふ事が分つた。つまり子供が夢で彼女の安着を見たのである。この通信員はその妻君も矢張り遠感力を有つてゐたと云ふ事を述べた。それは或る夜、彼女は汽船「グレート、イースタン」號の甲板上で爆發が起つたのを夢に見た。彼女の夫はそれを聞いて大に笑つたが、翌朝の新聞を見て始めて驚いたといふ事である。

ストラスブルグから巴里までの夢中に於ける遠感的透視力の實例に就ても、舊友ドベルマン夫人から次の様に知らして呉れた。

『先生、私は一九〇一年一月に經驗した遠感の實例を御報告致します。私共は以前から巴里に居りましたが、その年の一月末に母の葬式を營む爲めに私共夫婦はストラスブルグへ呼ばれたのです。この地は私共に取つては殊に思ひ出の多い所で、それに着いた日などは空には一面に雲が渦巻いてゐました。恚うした環境から更に深い印象を受けた私は、その晩から種々な夢に襲はれました。或る晩などは私は激しい苦しみ感じて、私の一番小さい子供の上に二枚の板が落ちて來て、それに挟まれて出られなくなつた子供は苦し相に「お母さん」と私を呼んだ夢を見たのです。姉にもその事を話しましたが、その後は二人とも別段氣にも留めないでゐたのです。二三日

してから、私共が巴里に歸つて來ると、迎へに來た召使が、「ジュリアンさんは大變よくおなりになつて、もう仕事してお出で々す」と言ふので、私は「一體何うしたと云ふのだ？ 病氣にでもなつたのか？」と尋ねますと、召使は反つて驚いた様子で、「まあ！ それでは少しもご存じなかつたのですか？ あの方はお留中に足に怪我をなさつて數日の間、家に引籠んで居られたんですよ」と答へました。

息子が歸つて來てから詳しく訊きますと、頭の上に積み重ねてあつた板が、ふとした機みで落ちて來て少し許り怪我したが、大した事でもないので別にお知らせもしなかつたのだと云ふ事でした。そこで私はストラスブルグで見た夢の事を話し、そして「不思議な事には、その怪我した場所がお前の工場ではなくて、今まで餘り見た事のない工場でお前が板の間に挟まつて中々抜出るに困難してゐる様子であつた」と告げますと、息子は「全くその通りで、場所は隣りの工場でした」と答へました。それから、その日は晴天であつたと言ひました。唯だ、自分がお母さんと呼んだか何うか、それ文は記憶してない相です。

息子は夜寝てゐる中に私を呼んだのでせうか、彼はよく夢を見て呼ぶ事がありますから、そんな事もないとも限りません。但し斯んな暗合の例は今まで一度もなかつたのです。

巴里にて バラリー、ドベルマン」

吾々は既にこれ等の眞實な、卒直な、そして正確な話が如何に千種萬様な形を成して現はれるものであるかといふ事が分つた。同時にそれは吾々の肉體は凡ての眞實を含んでゐない。換言すれば肉體文では總ての實在を認める事が出来ない」と云ふ事を明かに證明して居るのである。

茲に又、遠方に起つたある事件を極めて精細に夢中に見た一例がある。

それは著者の親戚の一人イゾアール夫人——マルセーユの人で、一家と共に五十年以上も其處に住んで居る——に起つた事で、彼女はこの奇妙な夢に就て私に詳しく話して呉れたのだが、更にそれを簡略に書て欲しいと頼んでやつたら次の様に答へて來た。(二二〇二信)

「私がマルセーユに居つて、ボークルーズ縣の田舎町ソルグにゐる私の友達が、一人の男に捉へられ、美しい髪を斬られてゐる夢を見て驚いて起き上りました。

二三ヶ月後、この婦人が病氣の爲めに本當に美しい髪を斬られ、その上、頭を残らず剃られて了つた事を聞いたのです。そして夢と事件とが同日同刻であるので、私は未だによく記憶して居ります。

イゾアール」

精神には距離と云ふものが存在しない。そこで、見た人の心靈が見らるべき場所へ送られるのか、或は、見られる人が遠方に在る見る人の方に作用するのか、抑も亦、兩方から同時に感應するののかといふ問題が起こる。併し、思想にとつて空間とは一體何を意味するものであらうか。

或る事件、病氣、死などを遠距離から見ると、この種の経験のない人々が考へる程に爾く率れな現象ではない。吾々はこれから更に正確に死を見た多くの場合に就て研究を續けて見やうと思ふ。次の観察の如きは遠感と關聯した現象である。(クロヴェー夫人著「自然の不明瞭な側」から引用した。)

「H夫人は數年前ネリー、ハンロンと云ふ召使を雇つた。彼女は極めて忠實に働く婦人で休みななどを要求することは滅多になかつた。それで、夫人も出来るだけ彼女を優待して使つてゐた。或る日、ネリーは珍らしくも數哩先の町に行つて見たいから一日の暇を貰ひたいと申出た。夫人は勿論それを許す積りでゐた。然るにH氏が歸つて来て、ネリーの申出を聞くと、それは困ると言ひ出した彼は恰度その日に客を招待する事になつてゐたのだ。彼女が居なければ非常に差聞へる。殊に彼女の外には地下室の鍵を預ける者がない。一人で客を接待したり、酒の番をしたりする事が出来ない」と云ふのが彼の不賛成の理由であつた。けれどもH夫人はネリーを失望させるのを氣の毒に思つたので、夫人自身がその役目に當る事にして、兎に角彼女の願を許した。ネリー

は大喜びで、なるだけ今晚、遅くも明朝は歸りますと言つて出掛けて行つた。

その日は何事もなく済んだ。誰もリネーの事を考へなかつた。纏て葡萄酒を出して来る時間になつたので、H夫人は鍵を持ち、他の召使に籠を持たして地下室に下りて行つた。梯子段に足を下した刹那、突如、夫人は大きな叫びを擧げて倒れ、そのまま寢臺へ運ばれた。夫人に跟いて行つた女中は他の朋輩に、「階子段の所にネリー、ハンロンが満身びしよ濡れになつて立つてゐるのを二人で見ました」と怖ろし相に語つた。H氏は召使達を馬鹿だと叱つた。H夫人は手當がよかつたので、間もなく少し意識を回復した。そして眼を開くと彼女はすぐ「あツネリー、ハンロニー」と叫んだ。それから全く正氣に回つて、話が出来る様になると、夫人も亦女中と同じ事を言つた。夫人は梯子段の下にネリーが今水から出て来た許りの姿をして着物から雫を垂らして立つてゐたのを見たのだと語つた。H氏はそれは必度錯覺に違ひないと幾ら夫人を諭しても、彼女は聽かなかつた。終にH氏は「今にネリーが歸つて来て、お前を喰ふだらう」と言つた。

夜になつても、翌日が來てもネリーは歸つて來なかつた。二、三日過ぎてH氏も漸く不安に襲はれて來たので人を方々に出して搜索した結果、市場へ來て、夕方頃歸途についた事までも確めたが、遂にネリーの行衛は分らなかつた。彼女の死體が河の中に發見されたのはそれから隨分經

つた後の事である。けれども未だにその死因は疑問となつて残つてゐる。』

召使の幻影が夫人の前に現はれたのは、その遭難と同時にあつたに違ひない。即ちネリーが常住敬慕してゐた主人の所へ歸つて來たのであると想像するのは必ずしも理由のない事ではない。兎に角、この遠感的觀察は正確と明瞭な點に於て特に注目すべき價值あるものである。

遠距離に於けるこの種の精神的視覚は、初めは一寸解らない象徴的な形を取る事がある。自分は巴里から二四〇吉米離れたベリーで起つた夢について次の手紙を受けた。(六七二信)

『八月二十九日から三十日にかけての夜、私の若い友達で、五年前政府の役人と結婚してその當時紐育に住んでた人の夢を見ました。私は夢でその若夫婦の室にゐました。彼女は寢巻を着て、髪を背に垂れ、眼には一ばい涙を漂はせて子供を抱き乍ら立つてゐました。そして、その子供の頭や胸は痛く瘠せ衰へて苦しうに泣いてゐました。この時私は二人の男が何やら大きな物を持って來て室の真中に置いたのを見ました。最初、それは子供の棺の様に見えたので、子供はまだ死なずに母の手にゐるのだなと思ふと、何が何やら一向分らなくなりました。暫くすると、棺が段々大きくなつて、終には大人の身體を入れる事が出来る位になりました。間もなくこの二人は白布で包んだ長い死體をその棺の中に入れたのです。』

若い妻は前にも増して啜り泣いてゐました。彼等は彼女の一方の手を取つて棺と共に後の方に押し出さうとしてゐたのですが、彼女は激しく抵抗して行く事を拒んでゐました。その中に子供も、家族も消えて、室にはこの世に二人とない愛人の亡骸と彼女丈になりました。

多くの夢と同じ様に、私の夢も終りは混亂して了ひました。眼覺めた時には唯だ限りのない痛々しい印象が残つてゐるだけでした。私は室内の掃除を手傳ひ乍ら、下女に昨夜の夢の話をししました。下女は私の友達をよく知つてゐるのです。

翌日、即ち九月一日の朝、私の夫は悲しい知らせを持つて部屋に入つて來ました。それは三十六歳になる友人の葬式の通知でした。夫が吃り勝にそれを読んで呉れた時、私は何とも言へやうのない感に打たれました。友人は一八九二年に巴里に流行した怖いコレラに罹つて、八月三十日の朝四時と五時の間に死んだのです。

この病人が到底恢復の望みないと宣告された時、若い妻君は、せめて友の醫者(私の夫)が居つて呉れたなら或は夫を救ふ事が出來たかも知れないと考へてゐたといふ事でした。

誰がこの不思議な一致を説明出來ませうか。實際私は心の中で友人が棺に入れられたのを見たのです。そしてすべての事が私の既に述べた通りだつたのです。

一八九九年六月六日

エー、フェロン

二一〇

斯様に種々の確實な、そして極めてよく一致してゐる経験を前にして、而かも吾々は尙ほそれを認容しない譯にいかうか。

予は尙以心傳的視覚に關して伊太利の通信員エヂスト、デル、パント氏から前者に劣らない程珍らしい報告に接した。(一、〇二三信)

「或る日、ツールーズからバリ迄汽車に乘りました。その時、私と同じ仕切の中には大層目立つた風采をした中年の紳士が居りました。間もなくその紳士と話を交へる様になつて、哲學や、社會主義や、宗教の事まで語り合つてゐる中に、彼は數年前の怖ろしい不幸から今は非常な信仰家になつたと云ふ事まで聽きました。

彼の話に依ると、彼の全家族はツールーズの大洪水の時に溺死して了ひ、それから數日後に、彼の夢に溺死した子供の中の一人の死體が或る所の水の下に横はつてる姿を見たので、翌日その場所に行つて見ると、夢と同じ場所に本當に子供の死體が発見されたのだと云ふ事でした。私の見たこの紳士は、話し振りから、態度から何處かの立派な教授でもあらうと思はれました。彼はこの悲惨な自分の不幸に就て見知らぬ人に話したのはこれが最初だと言つてゐました。私は斯様

な教養ある紳士が涙ながら嘘を話したとは如何にしても信じられません」

茲に又、夢の中で頗る變つた事件を、而かも遠隔の地で見た面白い例がある。(生存する者の幻影)より拔萃)それはウインチェスターの中央寺院の僧職^{キヤン}ワアバートンが一八八三年七月十六日の日附の下に書いたもので、左にその梗概を掲げる。

「私は當時辯護士をして居つた弟のアクアンワフバートンの所で一、二日滞在する豫定でオツクスフォードから出掛けた。そして彼の家に着いた時、彼から私に宛てた手紙が卓上にあつた。それには今晚ウエスト、エンドの舞踏會に行くが、一時頃には歸つて来るから、それまで待つて貰ひたいと書いてあつた。私は安樂椅子に横になつて暫時の間まどろんだと思ふと、私は驚いて眼を醒まし、あッ！ 弟が墜ちた！ と叫んだ。弟が應接室から明るい舞踏室へ出て行く途中、梯子段の第一段から足がからんで眞逆様に墜ちて、肘と手を挫いた夢を見たのである。無論私のまだ行つた事も見た事もない家である。それから私は夢の事も忘れて再び寢入つた。三十分後、弟が不意に歸つて來たので、また眼を醒ました。その時、弟は一大變お待たせしました！ 實は今し方私は、もう少しの處で大怪我をするのでした。舞踏室から出て來る途中、梯子段の一段目から墜ちたのです。」と語つた。」と

二一一

彼は今まで幻影などを見た経験は一度もないと言つて居る。

當時彼は熱烈に弟の事を考へてゐたかも知れないが、併し、それは弟からの隔感的の知らせではなくて、寧ろ遠感的の刺戟に因て起された心的視覚の様に思はれる。殊にウアバートン氏は煌々と燈の輝いてる舞踏室や、時計や、茶菓のならばすべてある卓をもはつきり見えたと言つて居る。そして、それが事實とよく一致してゐる所から見ても一層さう考へられるのである。

予は曾てこれによく似た例（梯子段から落ちた話）をランコニー（「未知の世界へ」四二七頁及四八五頁）に發表して置いた。

吾々は尙この心的視覚の珍らしい事實に就て次章に深く研究し、前章よりも更に一層確實な證據を以て心靈の卓越した力の存在を證明しやうと思ふ。

遠感的の視力、隔感的印象は夢中に限らず半睡の状態に於ても同じく現はれる。一八八三年十一月二日、辯護士リチャード、セアール氏は次の觀察を心靈研究會に提出した。

「或る日私は寺院の事務所で書物をして居つた。私の室は一つの窓で、そこに煙突もあつた。窓からは寺院の全部が眺められる。私は不圖、自分の眼と同じ高さにある窓の硝子を通して外を眺めてゐる事に氣が付くと、そこに私の妻の顔と頭とが映つて見えた。彼女は仰向に倒れて眼を閉

ぢ、顔色青ざめて死んだ様になつてゐた。私は思はず慄然として愕いたが、氣を取り直して窓の外を見ると向ふ側の家だけで何も見えなかつた。そこで自分はうとくと眠つたのだと獨りで決めて了つて、眠氣を醒ます爲めに、二、三度室内をぐる／＼廻つて、再び仕事にかゝつた。そして後は何も考へなかつた。

私は例もの時間に家に歸つた。その晩、妻と食事をしてゐる時、妻は今日姪をつれてグルーチエスター、ガードウンの友人を訪ねた事。そして晝食中であつたか、その後であつたか姪は何ういふ機みか誤つて轉倒して顔を傷け夥しく出血した事、それを見た妻が驚きの餘り氣絶した事まで語り出した。それで、私は晝間の夢の事を思ひ出したので、その出來事は何時頃であつたと尋ねると、二時少し過ぎですと答へた。私の幻影を見たのも恰度その時刻であつた。

リチャード、セアール

この事實を證明する爲めに、倫敦のグロチエスター、ガードウンのポール、ラード氏は次のやうに書いて居る。

「或る日、數人の婦人と子供が私の家で會合つた。セアール夫人は姪のルーシーといふ少女を連れて來た。彼等が騒々しく遊戯をしたり、卓の周りを駈け廻つてゐると、小さなルーシーは椅子

から轉び墜ちて軽い怪我をした。噪ぎの方が大きかったので、セアール夫人は驚いて一時氣を失つた。翌日吾々はセアール氏に會つた。彼は前日の午後寺院の事務室で仕事をしてゐた時、鏡を見る様に明瞭に妻が人事不省に陥つた姿を見たと言ふ不思議な印象を受けたと語つた。この幻像は確かに事件の瞬間に來たもので、否む事の出來ない事實である。」

この夫と妻との二人の心の間には瞬間的に相通するものゝあつた事は恐らく疑ふの餘地はあるま

50
遠感による十二、十五、二十、五十、百、或は二百哩又はそれ以上の距離を隔てた所で起つた事件の心的視覚は、この問題を研究した人には別に珍奇な現象ではない。

次の例は一九〇一年二月の英國心靈研究會の議事録に載せられたもので、大概の人が知つてゐる程何遍となく引用された事である。(筆者セント、アンドリュース大學のダヴィッド、フレーザー、ハリス氏自身の直語にかゝる)

「二、三年前、急な用事が出來たので、その週の終りに倫敦に歸れなくなつた事があつた。私はマンチエスターで折角の日曜を過すのが厭なので、土曜の午後マトロツチバスに行つて、そこで靜かな休日暮して、月曜日の朝の列車で歸る事にした。

先方へ着くと、私は停車場附近の、家族だけで營つてゐる小さな宿屋に入つた。そして、すぐ茶を命じて、自分は應接間に來てストーブに暖まつた。その日は殊更らに寒い雪空で、寒暖計は零度の遙か下に降つてゐた。

その時、この宿屋の客と云ふのは私一人であつた。私は茶を待つ間、火の前の大きな安樂椅子に氣持よく腰掛けてゐた。邊りはまだ左程暗くもなかつたが、さりとて本を讀める程明るくはなかつた。私は背を窓の方に向けて、何も考へずに、そして自分の現在居る所さへも忘れた程平靜な状態であつた。その時、何氣なく壁や、其處に掛つてゐる繪を見ると、それが何時しか倫敦の自分の家の前になつた。私の妻が入口の階段に立つて、箒を持った人足と話してゐた。

妻は非常に困惑した様子であつた。私はすぐその男が貧窮してゐるのだなと感じた。私は彼等の話を聞かないが、その不幸な男が妻に助けを乞ふてゐるのだと何物か、私に教へた。この時、宿の女中が茶を運んで來たのでこの幻は消えた。けれども私はこの幻影から何やら強い印象を受けた。そして自分の家に屹度こんな事が起つてゐるのだと思つた。そこで妻に宛て、詳しい事を知らず様に、そしてその男を捜し出して出來るだけ助けてやる様にと手紙を書いた。

事實、倫敦の私の家へ年若い少年が訪ねて來て、歩道と階段に積つた雪を掻くから一ペニーを

貰ひたいと下女に申出た。そこへ襦袢を着た見すほらしい男がやつて来て、「どうぞ私にやらして下さいー。この子供に一ペニーを恵まれたつて、それで駄菓子を買ふ位なものでせうから全く無駄な事ですー。私はパンを買ふのです、私には家内もあり、四人の子供もあります、それに皆病で寝てゐるのです。食べる物も薪ありません。どうぞ私にやらして下さいー」と哀訴した。下女はこの二人を待たして置いて、妻へその事を告げたので、妻は出て来てこの不幸な男に會つて彼の口からもその貧乏な事情を聞いた。私はこの瞬間の場面を同じ時刻に見たのである。恐らく憐れな男の傷ましい有様が深く妻の心に印象を與へて、それが私に傳へられたものであらう。

妻はその晩自分でこの男の家を訪問して、出来るだけの事をしてやらうと云ふ約束をした。實際、その家族の憐れな有様は全く男の言つた通りであつた。妻は食物や、着物や、薪や、金を出来るだけ助けてやつた。月曜日の朝、私の手紙を見た妻の驚きは言ふまでもない。二、三日の後、私が自分でこの男に會つた。彼は實際私が幻に見た通りの男であつた。それから彼は牛乳配達の仕事を見つけて二週間ばかり私の家の區域に働いて居つた。

「ダヴィッド、フーサー、ハリス」

この實際的觀察は物質的の眼や、網膜や、視神経や、脳などは少しも共通する所のない心靈の力の

存在を絶対に證明するのではないか。此處に作用したものは唯だ精神だけであるまいか。それは遠距離の間に起つた心的相通現象でなくて何んであらう。事實、觀察者は單に場面を見た許りでなく、彼の妻と乞食との話の性質までも會得したからである。

生存者の間の靈的、心的相通の現象は、既に前にも言つた通り屢々聽覺の形をとる事がある。人は音聲又は危急の叫びを聞く。この音聲、叫びは要求、期待、計畫或は遠方からの命令の一種を意味するのであつて、それは是非共應じてやらなければならない重大な知らせである。茲にも、コルフのゴネミス伯爵ニコラス博士の經驗した顯著な例がある。

「一八六九年には、予は希臘の少佐相當官の軍醫であつたが、陸軍大佐の命令でツアーン島の守備隊附に補せられた。予は赴任の途上、この島の海岸から二時間航路位の距離に近づいた時、予の心の底の方から何遍も伊太利語で、「早く、ポルテラに會へ」といふ聲を聞いた。予は當時健康に何の異状もなかつたので、恐らく聽官の錯覺だとは信じ乍らも、それにしても不思議な事に考へてゐたのである。ポルテラはツアーンに住んでる人で、氏とは十年許り前に一度會つたきりで、予とは親しい知己でもないから、予が故ら氏の事を考へる譯はないのだ。予は同船者と話をしやうと思つて耳を塞いで見ても駄目であつた。その聲は引續いて聞えて来るのである。予が

愈々上陸して、直ぐ旅館に着いて、自分の室でトランクを開けてる間にもこの聲は絶えず予を苦しめてゐた。暫くすると、宿の女中がやつて来て、今、一人の紳士が是非予に會つて話したい事があると言つて戸口に待つて居られると告げた。予は「何といふ名前の方？」と尋ねると、女中は「ポルテルさんと仰しやる方」と答へた。氏は眼に涙を湛へて入つて来た。そして彼の息子が重病に悩んでゐるから一緒に来て診て貰ひたいと言つた。

その息子といふのは五年前から激烈な精神病に罹り、ツァーンテの醫者達から見離された程の患者であつた。予が行つた時は裸で空いた部屋に監禁されてゐた。彼は一たび發作して來ると、口笛を吹く、咆哮する、吠える。その他色々な動物の叫び聲を出すので甚だ物凄く思はれた。時々彼は大蛇の様に胃のあたりで身體を曲げたり、又は恍惚の状態で跪いてゐたり、ある時は妄想で描いた幻像と喧嘩して見たり、時には長い假死の状態に陥る事もある。予がこの部屋の戸を開けた時には、彼は激怒して予に飛び掛つて來たが、予はちつとも動かずに、じつとしてゐて腕で彼を掴へ、暫く彼を見据えてゐる中に彼の眼は段々狂暴性を失つて身體は震へ出し、間もなく床に倒れて眼を閉じた。そこで予は催眠術の按手を施したのであるが、三十分経たない中に彼は全く催眠状態に陥つた。それから續いて二ヶ月半許り治療してやつた。その間予はこの患者から甚

だ興味ある現象を一度ならず経験した。彼は全快して以來まだ再發した事はない。」

一八八五年六月六日附でポルテラ氏から、ゴミネヌ伯爵へ送つた次の書信は、ポルテラ家に起つた前記の事柄を立派に裏書して居る。

「私は長らく代議士をして居りましたが、貴下がツァーンテに着かれるまでは私は少しも貴下を存じませんし、また嘗て貴方から一度も私や私の粹に言葉を掛けられ申した事はありませんでした。事實、貴下が軍醫としてツァーンテにお着になつてから私がお目にかゝつて始めて粹を診て頂く氣になつたのです。

私共は彼の生命の助かつたのは第一は貴下に、第二は催眠術のお蔭と信じて居ります。茲に署名して貴下に満腔の謝意を表します。

署名人

クリソブレヴリ伯爵デメトリオ、ポルテラ
ローラ、ポルテラ（夫人）

クリソブレヴリ伯爵ディオニジオド、ポルテラ

アナスタチオ、ポルテラ（全快者）

證人

人

ウアツサブーロス、ロレンツオ、メルカチ

も一つの遠方で物を聞いた例として、

「ナンシーのバルム博士は胃弱に罹つてゐるし伯爵夫人を診てやつて居た。それは夫人の方から通ふので、博士は一度も夫人を訪ふた事はなかつた。夫人の邸は郊外にあつた。一八九九年の五月十九日、恰度この日の三日前に夫人は博士を訪問したのである。博士が外出先から歸つて控室を通ると、何處からともなく、「あゝ、苦しい！ 誰も私を救つて呉れる人はない！」といふ聲が聞えたと思ふと、續いて何か落ちる様な音がした。彼はその聲をい夫人のそれと直覺した。尙自分の印象を確める爲めに、家中の者に尋ねて見たが、誰一人夫人を見た者もなければ聲を聞いた者もなかつた。そこで博士は事務室に入つて、務めて自分の思想を統一し、自ら軽い催眠状態に陥つて夫人と會見した。そして夫人の様子や、動作を見た後懇ろに注意を與へた。

後間もなくい夫人は本當に博士を訪ねて來た。そして嘗て自分の受けた印象に就て詳しく博士に告げた。それは凡ての點に於て博士の印象と寸分の違ひはなかつた。それから博士は、「貴方が部屋へ歸つてから、何か邊を探して居られた様でしたが、あれは何でした？」と夫人に質ねた。すると彼女は「誰か私を見つめてゐる様な気がしたからです」と答へた。」

經驗のある觀察者のこの價値ある例に對してブリモイ氏は次の如く意見を述べてゐる。

それは確かに惱める者からの以心傳心的の叫び聲であらう。夫人の苦痛から叫ばれた哀訴が受ける者の潜在意識の上に作用して、聽覺の印象に變形されたものと思はれる。バルム博士は自己暗示に依つて自分の知覺の中心を形體化するに充分な催眠状態に身を置いて、その方法に依つて彼の患者の家に心的表現を試みて後彼女に答へたのである。それは夫人が後博士を訪ねて「誰か私を見つめて居る様でしたから」云々と報告した言葉に依つて充分に確められる。即ち一方には思想の傳達——病人から醫者への以心傳心的の作用があり、他方には傳達された思想に答へて、半夢遊状態に在る醫師は、精神を形體化して知覺の中心を患者の邊りに移遊せしめたのであつて、是が即ち靈的遠感作用である。

だが、この移遊と云ふ言葉は果して現象の眞想を正しく言ひ表はしてゐるものであらうか。恐らく心理的組織には、正しく見、或は感ずる爲めに、一點から他の點へ移遊する爲めに距離の存在を必要としまい。けれども、事實は恰も精神が或る距離を移行する様に見えると言へばさうも言へるのである。それは執れにしても大した相違ではない。如何なる形式に於て解釋しやうとも、それは精神組織に屬する異常な能力の顯著な證據でなくて何んであらうか。

そこで、吾々がこれから考量して見たいと思ふ遠方から聞える聽力——以心傳心的聽力と云ふ事、

若し人が心、精神、或は心的實在（吾々が如何なる語を用ひ様とも）が、肉體や、五官の範圍を超えて働くものであるといふ事を認容しない中は、この聴力も認める譯には行かない事になる。

次の記事はロード、フライエル氏の著書「幻覺」から引用したのである。

「一八七九年の秋、次の不思議な事件が起つた。その頃、私の弟の一人は旅行してゐた。或る日の午後五時半頃、私は明かに自分の名を呼ばれたのを聞いて非常に驚いた。それは確かに弟の聲だと覺つた。家中を捜して見ても彼の姿は見えなかつた。彼は今、四十哩も離れた所に居るのである。自分の呼ばれたと思つたのは屹度錯覺に違ひないと考へたので、後は捜す事も止めて、それつきり弟の事は少しも考へなかつた。六日の後、弟が歸つて來た。彼は「先日汽車から降りる時足を滑らしてブラットフォームの上に叩きつけられた事から、その倒れた瞬間に貴方の名を呼んだのは自分乍ら不思議でならない」と言つた。それで、私は何時頃であつたと聞くと、恰度私が呼ばれたと思つた時間に全く一致してゐたのです。」

予の照會に對してジョンフライエル氏即ちその遭難者から次の様に返事して來た。

「私は一八七九年旅行してゐました。その途中、グロスターに泊る事になつて、同驛に着いて汽車から降りる時、何うした機みか私は倒れたのです。驛夫はすぐ助け起して呉れましたが、彼は

「どこか怪我しませんか？ 誰かお連があるのですか？」と聞くので、私は「否」と答へました。

そして、「何故君は物好きにそんな事まで聞くのか？」と問ひ返すと、彼は「今、貴方がロードといふ名前を呼ばれたからです」と言ひました。私が家に着いて、その失敗の話をする時、兄は「それは何日の何時頃であつた」と聞くので、停車場に着いた時刻を答へました。すると兄もその時刻に確かに私の聲を聞いた事や、家中を捜した事を申したのであります。」

この話の筋合から考へても、この時の暗合は極めて正確なものである。電話の様に空間を通過して行つた聲である。

以上は實に以心傳心的即ち心的傳達の動かす可からざる多くの現象である。此等の現象は吾々が今日まで生理的心理學に依て學んで來たものとは全然異なる超越した精神の力即ち心波に依る遠距離の視力と聴力を示すのである。

予は思想の傳達に就て既に述べ來つた事を故ら茲に反覆したくはない。讀心の事實は已に幾多適切な實驗に依て十二分に證明されてゐる。左に特にメスニー博士から報告された夢遊病の状態に在る患者に於て博士自ら觀察した一つの例がある。

「予が研究中の患者は讀心し得る程に明晰さを加へて來た。そこで、患者の前に十二人の人を立

たせ、心の中に一つ宛の花を任意に考へさせる。そして患者をして其の人々の意中の花の名を言はせた。彼は少しも躊躇せずに関違ひなく言ひ當てた。恰度、人間の腹の中に在る本を読み擧げる様に指摘したのである。」

實際、この種の例は何百とあつて、最早珍らしい事ではなくなつた。

要するに思想の傳達と云ふ事は熱、光、電氣、太陽の磁氣の傳達と同様に確實な事である。

遠感的視力は眼の助けを籍らないで作用するのであつて、距離や、物質的の障礙に依て何等影響を受ける事はない。

それは空間に關係しないと同様に、時間にも無關係である。人は現在、過去、又は未來の事件を見得る。この心靈的事實は肉體の組織とは全く獨立した精神の働きである。

若し或る人が此の豫感や、以心傳心的感覺が肉體とは全然別な精神なるもの、存在を證明して居ると云ふ推論を否定して、これ等は腦に附隨する當り前の作用である。所謂精神などに基づくのではない。それは犬の嗅覺又は傳書鳩の本能と同様、決して精神の獨立存在を立證するものではないと云ふ假説を主張するならば、吾々はその人に向つて事實を虚心坦懐に分析すれば誰でも納得出来る筈であると答へやう。何となれば、それは思想の問題であつて、生理組織の問題でないからである。吾々は

見えざる世界、即ち心靈世界に住んでゐるのである。人々がこれ等の知覺に對して、無意識とか、潜在意識とか、下意識とか、或は其他何と呼ぼうとも、それは大した問題ではない。吾人が茲に感ずるものは作用に現はれた精神の本質である。心靈である。

それは網膜でも、視神經でもない。又使用される腦と交渉あるものでもない。あらゆる腦の作用を想像して見ても、腦の作用では他人の心の中の思想を読む事は出来ない。況んや遠く地球の反対面に起つてゐる事などを感知したり、未だ起らない光景などを見る事は出来ないのである。

然らばこれ等の傳達は彼のエーテル波に依て行はれるのであらうか。若し振動の現象中の光と同様なものに考へ得るとしても、尙光とは著しく異なる點がある、と云ふのは光は距離に依てその度を減少するが思想は同じ強さを以て完全に移送されるからである。そこで思想傳達の媒介物は果して何物であらうか。

近代のエーテル波動の原理は證明された。けれども、昔のニュートンの放射説は完全に反證を擧げられたであらうか。否な、ある放射は明かに認められてゐるではないか。太陽の光線の反撥作用は反て放射説を裏書してゐるではないか。極光はその原が太陽の放射に存してゐるではないか。イオンと電子は空間を横断して來るではないか。

吾々は次章に於て以心傳心的傳達以外の精神的透視力の絶対に否定出来ない證據に就て研究しやうと思ふ。けれども、多くの場合、以心傳心的現象即ち思想の照應が遠距離透視力と全く關係のないものであらうか、何うかを決めるのは極めて困難な事である。茲に又、多數の例の中に人の死ぬ刹那を視た事實がある。次の手紙は夢の中に彼の父の死を見た事を述べて居る。

『左の事件は貴下の御研究に多少の御参考になると思つたので、二年以來御通信し度いと考へてゐ乍ら、遂その機を失してゐたのです。唯だ私の名前を秘して頂きたい。

一九〇九年の正月、私はヴァンデーのサンマルタン、デ、ノアイエで公證人をしてゐた時であつた。

父母は當時モイテイエに住んでゐた。一九〇九年一月九日、私は父母を訪ね、健康上に何の異状もなく、頗る機嫌の良い父母と數時間話し合つて歸宅した。それから、二、三日の後も、父からも母からも別々に便りがあつた。その時も何の變りはなかつた。一月三十日の晩、私は父母の家へ出掛けた夢を見た。多くの人が應接間に集まつてゐて、床の上に敷いてある蒲團の上には父が死んで仰臥してゐるのだ。私は泣き出した。傍に寝てゐた妻は目を覺まし、私を起して、何うかしたのかと聞いた。「何んでもないんだ！馬鹿氣た夢を見たのだ。親父が死んだ夢を見たのだ！」

と答へた。

それは、まだ朝の五時半であつた。それから又、ぐつすり寝込んで了つた。

翌日、私は父が前夜十一時から發病して朝の五時半に亡くなつた事を始めて知つた。五時半と云へば私が夢魘に襲はれた其の瞬間である。父の家では私が夢で見た通りに、そして應接間に父を横たへて居つたのである。』

この遠距離透視に於て、以心傳心的作用が何れだけ働いてゐるのであらうか。吾々の蒐集した文書に表はれたこの種の證據は實際に數限りなくある。この新しい科學の樹は極めて澤山な枝をさしてゐる。そして其の枝の一つ／＼は特別の研究を要するのである。

大戦の間、軍醫少佐として従軍してゐたジャン博士からリシエツト教授の許に通知された七歳の少年の經驗した遠距離透視の話がある。

『十年程前、私は自分の村ヴァールのコゴリスで七歳位の子供の患者を取扱つてゐた。或る朝、子供の家から大急ぎで來て呉れと云ふ使があつたので行つて見ると、子供が突然人事不省になつたのだと言つて母親はおど／＼してゐた所であつた。母親の話に依ると、子供は例もの様に機嫌よく眼を覺まし、別に異状も見えなかつたが、十時頃、床の上に起き上ると、不思議な幻覺に怖

えた彼は一面に水を見た。そして父が溺れさうになつてゐるから早く助けて呉れと叫んでゐたと云ふ。當時、彼の父はニスに行つて留守であつた。私の着いた時は子供の興奮がすつかり鎮つたが、矢張り父の溺れるのを見たと言つてゐた。

間もなく、その兄弟からの電報で未亡人——事實母親はこの時から未亡人になつた——はニスに急行した。彼女の夫はその弟が水泳中痙攣を起して溺れさうになつたのを救はうとし反て彼が溺死を遂げたのである。それは午前十時頃であつた。彼は最後に「子供等が可哀相だ！」と言ひ残して息を引取つたと云ふ。」

もう一つはヴァール縣に奉職してゐる教師からの報告であるが、彼の希望に依て名前丈は出さない事にした。

「私の親族の一人が、或る朝、突然眼を醒まして自分の側に寝てゐた妻に、「これからすぐ起きて行かなくちやならない！ 泥棒が島に這つて、飲んだり、食つたりしてゐる。」と言つたので、彼女は寧ろ窘めるやうに、「此處からそんな物が見えますか？ 串談でせう！ まあ休んでゐらつしやいよ！」と答へた。けれども彼は確かに見えたと言ひ張つて、鐵砲を持ち出して島へ走つて行つた。籠て島へ侵入した二人の無頼漢を捕へて役場の留置所へ引致して行つた。

一九一二年一月二十三日

ヴァール縣にて

F

言ふ迄もなく泥棒は所有主の事を考へてゐたに違ひないが、まさか捕へられる事はあるまいと思つてたであらう。それは一面に於ては遠感的——以心傳心的作用ではなくて、遠距離透視の例とも見られやう。この事に就ては次章に詳しく取扱ふ事にする。

吾々の中は遠隔的相通現象の觀察は、現代から始められた様に考へてる人もあるが、それは全然間違である。一七五二年印刷されたラングレ、ドフレスノイ著の「論講」の第二卷には「夢の中に於て遠く離れた物象が精神と外界の空氣とその親和力に依て吾々の眼の前に現出する。百里を距てた人が、その友人の死を、死の瞬間に知覺した事が屢々ある」と明かに述べてゐる。

この事から吾々はベトラーク其他の觀察家に依て報告された種々の事實は既に十八世紀の或る哲學者に依て、恰も今日吾々が入れるやうに受入れられてあつた事が想像出来るのである。だが、吾々は彼等の解釋をその儘承入れる譯には行かない。それは現代に於ける吾々の解釋の方が幾分彼等の上にある事は言ふまでもないが、さりとて彼等の説にも自から相當の價値を有つて居る。吾々は決してそれまで破棄する様な事はしない。

人は一般に斯かる不思議な例は事實甚だ罕れであつて、その上何れも疑はしくあり、不確實なもの

であると想像してゐる様子である。併しそれは誤りである。予が五十年の生涯の間に以心傳心的事實や、事件の豫知や、死の豫感、又は未來の状態乃至場面、恚うした現象——一言にして言へば心的作用に就ては少くとも十人に一人は自分自身或は知人から直接に教へられてゐるのである。これをしも率れた事實と言へやうか。けれども、人は兎角この種の事實を隠蔽する傾向がある。如何にも許す可らざる事を瘦す様に努めて外聞に洩すまいとして居る。これは凡て誤つた教育と幻想的な恐怖の結果である。

以心傳心的事實にはより以上の基礎がある。如何なる宗教よりも、もつと普遍的な、鞏固な根底を有つてゐる。吾々がこの基礎の上に研究し來つた心靈上の事實は基督教がその幾多の宗教（新教、舊教、正教）と共に基礎としてゐる事實、或は猶太教、イスナム教、佛教或はその他の宗教の基礎となつてゐる事實よりも一層多く立證され、一層慎重に觀察され、一層完全に論議されてゐるのである。故に眞理を求むる爲めに一面に於ては宗教にその希望を托するものがあると共に、他面には吾々が現に考究してゐる科學的實驗の方法にその希望を繋いでゐる人々があると云ふ事は容易に理解し得る所であらう。

更に一言を付け加へる。光のスペクトル分析が光波に依て眼界から何百萬、何億萬哩離れた天體の

大氣中に存する物質の化學的成分を發見し得ると同様に、心靈放射の分析に依て、いつかは是等遠方の星の世界に住む生物の生命、思想と交通し得る事も不可能であるまいと思ふ。

既に今日に於て、明瞭に證明されたこの極めて遠い距離を隔て、働く精神的暗示に依て思想を通ずると云ふ事實は、ある特に微妙な波に依て一つの天體から、他の天體へと人間の意識を放射させる事が必ずしも不可能ではないと云ふ事を、自ら教へてゐるものでなくして何んであらう。

第七章 眼に依らない視力——遠感的相通現象を除く靈的視力

事件、現象は、それが既に確立された學說を支持する時よりは、寧ろそれを反駁する時に於て最も有用である。

サー、ハンフリー、デーグイ

思想を遠距離に傳達するのと同様に、言語若くは何等の記號に依らないで意思が作用する事を充分に證明してゐる諸現象は、吾々の内部には必ずや或る精神的存在——思考、意思——があつて、それが吾々の有機的感官の範圍外にまで作用するものであるといふ事を明かに教へてゐるのである。同時に數多の心眼現象も亦、是れまで述べ來つた以心傳心的現象や、思想傳達の作用などとは別に存在してゐる様なものの、矢張り是等の諸現象が互に相關聯して吾人の精神的存在を確實にし、それを補直してゐる事は言ふまでもない。

この特殊な問題も亦、それ自身頗る豊富であり、又種々な證據に依つて裏書されてゐる。予は數年前からその方面の研究を企てたのであるが、既にそれ丈で優に一卷を成す程の資料が蒐まつた。併し、それは追て發行される機會もあらうが、茲にはその中二三の重要な記録だけを引用するに止める。

この心眼的現象は極めて興味のある、そして確かに精神の未知の能力の一つである。或る人は平常の状態の下に——夢中又は自然的な或は技巧的な夢遊状態ではなく——この現象を見る事がある。併し、特に睡眠の状態に於て多く觀察される。

それは直接であつても、又は頭腦中の思想を通じても、此の遠距離透視の事實は、極めて明白な、そして非物質的な人格的要素が立派に吾々の中に存在する事を立證してゐるものと思はれる。腦が思想を分泌するのだと言ふならばそれは明らかに放誕な言ひ分である。併し腦が思想を送つて他の人の思想を索め、それを註釋し、それを理解せしめるのだと斷言する人があらば、察る亂暴である。それは原因と結果を混同してゐるのである。何故かと言ふと、今まで再三述べた通り、思想は原因であつて、決して結果ではない。それは明かに獨立して活動してゐるからである。

今茲に、科學者を憤らせる言葉があるとすれば、それは必ず「心眼」即ち「眼に由らない視力」、換

言すれば額、耳、腹、指頭、足、膝又は内的視力に依つて、不透明體若くは數百哩を離れた物を透視すると云ふ語であらう。何といふ無思慮な放言であり、矛盾な事であらうと彼等は頭から蔑すに相違ない。然り、額、腹、手足、膝は言ふまでもなく視覺の器官ではない。心の視力は決してそれ等の物を通しては行はれない。見るものは精神である。

不思議な程巧妙に出來てゐる眼の視神經組織が外部の刺激に對して極めて精密に適應する事を知つて居る生理學者は、これ等の映像がこの巧緻な器官なしに知覺し得るとは認めない。この精巧緻密な器械、それは原始地質時代の三葉蟲の極めて幼稚な眼から、人間の眼に至る迄の太古の有機的進化の極致であるに過ぎない。

白狀すると、予は心理學者である幾多の友人に依て既に肯定され、予自身でさへ催眠術者に依て眼の前に多くの實例を見せつけられてゐるにも係らず、久しい間、自ら進んでこの問題を研究する氣にはなれなかつた。殊に天文學者は尙更この種の問題に手を出す事を馬鹿氣た事に考へてゐた。偶ま田舎婦人の夢遊病者を見ても、人を瞞着する手品師と擇ぶ所のないものだと思つてゐた。

而かも、一八九九年予が始めて心靈現象の研究に着手して以來予の從來の考へは大ぶ違つて來た。拙著ランコニー「未知の世界へ」第八章中に掲げた夢中透視の四十九の實例は實にこの現象に向つて

予が裏書したものである。そして予はこの問題に對しては徹頭徹尾自由に、何等先入觀を容れずに研究して來たのである。又、自分が本書に於て「眼なくして見、耳なくして聽く事が出来る」と言明したのは、これらの働きは視覺、聽覺の感受性の過敏なるに依るのではなくて、内的——心的の感覺、精神的感覺である事を實證する幾多の事實があるからである。

遠距離視力と「第二次的」視力とは明かに精神に屬する卓越した能力の證據である。従つて腦の化學的、機械的分子の作用に屬するものではない。

吾々は辭書を開く時、その中に第二次的視力、二重視力、千里眼等の語を散見するが、而もそれ等の現象に無知なる爲め、その語が如何なる意味を示してゐるのか全然分らない事になる。事實吾々が最初持出した凡ての反對論は悉くそれ等の現象を誤解、錯覺、瞞着、詐偽或は單なる思想に歸したものであつた。吾々は眞理の前には男らしく低頭せねばならぬ。そして何處までも光輝ある眞理を追ふて進まなければならない。

予が茲に主張する論題は哲學的見地から見て最も重大な事である。何故かと言ふと、その結果はアリストテレスや、ロツクや、コンチャツクその他の感覺論派の誤つた説を矯正する事になるからである。五官を通らないで意識に入るものがない。言葉を換へれば「吾等の意識に存在する凡ての物は吾

等の五官を通つて来たものだ」とは感覺論者の言ふ所である。併し、若し眼を用ゐないで見る事が出来たら、それは内的な心的能力即ち感覺や、普通の視力とは全く獨立して存して居る或る未知の力に依るものである。斯くして吾々は五官によつては如何にしても受け得ない幾多の印象を得るのである。

そこで吾々は先づ遠距離の物象や、隠れた物を見るのは、他人の腦の中の思想を讀むのではないと云ふ事實を二、三の實例に就て研究して見やうと思ふ。但しこの讀心術の場合も亦、矢張り同じく精神的視力の一つである事は勿論である。由來予は新語の製造は余り好まないのである。況て未だ極めて幼稚な状態に在る現在の心靈科學にさへ、意味の徹底しない新語が多過ぎる程作られてゐる様に見える。唯だ眼界から隠されてゐる物を視ると云ふ事實に對して茲に *Cryptoscopy* (隠れた物を見るの意) と云ふ語がある。これは吾々現在の研究の對象を示すに最も適當した言語であると思ふ。

予はこの奇妙な心理的現象が最初何うして發見されたかと云ふ事に就て多年の間興味を以て研究して居つた。然るに有名なデドロワ及びダランベールの百科辭典の *Domnanbulism* (夢遊) なる語の下に次の様な物語が書いてあつた。そしてこの記事の證人がポルドーの大僧正であると云ふ所が尙更興味を惹かれるのである。

「この高僧は私に話した。彼は學校に居る時分、夢遊病者である若い僧侶を知つてゐた。彼は好奇心から毎晩僧侶が眠ると、すぐその寢室に行つて彼の様子を見てゐた。すると僧侶は起き上つた。紙を取つた。そして説教を書き始めた。

一頁書き終ると彼は大聲でそれを讀返した。始から終りまで讀み了つた。(吾々が若しこの行爲を讀むと言ふのなら、これは眼を用ゐないで讀んだと言はなければならぬ) 若し氣に入らぬ個所があると、彼はそれを訂正する。書き入れる。一層よくなる。

私はその説教の一篇の冒頭を見た事がある。それはクリスマスの時の説教であつた。その中に私は驚くべき訂正を發見した。ある場所に「この神の子」と書いて、それを讀返した時「神の」の代りに「尊むべき」(adorable)とした方が可いと思つたらしく、「神」と云ふ字を削つて、その上に正しく「尊むべき」と書き入れた。その後彼は「と云ふ字の次に *adorable* が續くとうつりが悪いと氣が付いて、*et* を加へて *Get adorable enfant* としたのであつた。

この事實の目撃者は夢遊病者が果して眼を用ゐないか何うかを確むる爲めに、彼が机の上の紙を見る事の出来ない様に、彼の額の下に厚紙をさし入れて見たが、彼はそれにも平氣で書き續けてゐたと云ふ。」

予が故らに恁んな古い記事を茲に引用したのは、自然的に又は誘發的に催眠状態に陥つた人の、視官から全然獨立した遠視力を有つてゐると云ふ争ふ可らざる事實が既に古い時代から認められてあつた事に就て、特に讀者の注意を惹いて貰ひたいからである。

これ等の夢遊病者や、催眠状態に在る人々の暗中に於ける視力の實例は、全然知らない人が想像して居る程罕れた事實ではなくて、知つて居る人も随分多いのである。予自身も一八六六年にホート、マルン縣のクレフモンのシャトーで、二十歳になる若い婦人に此の實例を目撃したのである。彼女は自分で何も知らずに、夜中に起き出て眞暗い所で裁縫とか、刺繡とか、晝間始めた仕事を續けるのであつた。成る程、彼の猫も、蝙蝠も、鼻も、木兎も同様に暗中の視力を有つてゐる。けれども、これ等の場合は精神的視力ではない。動物には特殊な網膜を具へてゐて晝間は少しも見えない種類もある。吾々は板の様な物でさへこの視力を遮ぎり得ない事から、この現象はX光線の力を藉りて寫眞を撮る様に、そこに不透明な物體を透視する何物かあるのではないかと想像する事も出来る。けれども、それは大膽な假説である。次の事實はよくそれを證明して居る。

吾々は暫く十八世紀の昔に溯る。

科學は徐々に進歩して來たのである。

一七八五年、メスモルの時代にピセグール侯は催眠術に依る人爲的夢遊状態の下に種々不思議な、そして随分骨の折れる實驗を行つた。その中の一つは、彼が十四歳になるアメーと云ふ若者に催眠術を施した場合に就て次の如く書いて居る。

「お前は何處か悪いのか？」と聞いた。すると彼は、

「一年前に石を腹に當て、運んだ爲め、血液がそこに寄つて半年許り前から絶えず痛むのです」と答へた。そこで私は又、

「直ちに癒ると思ふか？」と尋ねると、彼は、

「はい！癒ると思ひます、明後日の午後四時半に癒ります」と言ふ。その爲めに予はその翌日と次の日の十時半に二回催眠術をかけてやつた。彼はその通り癒つた。

彼は又、烈く頭痛がすると言つた。私は「それは何の原因と思ふか？」と尋ねると、彼は「腹から」と答へた。私は又、「腹と腦に何んな關係があるのか？」と問ふて見ると、彼は「それは管で繋がつてゐるのだ」と云ふ。そこで私は「その管が何の邊を通つてゐるのだ」と聞くと、彼は「大交感神経の邊りを指した。」そんなら何んで腹の痛みが分ると？」と質ねる。すると「指先で」と彼は答へた。最後に「お前は痛みを知るには自分の身體に觸つて見なければならぬのだね」

と念を推すと彼は「さうです」と答へた。」

その翌日、この若者は彼の各々指先に有つてゐる明瞭な磁氣的現象に就て報告した相であるが、茲ではその問題は吟味する必要はない。唯だピセグールの言つた事だけを次に掲げる。

『この少年は又、各々の指にそれ／＼異なつたある能力を持つてゐて、それが多少病人に効果があると云ふ事を聞いた時は私は著しく興味を感じた。メスメル氏も亦これと同じ様な事を知つてゐるが、唯だ此の少年は自分では恐らく斯様な觀念を有つてゐまい。若し此の現象が實際にある事だとすれば吾々はそれが夢遊病者の報告に一致して居る點のある所から、それを認め得るのであると言つてゐた。』

夢遊病者の視力に就ては決して一樣ではない。例へばアミー少年はその指先を使つて自分の患部を見たり、感じたりするが、恁んな特性を聞いたのは彼一人だけで、その他の者は大概そんな事をせずによく自分の事が分るのである。そして彼等は何々の物を「知る」とか、「感ずる」とか、いふ語の代りに漫然と「見る」と云ふ言葉を用ゐてゐる。けれども、「見る」と言ふ者に限つて多くは限に一丁字なき野人である。却て多少教育ある者に催眠術を施した場合に彼等は自己の感覺を表はすべき言葉の足りない事を訴へてゐる。終に彼等は已むなく「知る」とか「確信」とする

かの表現の言葉を使ふ。

單純な多數の人々が、夢遊状態に於て「見る」と云ふ命辭を用ゐて表現する感覺が何であらうとも、普通即ち自然の状態に於ける視力の現象は單にその淺薄な表象を吾々に示し得るのみであると予は信ずる。吾々の視覺は要するに外界の對照物に依て得られる一種の感覺に外ならない。吾々の言ふこの感覺は神經を經由して始めて吾々に達する。そして此の凡ての神經の中、唯だ所謂視覺と呼ばれる物のみはその構造に因て吾々に視界の感覺を與へる。けれども、凡て外界の物象は同様に他の感覺神經にも達するが、併し、それは直接接觸しない限りは視覺の上に何等の刺戟を齎さないのである。それ故に若し夢遊病の状態の下に、種々異つた結果が現はれるならば、そして若し夢遊病者が眼をびつたり閉ぢたまゝ歩き出し、衝突する物を避け、讀み書きし、凡て彼の日常なし得る事は勿論、それ以上の事さへなし得たとすれば、それは當然視覺の器官に依らないで、全く視覺と同じ感覺をその精神に運び得る程鋭敏なある他の方法に依て見得るものと言はなければならぬのである。然らば何うして此の視覺が現はれるか。この異常な状態に於て視覺を與へる神經とは何か。予は茲にそれを決め様とするのではない。けれども、この現象の存在する事は確實である。夢遊病者の視力はよくそれを證明して居る。何人もこの力を否定する譯に

は行かない。」

以上はメスマルの友ビセグール侯の語る所である。吾々は聽て此の觸覺と視力との同一なる事を他の實驗者達に依ても試みられ、そして此の昔の報告が反て明かに真書さるべき時の來るべきを思ふ。予は現在に於てそれ等の假説に就て彼是論する事を控へ、先づ最初に今日尙熾んに論争されて居る事實その物から驗べて見やうと思ふ。

此等の觀察は實に百三十四年間續いて來たのであつて、此の年月は吾々の時代を前の時代と區別するものである。而も其の間の大部分の説が余り興味が無い、只だ部分的に證明されたものに過ぎない。そして、それすら錯覺と過誤に充ちてゐる。併しその中には否定する事の出來ない價值あるものもある。此等から推すと、兎に角他の時代と異つた理解ある人々のゐた事が分る。

讀者は既に拙著「未知の世界へ」中の此種の實例を能く承知してゐる筈である。それ等の或る物は此處に短く再録することは餘儀なくされる程に著るしく特色ある物である。

例へばクロック博士がプランタン夫人に施した彼女の肺の大手術に際し、否定すべからざる解剖學的觀察、「未知の世界へ」五〇四頁）夫れは實際夫人は夢遊状態にあつて絶対に痛さを感じず而も自分の娘と話して居たと言ふ事である。又、ラガンデ夫人の矢張り夢遊状態にあつて自分の母の胎内

を見透したのであるが、その母は翌朝死んだが検屍の際見ると全く微細な點まで一つも違ひがなかつた。

博士は「母さんは長く生きてゐられると思ひますか」と尋ねた。「いゝえ、母は明朝早く死ぬでせう、何の痛みも苦みもなしに」と彼女は言つた。博士は又「では何處が悪いのですか？」と問ふた、すると彼女は「右の肺が萎縮してます。そして膠質の膜皮で蔽はれ幾分の水の中で泳いでゐます。併し母が病む所は特に其處です。」と答へて肩の骨の低い方の隅を指した。そして、彼女は「右の肺はもう呼吸しません。左の肺はまだ音がします。それで母は生きて居るのです。心臓の周りには少し水があります」と續けた。更に博士は「胃腸の工合は如何です」と問ふた。「胃と腸は健全です肝臓は白色で表面は顔色して居ます」と彼女は答へた。

事實その翌日病人は死んで解剖は行はれた。ラガンデ夫人は夢遊状態の下に極めてしつかりした聲で、先きにクロックとシャブレン兩氏に告げた事を少しも躊躇なく繰返して言つた。それで彼等は解剖を行ふ筈になつてゐた部屋に續いて居る應接間に彼女を連れて行つた。その部屋の戸はしつかりと閉ぢられて居たが、其處で彼女は次の室の外科醫の手が動くに従つて、彼女と共に居合はして居た人々に向ひ、「何故胸の眞中なんぞ切開さるんでせう。流血は右の方だのに」と言つた。

此の夢遊者によつて與へられた報告が、全く正確だつたと言ふ事が分つた。そして此の解剖の公式報告はドロンザート博士が書いた。

説明者ブリエール、ド、ポアスモン氏も此の事實の證人は未だ現に生きて居て、醫學界に於いて立派な地位を占めて居る人であると附言した。彼等の通信は各々別様に述べられてゐるが、併も其の眞實なる事については毫も疑を挟む者はなかつた。

けれども予は嚴格らしい學者達がこのお伽話見た様な話を聞いた時、彼等一同がわつと笑ひ出したのを見たことがある。

そこで茲に否定する事の出来ない心的視力の記事がある。

それは主人が穴藏に酒徳利を探しに行つて居たその間に、催眠状態に置かれて居た女中が「主人が今滑つて落ちた」と叫び出したと言ふのだ。彼が上つて來ると妻が先きに自分が地下室で踏み外して倒れたのを知つて居た事が分つた。(「未知の世界へ」より)

騎兵大佐の妻が夫から毎月催眠術をかけられて夢遊者となつた。その間に大佐は少し氣持が悪くなつたので、聯隊の或る一人の將校に手傳つて貰つた。彼は十日間位來たが、其後は姿を見せなかつた。或日大佐は妻に催眠術をかけて置いて、一向便りがなかつた此の將校は何うなつたかと聞いた。

すると夫人は「あゝ、不幸な方」と叫んだ。そして、彼の方が見えます。今X町に居られますが、自殺しやうとして居られるのです。ピストルを取り上げて居ます。早く驅けつけて行つて下さい」と言ふので、大佐はすぐ馬を飛ばして行つて見たら、その士官はもう自殺して了つた後であつた。

茲に又、ケーベル博士が一八六八年にストラスブルグで手術した若い娘の話がある。彼女は豫め此の外科醫に細かに自分の卵巢の脆狀腫瘍の事について話した時、頑固な醫師は、少しもそれを信じなかつた。そして手術して見るとそれが全部正確に、彼女の言つた事に一致して居たと言ふ事である。

(「未知の世界へ」五〇八頁)

此等の數多い種々の實驗は、メスマルの時から今日迄に幾らあるか分らない程澤山ある。私は此の上敷衍して説かうとは思はない。私は五十年以上も種々の場合の下に此等の經驗を研究して見たのである。

私が二十歳の頃、諸君なら世界を征服しやうと考へたり、凡ゆる物を理解し、解決しやうと望んで居る頃の年輩に、私は寧ろ當時に於ては問題にならない未知の人、即ち著作者アンリ、ドラアージュの事に興味を持つてゐた。彼は神秘夢想家で、又聖マルタンに教つた秘密學者であり、知られない哲學者である。そして彼はナポレオンの時の大臣シヨブタルの孫であつた。彼の話は常に繪を見る様

に事實ありの儘で而も極めて有益な事であつた。彼は長い間深く催眠術の現象を研究した。そして最初に彼が発見した事は既に彼の著作の中に引用されてある。

「アルフォンス、エスキロスと言ふ人は或る日面白がつて母に催眠術をかけてた。それから「機會と言ふものがありますか？ 例へば富籤の様なものに當るものですか？」と質問した。すると母は「左程六ヶ敷しい事とは思はない」と答へた。ではやつて見て下さいと言ふ。其處で催眠術をかけられた婦人は閉き始めた。併し最初の中は何の手答もなかつた様であつたが、遂に母は「數が分つた」と叫んだ。「何號です？」「八九號」「そうですか今に出るでせう」「他に見えませんか」「いや」「何うして？」「神様がそれは望まれぬのぢや」

事實八九號が次ぎに引いた時出て來た。

方式は變つた。これは一八四八年の事である。今日では最早「神これを望まれぬ」とは言ふてはならない。只單に「もう何も見えない」と言ふ可きだ。

これは皆、單に機會に依るものであつたかも知れない。併し後章「未來を知る力」の所に、更にバルトン、ラリーの行つた四つの番號を豫知して讀んだ例がある。此處には順當に行くと、一に對する二、五五五、一八九迄の當らない機會がある譯である。

ドラアーヂュは更にサン、マルス侯爵夫人の家に起つた次の事件を報告して居る。これは當時有名な千里眼であるアルキンスが、マルシエから催眠術をかけられた時の話である。

「ヴィクトル、ユーゴーは、例の物好きから此降神會に出席したが、其の前に家で小包を拵へてその中に大文字で一つの單語を書いて置いた。その夢遊者は其の包みをひつくり返し、ひつくり返して調べてゐたが暫くして「P o l i i」——ポリと讀んで……次の字が見えないぞ……それから i, q, r, o, e, それで八字か、いや九字だ、t がは入つて P o l i t i q u e 「ポリテイツク」……確かに然うだ。淡綠色の紙に書いてある。ユーゴー先生はいつぞや先生の御宅で拜見したことのあるバンフレットから之を引出されたのだ」と言ひ出した。マルシエは直ぐにヴィクトル、ユーゴーにそれが本當か如何かを問ふたが、此詩人はこの明白なる言明を直ちに承認した。以來、ヴィクトル、ユーゴー氏もその著名なる辯護者の數に入る事になつた。」

今日では、此の事を念讀と呼んで、それで最早説明が済んだ様に澄まし込んで居る。それは大膽の波の傳達とも見られない事もないが、併し此現象こそ心的視力ではあるまいか。

疑もなく夢遊者は遠距離から視力を借らずにヴィクトル、ユーゴーの頭の中の事を看破したのだ。恐らく之に反對する者はあるまい。尙ドラアーヂュの小さな本には殆ど此の時代の面白い報告に充た

されて居る。茲に議論は姑らく措いて、その中の二三の事實文を紹介する。

「一八四七年十月十七日の新聞には、催眠協會に關する記事を掲げてある。それにはアレキシスが唯だ閉ぢられてあつた本を五六頁透して讀んだばかりではなく、封じた手紙も讀んだと言ふ事など書いてあつた。一言に言へば之は超自然的な光彩で磁化されたものを照して見る流動磁氣の様な物があつて、それに依つて精神は容易に不透明の物の中も貫いて見えるのである。これは普通の想像力などでは到底及びもつかぬ魔術的な事をする働があるのだと言ふ事を物語つてゐる」。此の降神會はアレキサンダーデューマが證人として彼の家で朝野の名士達の居合はす前で行はれたものであつた。そして此の報告には立會者が皆署名して居る。

是時の立會者の驚きは又格別であつた。デューマはその目撃した現象に大變好奇心を持ち出して、吾々にもアレキシスに催眠術をかけて見ないかと言つて居た。夢遊者は彼に示された指輪の來歴を語り出した。そして始めてその指輪の持主になつた日と時とを言ひ當てた。恰も彼は空を翔ける鳥の様に彼の心靈は人の意志の翼の上に乗つて、チュニスや、その附近の有様を驚く程正確に物語つた。實際彼はチュニスを單に其名前文しか知らなかつたのである。つまり彼は全く時間と空間を征服した譯になつたのである。この集會の記事にはまだ澤山色々な事が書いてある

が、これには随分異論を唱へた人もあつた。中には此の不思議を現に見た人々の名譽の手前、正面からその率直さを攻撃する事は出來ないので、彼等は奇術師がヘール、フリーダンの手を借りて毎晩奇怪な真似をロアイヤル宮の部屋でやつてゐるのだ、單純な人々は巧みに彼等に利用されてゐるのであると宣傳したものである。併し不幸にして此の有名なフリーダンはミルヴィル侯に宛て「もう彼の様な不思議な事を行ふ力がなくなつたが今迄なした事は決して手先で誤魔化したりするのではない」と云ふ事を手紙で言明した。

その時の手紙は恚うである。

「マルシエ氏宅で降神會を催した時であつた。私は持參して來たカルタの包みを解いた。箱は取換へられない様に目印をつけておいて、トランプをよく切つた。私の番になつた。私は出來るだけの用心をしてゐた。併しそれは徒勞であつた。アレキシスはテーブルの上の彼の前に置いた許りのカードを指して私を止めた。そして「私にはキングが來る」と言つた。私は「貴君はそんな事は何も知つて居ない筈だ。未だトランプの札は發はれて居ないのだ」と言ふと、彼は「今見えるでせう。續けてやつて御覽なさい」と答へた。私は事實スベートの8をめくるとスベートのキングが出て來た。好奇心に驅られて讀んでやつて見る。私が引出す可き札を一々彼が前もつて告

げるのである。その時カードは食卓の下にしつかりと手に握つて居た。斯様にして私が探んだカードの一枚一枚に應じて、彼はめくつて見ずに自分の手の中から一枚のカードを抜き取つたが全く私が出したのと同じ物であつた。この驚く可き結果は決して偶然や手先の熟練に依るものでない事を私は固く信ずる。

一八四七年五月十五日

パリにて

ロヘル、フリーダン

此の有名な奇術家のフリーダンは「此んな驚異すべき事は自分には出来ない」と彼の良心から公けに宣言して此の催眠現象の確實なる事を辯護して呉れた譯である。」

右はドラアージュの話である。彼の夢遊者が卓の下に隠されたカードを読んだと言ふのは内眼が讀んだのでない事だけは疑ひない。そして、その對手が突然この現象に遭遇したのではなくて豫めこの事を告げられて居たのである。殊に彼は鑑定家として知名な人物なのである。

茲にドラアージュの抱いて居た觀念や、その舊式な意見は別として彼が残して行つた面白い記録を回想して見やう。私は勿論彼と同じ様な考を有つてゐるものではない。例へば彼は「原罪によつて人間が失つた種々の特權の中、第一に數ふべき物は靈魂と交る可能性である」と書いて居る。けれども今日に於て彼のイヴ、アダムの墮落に由來すると言はれて來た原罪などと言ふ觀念を眞面目に信じて

ゐる者があらうか。

吾々には最早その時代（一八四七—一六七）の言語に用がなくなつた。今日では「液體磁氣」「悪魔」「他人の意志の翼の上に運ばれる魂」「超自然的の占斷」と云つた様な用語を口にする者はないけれども、吾々のこれから研究せんとする所は、矢張同一の現象であり、同一の問題である。

此研究に於て最も困難とする所は飽くまでも公明正大に獨立の地歩を固持して行く點に在る。そして吾人の研究せんとする現象は一般的に現はれる様な性質のものではない、人は動もすれば、斯様な實驗に際して兎角自己の先入的觀念が先に立つのであるが、此の觀念こそ實に理性の自由を阻礙する悪魔なのである。

予は今、隠匿されたカードの記號を讀むと云ふ話を掲げたが、ポドモール氏の著書「幻影と思想移寫」の中にも次の様な事が書いてある。

「有名なアレキシス、デイディエーは、綿布でしつかり眼を覆はれてゐ乍ら尙ほ物を讀める様な風をしてゐた。彼は卓の上に裏返へされたカードを讀んだり、或は密閉された封筒や書物の中の文字を讀み分けたり。或は又、包みの中に閉ぢ込められた物を言ひ當てたりした。彼の當て方が余りに鮮かだつたので、彼の有名な神秘術者のロヘル、フリーダンは一八四七年彼を訪問して自

ら確信した旨を宣言したのであつた、けれどもアレキシスは職業的の男であり、而も彼の催眠術者たる、マーシエとは友人の間柄であつた。兎に角、これ等の事は、非常な場合や未だ不可解な或る状態の下に、よく働く普通の視力の作用に歸すべきものであると云ふ事は恐らく疑ひあるまい。事實この種の實驗に於て、當事者自身は如何なる方法に依つてその知識が自分に到達するのであるかと云ふ事は殆んど知らないのである。従て彼等は全く眞面目に超自然的能力を有つてゐる者であると自稱して居るのである。」

心靈研究會創立者の一人であり、又著名なる心理上の著述家である、フランク、ボドモールは凡そこれ等の現象は素より妖怪の問題迄も思想の推移を以て説明し得ると信じて居た。彼は凡てその筆法で何でも説明してゐたのである。彼の説に従ふとアレキシスは彼の施術者であるマルシエを通じて思想の傳達を受けたか、或は彼の仲間即ち彼の側にありて現にカードを見て居た人達から噂々の裡にそれ等の人々の腦に影じた印象を傳へられたのであると云ふのである。

米國の令名ある心靈學者にしてボドモールにも優ると云はれて居るコロンビヤ大學教授のゼームス、ハイスローブは又、此カードの實驗に關して次の様な見解を有つてゐる。

「アレキシス、デイディエーは神秘術家の巨頭ロベール、フーダンをすら體若たらしめたのであ

つた。デイディエーを實驗した紳士は何れも相當な人物なのである。故に彼が卓上に裏返へされたカードを讀んだり、或は閉ぢられた本の字句を讀んだりした事は明かに事實であつたに違ひない、然し只、小手先の胡魔化しを防ぐ爲めに如何なる注意が拂はれたかと云ふ事に就ては何等確實なる報告がないのである、此點から見ると吾人は其所に何等かの異常なものを發見したと稱する理由を有し得ないのである、そは單に、如何にせば輕信なる民衆を欺き得るかを示した一例に過ぎないものである」と。

斯様にボドモールや、ハイスローブは彼のアレキシスの爲めに熱心にそれを研究せんとしたヴィクトルユーゴーも鋭敏の批評的頭腦の持主であるアルホオンス、カールも、アレキサンダー、デューマも、アンリー、ドラアーヂュも、ロヘール、フーダンも皆凡て一ぱい喰はされたのであると云ふのである。察する所、マルシエはそのカードを目撃し、その記號を讀み、そしてこれを凡て彼の被術者に向て或は合圖を以て、或は人の氣に附かない様に思想を傳達したのであると、

彼等は又手先の胡魔化しがあつたのではないかと疑つた。然しロヘールフーダン自身の云ふ所ではそは絶対に容すべからざる疑問である。而もこの實驗は私自身の室で行はれた事で、私は幾度となくそれを目撃したのであつた、そして彼等の相手をつとめたのはロヘールフーダンの相續人であるカゼ

ヌーヴ及びヤコブの二人であつた。凡てこの種のカード遊戯に於て奇術師達は常にその相手を打敗るのは神秘的な透視の術によるので、カードは一定の順序に置かれてあり、奇術者は非常な巧妙にその順序を變へずに之を切る。そしてその次にその仲間も再びそれを切るのであるが、それは豫め最初の男が用意して置いた通りにするのであつた。これはヤコブの如き細い指の男にも又はカゼヌーヴの様な太い指の男にも容易すく出来る事である。其時私の室にはムロシエ將軍、天文臺長フェリスティスランド氏、バルマンティーエ將軍及びエルゼフェイ氏等知名な學者が立會人となつて居たのである。そして彼等も亦、このカードの遊戯には熟練した人々で仲々巧みにこの方法を行ふのであるが、併し相手の爲めに直ちにその手を看破されて一同は大いに驚嘆したのである。併し彼等の行ふ普通の遣り方でも、買ひ立ての包みのまゝのカードでは出来ない事である。又マーシユーがアレキシスの一味であると云ふに至つては、これこそ單なる疑問に過ぎない。殊にアレキシスの催眠中に於ける能力をよく知つてゐる者に取つては殆んど問題にならない事である。

尤も觀察の方法が必ずしも嚴密であつたとは言はれまい。そして其の結果に於ても一樣ではなかつたであらう。けれども、それ丈で直ちに凡てを否定するのは理由のない事である。従てアレキシスを通常の間人であると言つて了ふのも早計である。「穀穀と穀物とは區別せねばならぬ」。アレキシスの非

凡な能力は何うしても疑ふ事は出来ない。

要するにポドモールに取つては、此等の心的視力を表はした種々の場合は思想傳達の問題である。又ハイスロープは特種な場合と云ふのが全く疑問であつて、自分の調査した凡ての場合（以心傳心的現象を含む）も未だ何れの理論によりても説明し得ないものであるとした。そして彼は此等の場合を何れも死者の靈魂との交渉に嫁して了ひやうとする傾きがある様に見える。彼は千里眼的の現象には概ね降神的の要素が伴ふものである」と言つた。

無論觀察の不充分なる間は假説を固持する譯には行かない。科學の殿堂は一日にして成つたものではない。天文學は幾十世紀に亘る間の長い動搖の後始めて眞理に到達したのである。吾々の第一に爲すべき事は現に問題になつてゐる事實の絶對的眞否を確める事に在る。上述の場合に於て潜在的意識の傳達や遠感的腦の波動が關係して居ると云ふ事も有り得ない譯ではない。

兎に角未だ假説の状態に在つても、又幾多の否定説があつても此「カード讀み」の事實だけは最早争ふべからざる事實なのである。其は既に屢々證明せられた處である。

一八四〇年に公にされた『磁氣と夢遊現象に關する手記』の中に、フラバール博士はある友人に送つた次の手紙を掲げてある。

「リガード氏は何時か彼の有名な夢遊者カリステを私の宅に連れて来て多くの人々の前で彼を眠らせたり、眼を閉じてカードを當てさせたり、又、都合よければその他不可解な實驗をやつて見せると云ふ約束をした事は既に貴下にお話した事であります。

愈々昨日リカード氏はその實驗を六十人の面前で行ふ事となりました。此等の人にはテスト博士を除いては中々疑ひの深い容易に信を措かない人達許りであつたのです。左に昨日の状況を御報告申上ます。

カリステが睡りに陥ちると、すぐ彼とはまだ一面識もない二人の者が各々綿布を以て彼の眼を塞ぎ、更にその上を大きな絹の手巾で被ひその端を前に廻して鼻の邊で確つかり結びました。吾々は念の爲めその眼隠しが充分であつたか否かを確めた上にもう一つ其下側に厚い綿布を挟んで最早如何なる視力も通す事の出来ぬ鐵壁を築いたのであります。

そこで八ツのカード包みが運ばれました。何れも皆新しい物でした。吾々は手當り次第にその一を擇んで包装を裂いて愈々實驗に取り掛りました。リカード氏は夢遊者と離れてゐて而かも一語も發しません。その上彼は又カードを持つてる者の手にある物を見る事は絶対に出来ない位置に居たのです。斯くして用意が整ふと、恰も二人の熟練した同志の間に遊戯して居る様に、夢遊者

は自分の札や相手の札を間違なく読み當てました。

事實は上述の通りです、三人の者が代り合つて各々二回ゲームを行つたので、都合百枚のカードがカリステの前を通過した譯になります。彼は何れもそのカードの記號を正確に読み當てました。その有様は宛も彼が平常眼を開いて普通の状態で巧みに遊戯をやる時と少しも變りはなかつたのです。

此實驗は尙ほ手先の胡魔化しの結果と言はれませうか。

否、吾々は皆、夫々充分の注意を以て監視し、検査し總て指で觸れて見、更に凡て分析的に調査したのであります、例へばその眼隠しには人の氣に附かない様な裂目でもありはしなかつたかと云ふ事までも見たのです。否、斯る事は絶対にあり得ないのです。何となればその眼隠しは二握りの綿布と一枚の絹手巾を以て疑ひ深い連中が念を入れて施こした物だからです。

そんならその眼隠しは下からでも見えたのではないかと云ふ疑ひが起るかも知れませんが、眼隠しの綿布は更にその下側からも押し込んで完全な被ひを爲して居たのであります。

又、其のカードは豫め用意されて居たものでは無論ないので、凡ての包みは悉く未だ收入印紙が貼附された儘のものであつたのです。

更に又、施術者が何等かの方法を以て被術者と連絡を取つたのではないかと云ふ事も當然起る疑ひであるが、施術者は前述の通り一語も發せず、動きもせず、カードも見なければカリステに觸れもしなかつたのです。

最後に何者か何等かの方法によつてカリステに向て適當に合圖をしたのではなかつたかも知確かに問題になります。各人は皆沈黙を守つて熱心にその結果を待つて居たのです、而もその結果の現はれる毎に人々は唯だ驚嘆と嘆賞の聲を發するのみでした。

そこで、吾々は眼隠にもカードにも、夢遊者にも、又施術者にも更にその相手にも何等欺かれた事は絶対にないと斷言し得るのであります。』

此實驗はドラアーチュの報告した彼のロヘルフーダンの實驗より以前に行はれた物である、此他にも吾々はまだ澤山の實例を引用する事が出来るが要するに大同小異である、而も前に掲げた様に何んでも否定して了ふとする人々は、これ等の明瞭な實驗に對しても尙實驗者が自分よりも、より巧妙なる者に胡魔化されて居るのだと言ひ張つて居るのであるから、吾人は最早斯かる頑固な人々の論議に一々對手になつて居る事は徒に時間を空費するのみであると考へる。

頗る懷疑的な判事のセギエー君は嘗て個人的にアレキシスの家を訪ねた事がある。

「今日午後一時に私は何處に居たか」と彼は尋ねた。

「書齋においでした。書齋には書類が散らかつて煙草の煙が渦巻いて居りました、そして、圖を書いた物と小さな機械が置いてあり、それから机の上には小さな呼鈴がありました」と答へた。そこで、セギエー君は、

「いや、私の机の上には呼鈴はない筈だが」と言つた。

「間違ひではありません、私にはよく見えます、貴下の書き物をなさる卓の左側の机の上に一つ置いてあります」と彼は主張した。

「よし、そんなら私は此事を確めて來やう」

セギエー君は家へ急いで歸つた。それは氏の夫人が午後から其處に置いたものであつた。

此は正しく遠距離視力である、此場合は質問者の心裡を讀んだり、その思想から暗示を得たりしたのでないと云ふ事は明瞭である。けれども茲に面白い例がある。

ドラアーチュの話によると、外交官として令名高いかのサン、オーレル伯爵は最初催眠術を「莫迦氣た眞似」であると卑下して居たが、後その眞想を確めてからは男らしくその所説を改めたと云ふ事である。

彼は嘗て如何にアレキシスの評判が高くとも、實際完全に密閉された紙片を読める筈はないと信じ、彼の術策を明にして見せると云ふ事の賭をした事があつた。彼は紙片を密封した厚い封筒を携へてアレキシスの家へ出掛けて行つた。大使は先づ、

「此包の中に何かがあるか」と尋ねた。

「四ツ折りにした紙片があります」

「そしてその紙には何か書いてあるか」

「半行ばかりの文句が書いてあります」

「君にはそれが読めるかね」

「讀めます。併し、私がそれを讀んだら貴下は多分その文句を取消される事になるでせう」

「いや、そんな事はない筈だ」

「いや、屹度なさるに違ひありません」

「若し君が旨く讀み當てたなら、これから我輩は君の云ふ事を何んでも信用しやう」

「それでは直ぐ御信用下さい、其紙には「余は信ぜず」と記されてあります」

當時のアレキシスの名聲が想像以上に高かつた事も容易に分る。そして又ドラアーヂュが彼の著作

「アレキシス」によりて説明せられた磁氣催眠を書くに至つた徑路も自ら明らかになる。予は此著書の中に次の様な珍らしい文句を見付けた、一例を挙げると、「人工的睡眠即ち催眠に陥ると、人間は透明なる事物を透して遠距離の物をも見る事が出来る、……長老ラコルデル署名」又他の所には、「若し此世に人の精神に視力を與ふる科學ありとすればそは正に磁氣催眠である」アレキサンダー、ヂューマ署名』と記されてある。此著作は専らアレキシスの能力に關して書いたものである。

催眠術者マーシエに施術せられた夢遊者アレキシスの特種な視力、即ち千里眼は此等の問題を研究した人々が悉く承認したのである。

次に掲ぐるものは彼の行つた啓示の中でも最も顯著なるものの一つで、それは公設質店の盜難事件に際し、その支配人が非個人的に即ち支配人として其の事實を言明した事であつて、その犯人は實にアレキシスによつて發見され遂に逮捕された。此の記事はプロボス氏自身が「ルベイ」紙の編輯者に送つた手紙の中に收められたものである。

「一八四九年の夏であつた。使用人の中の一人が大金を携帶して姿を隠した。警察では凡ゆる手段を旋らして犯人の搜索に努めたが何等の手掛りも發見し得なかつた。その時私の友人なる辯護士ラスタン氏は私には告げずに密かにアレキシスの許を訪ふて相談した。

「盗まれた金額は非常に多額なものですな、約二十萬フランにも達して居ます」と夢遊者は答へた。

其は正に其の通りであつた。アレキシスは更に其の犯人は書記のドユーボアであること、彼が逃亡先はブラツセルのオテルデフランスであるとまで告げた。

ランスタン氏は早速ブラツセルに向け出發した。犯人ドユーボアは確かにオテルデフランスに投宿して居た事が判つたが、ランスタンの到着する數時間前に此地を去つた事も分つた。

アレキシスは更にドユーボアがスバの賭博場に見えると明言し、且つ彼が刻々その金を失ひつゝある事、而して彼が捕縛される時迄には恐らくその全部が費ひ果されて了ふであらうと云ふ事をも豫言したのである。ランスタン氏は其夜の中に出發した。彼はブラツセルに於て其處を通過する法律上の手續の爲めに手間取つたので、彼がスバに到着した時は既に犯人の退去した後であつた。

そこで彼は已むなく巴里に歸つて、再びアレキシスを訪ふた。

アレキシスは又。

「貴下は最早我慢が出来ますまい。實を云ふと、ドユーボアはエー、ラ、シヤベルに行つたので

す、そして彼は大分損失をしたので、益々自暴になつて賭博をやり續けて居ましたが、今彼はスバに歸つて來ました。彼は屹度残りの小額も全部賭博で失つてしまひませう」と言つた。

私は時を移さずブラツセルとスバの官憲に通知を發した。すると數日の後、ドユーボアはスバに於て縛に就いたのであつた、而して彼は總てを悉く賭博で失つてしまつたのであつた。」

この事件によつて、アレキシスは單に彼の眼を閉ぢて視界の外にある書物を読んだ計りでなく、更に遠方に在る盜賊の高飛びをすら居ながらにして追跡し得たのである。

斯様にアレキシスの透視者としての評判は愈々高くなつて來たので、豫てその効果に就て幾度も失望して居つた催眠術者ラホオンテーヌは早速人をリヨン市から巴里に遣してアレキシスの言ふ所の眞否を確かめたのである。此の事は「ラフオンテーヌの記録」中に明記されてあるが、それは單に上に述べた所を繰返すに過ぎない事柄であるから茲には省略する。

疑ひもなくこの「心的視力」は夙に其の時代から認められて居るのである、而も現在に於て反てこの現象を顧みる者が殆んど無いと云ふのは餘りに矛盾した話ではあるまいか。私はこれを現代人の輕佻浮薄に歸したくはない、又その正直さを缺いて居ると云ふ事も疑ひ度くはない。私はこれを社會一般無智の爲めと信じる。

自然科学者のアルフレッド、ラツセル、ワレースはブリトンのエドウ井ン、レー博士の自宅に於てアレキシス、デイディーエーを招いて第十四回の降神會を行つた時の記事を書いて居る。此の集會に於てアレキシスは例の通り眼を密閉してカード遊戯を行ひ自分や相手の札を読み、又はその時の來會者が自ら書いて封筒に入れた紙片を読んだ。彼は又如何なる書物の如何なる行でも尋ねられる通りに讀み當て、その他箱や容器の中の内容物までも當てた。

レー博士も亦著名なるロヘール、フリーダンとアレキシスとの間に行はれたカード遊戯の有様を述べた後、更に次の様に附言した。

「フリーダンは自分のポケットから一冊の本を取り出しアレキシスに向つて八頁先の何行目でも一行讀む様にと云つた、すると透視者は針で自分の讀む行のしるしを付けてから四ツの言葉を読み上げた、それは相違なく其處から九頁目の註文された行の文字であつた。」

フリーダンは此れには全く驚嘆したと言明した。そして、その翌日彼は遂に確認の署名をしたのである、最後に彼は「予は此處に記された事實は全然正確である事を肯定せざるを得ない。予は此事實が手の先の技術とは如何にしても考へられない」と言つた。

ラツセル、ワレースは又、グレゴリー博士がその著「磁氣催眠に關する手記」の中に證言した透視

の諸例を引用して居る。一例を擧ぐると、

「これ等の現象を見やうとして降神會に出掛けた人々の中にはその途中商店へ立寄つて堅果ナッツの殼の中に格言を刷つた紙片を入れてある一種の辻占を數打も買つて行つた者もある。彼は其れを殼の中に入れた。透視者はその中から一つ宛取り出して殼の中の格言を讀んだ。殼を割つて一々その格言を檢べて見ると、一つの誤りもなく正確に讀まれて居た、而もその格言の中には九十八字もある長いものもあつたのである。

ワレースは更に附言した、「余は中にグレゴリー、メーヨー、レー、ハドック等の諸博士並にその他多數の人士の當時に於ける口供書を持つて居る。此等の人々は何れも立派な觀察者であり且名譽ある紳士である。吾々は此等の人々が描つて胡魔化されたものとは信する事は出來ない。況して態々此現象を確むる爲めに集つた懷疑的な諸博士や、ロヘール、フリーダンの様な慧眼な經驗者を前にして斯様な疑問は無意味である。」と。

そこで吾々は、諸觀察者から報告された透視に關する幾多の證言を悉く瞞着手段の結果とするか、或は若干の者のみが特に内的感覺を有つて居つて、唯だそれ等に就てのみ研究の價値ありとするかと云ふ岐路に立つものである。透視力の様に稀なものであつたなら、この通常の視力の眞實性を立證す

ることも恰度この驚くべき透視能力の存在を確むると同様に至難の事であるに違ひない。故に此の事實を自ら研究した人々には勿論、彼の可能事と不可能事とは頭から區別が出来ること云ふ様な幼稚な觀念に欺かれてない人々に取つては、此透視能力の存在は絶対に否定し得ないのである。

此等の實驗は既に何百回となく行はれ、殊に一八二〇年乃至一八六〇年の間に於て盛んに試みられたのである。そして此の現象の價値とその絶對的な真相を知る爲めには、吾々は唯だベルトランド博士、ベタタン氏、アゼ將軍、ラホオンテーヌ氏、コメット博士その他此時代に於ける幾多研究家の書物を読めば充分である。嘗て最も熱心な透視研究者の一人フラバール氏は御用學者の巨頭にして彼の反對者である醫科大學教授ブイヤード博士に向つて高壓的な立會實驗を申込んだ事がある。然るに偉大なるブイヤードは「不輕信は予の自由なり狂信者フラバールは余に何等の申込をなす資格なし」と斷つて次の書面を送つた。

「貴下の所謂催眠術なる新問題に就いて予が一たび其の實驗に荏んだなら、予は直ちに從來の所見を變更するならんと期待されてゐる様であるが、予は決してその實驗に立會ふ事を拒む者ではない。けれども、若し予がそれを見た後で予一流の哲理を以て貴下が見て其を信するのは御勝手である。但し予がそれを見ても予は信する譯には行かないと答へたらば貴下は之に對して何とな

さる。貴下が予に告げられた實驗では未だ「眼によらない視力」と云ふ事を物理學的に不可能であるとの證明にはならない。予が嘗て大學で述べた様に「圓い正方形」が発見されたと云ふ新奇な報告があつても、予としては大學の所見に従ふのが最良の態度である」と。

一徹にして負け嫌なフラバールの耳には博士のこの返事が「余がそれを見ても信する譯には行かない。何となれば其は物理學的不可能事だからである」と云ふ意味には這入らなかつたと云ふ事は容易に想像出来る。そこで彼は此學識深い官僚的教授の偏見を嘲弄し始めた。すると教授は之に對して次の如く答へた。

「予はこれ以上言ふべき事はない。予は眼の助けなしに物を見得ると云ふ様な事を絶対に信じない。將來とても恐らく信じ得まい。予は随分珍奇な事も信じる。從て貴下の説が異常な問題であるからでもなければ、貴下の言ふ所を了解し得ない爲めでもない。それは貴下の提議が超自然であり、寧ろ自然に反して居り、且つ生理學上不可能な事であるからである。」と。

これに對しフラバールは一八三八年の當時に於て既に今日有識の士の間に唱へられて居る見解を以て次の如く答へたのである。

「可能の範圍を定めんとする事は、如何なる天才でも出来ない事である。それは可能と云ふ事は

空間や時間の無限なると同様に限定さるべきものでないからである。而して縦令吾々の理論を以て一時その範圍を劃しても、それは纏てその境界を脱して吾々の愚を嘲笑して居るのである。既に吾人の經驗は今日の不可能事が明日の可能事となる事を明かに教へてゐるではないか。例へばアメリカの發見、火藥の發見、血液循環の發見を始めとして、流動電氣に、羅針盤に、印刷に、避雷針に、飛行機に、血清に或は醫藥に皆さうである。而も理性は吾々に「矛盾のない所には絶對的に虚偽はない。確證のない所には絶對的眞理がない」と教へて居るではないか。

故に吾々は三つの角を有たない三角形や、兩端のない杖を認むる事は絶對に不可能であると云ふ事が出来る。それは矛盾して居るからである。けれども吾々には第一に頸背^{うなじ}で物を讀む者、第二に上腹部で物を聴き得る者、第三に數百哩遠方の物を透視し得る者、第四に未來を豫言し得る者、第五に疼痛に對して無感覺なる者、第六に自己又は他人の病を視得る者、第七に自ら治療し得る本能を有する者等の無いと云ふ事を斷言する事は出来ない。

否、何人と雖も自己の理性に抗する苦痛を忍んでまでも此等の歴然たる事實を不可能事に歸する事は出来ない。それは「可能事」に對して『汝は其れ以上進んではならぬ』と宣告する權利も力も持つて居ないからである。

勿論それ等の現象は異常である、けれども果して日常吾々が目撃するものより以上に異常であらうか、より以上に不可思議であらうか。そして又、より以上に不可解なものであらうか、自然界に於ては、凡てのものが悉く神秘とされて居る。凡てが不可思議とされて居るではないか。だがこの不可思議なものの中にも何人にも知れ渡つた奇蹟的な事もあれば又實際に甚だ罕なものがある。そして吾々は前者を理解して居るものと思惟して居る。それは吾々が絶へず見て居るからである、而して吾々は後者を否認する。それは吾々が極めて稀にしか見ないからである、然し吾々はその實何れをも本當に理解して居るのではない。唯、吾々はそれ等の存在だけを極めて居るのに過ぎないのである。」と。

アイヤード博士はその地位に於て遙かにフラバール博士に優つて居た。殊に彼は多數の無難主義の學者達を率ゐて居たので、フラバールの意見は當時に於ては容れられなかつたが、而かもアイヤード博士の傳統的な盲目説に優つてゐた事は言ふ迄もない。そしてアイヤード博士によつてその最高學説を代表されて居た所の醫學會も頑強に自説を固持して居たのである。

醫學會員及び科學會員であつて、且つ凡ゆる最高學界に關係を有つてゐたアイヤード教授は實に何事も自己の宗教的信仰の内に欽めて自由なる理解を絶對に爲し得ない、極めて頭腦の狭い小心者の典

型とも云ふべき人であつた。嘗て蓄音器の發明の紹介に際し、奇問を發して笑話を貽した物語の主人公として拙著「未知の世界へ」に紹介したのは實に彼であつた。それは一八七八年三月十一日の事、予は科學協會の會合に出席した時であつた。その日物理學者のジユモンセル氏は其協會へエヂソンの蓄音器を寄贈した。そして寄贈物の披露が済んでから、その器械はレコードに吹き込まれた文句を繰り返し始めた。すると其の席に會員の一人で最早分別盛りの年格恰をした頭の古い學者が居た。彼は初めは紹介者の厚顔を見るに堪へぬと云つた風に、ツンと顔を背けて居たが、聽て彼はエヂソンの代表者に向つてつかつか進んで行つて、その頸筋を掴へ「氣の毒だが吐言者（魔術師の一種）に瞞される様な俺達ぢやないぞ！」と呼んだ。

それから更に六ヶ月の後、即ち九月三十日の同様な會合に於ても彼は如何にも得意氣に次の様な言葉をした。

「予はかの蓄音器なるものは單なる腹話者に過ぎないものと確信する。予は一片の金屬が貴き人類の音聲を發し得るものとは如何にしても受け取れない」と、蓄音器は彼に取つては單に聽官の幻惑に過ぎなかつたのである。要するに斯様な人達は所謂「時の車の後に括り附けられ」自ら燈を掛の下に墮して時代に逆行し、進歩を妨げてゐる連中なのである。それは彼等の肩書が黙々として何事にも盲従

する羊の様な連中に擔がれてゐるが爲である。

アイヤード氏はアルセーヌ、ホーセイの醫師であつた。此面白い人物の著書「懺悔録」の中に彼はその最愛の細君の死も子供の死も、又後妻の死も皆彼の責任であると書いて居る。

以上は或る一派の學者達の所謂「科學的論法」なのである。これから考へても吾々は學士院會員の名譽ある肩書が、もつと知識を本位として授けられ、彼等の研究心を啓發する様にして欲しいと思ふ。

獨りアイヤード氏許りではない、同大學の彼の仲間であるシユブルイユヤ、バビネ等の物理學に關する學說を聽いたなら思ひ半ばに過ぐるであらう。

予の亡友であつたマカリオ博士は一八五七年下の様な事を書いた。「不透明なる物體を透し、且つ無限の遠方にも達し得る透視力は未だ一般の學者から認められるに至らない。又、少くなくとも既知の生理學的法則に反し全く不可解な事とはされてあるが、而も尙ほ確かに存在するもの様の思はれる」と更に彼は其事實を確むるに際し、

「ベレンヂュ博士は再三の實驗によつて遂にその事實を確信した、彼は幾度か自宅の人の居ない所で紙片に或文句を記し、其れを二重にも三重にも折り疊み、更に幾重にも包んで堅く密封した

のである。而かも夢遊者はその密封された文句を、不透明な封を透して讀んだり、或は封筒の上
にその文句を記したりしたのである。

此の現象は既に一八三一年醫學協會の委員によつて證言を與へられたもので、其報告を讀めば
實際次の様な事が書いてある。「同學士會の一員リープ氏はポケットから一枚の目錄を取出した。
すると夢遊者(そはボテ氏に施術されたブチダチス氏であつた)は大ぶ疲れた後で極めて明瞭に、
「ラバテーよ。人を知るは至難の事である」と讀み上げた。此終りの言葉は頗る細い字體で印刷
されてあつたのである。彼等は又夢遊者の眼(勿論それは閉ぢてあつた)の下に一枚の旅券を置
いた。すると彼はすぐ其を認めて「それは旅券である」と云つた。それから彼等は其旅券の代り
に武器の輸送許可證を取り出し、其裏面を出して夢遊者に示した。此許可證は極めて旅券と似た
ものである。そこでブチ氏は其が一定の形に切られた紙片であつて、よく旅券に似て居るもので
あると云ふ事又は言ひ當てたが、其紙片の何であるかは解らなかつた。彼等は其を裏返へして見
せた。すると、夢遊者は暫く考へた後、其が許可證である事が分つてその上の文字を明瞭に讀み
當てた。

その紙には「公認」と云ふ文字と、その左に「武器輸送許可」の文字が書いてあつた、次に彼
等は一枚の手紙を開いて出したが、夢遊者は英語を知らないので其を讀む事が出来ないと言へ
た。事實、それは英語の手紙であつた。

此實驗でブチ氏は可成り疲勞した様子なので彼等は暫時休憩する事とした。そして、ブチ氏が
平常骨牌が好きであつた所から、彼等は此の間に骨牌でもやつて見たら何うかと彼に奨めた。そ
こで前に大學の舍監であつたレイナル氏は彼とベーカ(遊戯の一種)をやつて百點を争つたが結
局負けてしまつた、彼等は故らにブチ氏を迷はず様に何遍も札をすり更へて見たりしたが如何に
しても勝つ事は出来なかつた。

此の時法學生で左半身が無感覺になつてゐたボール、ヴィルグラン氏もフォアサツク博士の爲
に催眠術をかけられた。彼も眼を閉ぢたまゝ色々な物を讀んだ。彼の眼瞼は實驗者が代る々々手
で押へて絶へず密閉されて居た。彼等は新しいカード包みを取り出し、その封を切つてよく札を
交ぜた上ボール氏に手渡した。するとボール氏はその中のスペートのキング、クラブの一、ダイ
ヤの七、ダイヤのク井ーン、ダイヤの八等を讀み當てた。

彼等はそれからハツソン博士が持つて來た一冊の書物を彼に渡した。その時彼の眼はセガラ博
士が押へて居た。彼はその表題の行は讀み得なかつた、そして彼は只五行目の「アンケチル」と

云ふ著者の名前文けを読んだのである。彼等はそれから其本を開いて八十九頁を出した。すると彼はその第一行目を明かに読み上げた。唯だその中には二、三の讀落しはあつた。

此等の事實は醫學會の名を以てハツソン氏が起草した報告書の中に明瞭に掲げられ、學術上からも立派に認められたものである。然し嚴密に云ふと此場合夢遊者が實驗者から思想の傳達を受けて、其の文句を読み當てたのではないかと云ふ疑問も起つて来る。成る程、學士會で行はれた色々の實驗の中には斯の種類のものもあつたかも知れない。けれども次の場合の如きは夢遊者に讀ませようとする文句は全く實驗者にも知られて居ないのである。

最近の事であつた。予の友人ベ博士は一夕ある晩餐會に出席した。席上には多くの美術家や文學者達が居た。彼等は皆互によく知合つた間柄であつた。その中には彼の有名な夢遊者アレキシスも居つた。マーシレレー氏は此の席上でアレキシスに催眠術を施した。この時ベ博士は次の室から未だ頁も切つてない新しい一冊の書物を持つて來た。そして、それを閉ぢたまゝ夢遊者に向つて何頁の何行目を読む様にと命じた。すると夢遊者は暫くの間頻りに考へて居る様に見えたが、やがてペンを借りてその命ぜられた行の文句を書き記した。そこで、一同は頁を切てその行を檢べて見ると、全くその通りであつたので、今更乍ら驚嘆したのである。實にその實驗は見事な成

功であつた。唯、その書物中の文句は英語であつたが夢遊者は其を書き記す時にそれを佛語に翻譯したのであつた。不思議な事には、それから數分の後、この夢遊者は二重折の紙片に大きな文字で「巴里」と書いたものを示されたが彼は其を読み得なかつた。

吾々は最早、「思想の移動」を以て此の場合を説明する事は不可能である。それは誰の眼にも未だ觸れた事のないこの新しい書物の内容を夢遊者は立派にそれを読み當てたからである。』

以上はマカリオ博士の述べたのであつて、實に今より約半世紀以前の出來事である。而も今日斯る事實を肯定せんとする吾々に對し、世人は動もすると、前後の考へもなく、徒らに攻撃を加へやうとするのである。これ等の事實は既に一八五〇年、一八四〇年、一八三〇年、更に溯ると一七八六年、或は一七七八年の昔にも發見されるのである。予が茲に、故ラスかる幾多の古い證據を持出した所以は唯だこの種の心理的現象が既に幾年かの昔——否、幾世紀の昔から明らかに認められて居たと云ふ事實を示したい爲である。然し乍ら吾々は更に更に研究の歩を進めて行かう。吾々が掘り下けて行く坑は未だ／＼豊富である。

予自身だけの經驗でさへ從來予が此の「精神的視力」の報告を耳にし、或は親しく自ら之を確認したのは決して一と通りな事ではない。一八六五年の夏、予は一ヶ月の休暇をハーブルの西方、ヘーブ

神のサントアドレッツスに過した事があつた。其の間に予は或る著名な醫師と懇意になつた。その醫師はコメットと云ふ天文學者めいた名前の人であつた。然るに彼の細君は豫てから透視能力があつて屢々その不思議な實例を夫の前で示してゐた。夫人は時々發作的に夢遊状態に陥り、其状態に在る間は眼を閉ぢ乍ら諸種の不透明體を透して物を讀んだり、掌中に隠された極めて細い物をも言ひ當てたり、或は人の考へを見抜いたりする事も出來た。それから又、隣室の出來事を手に取る様に見る事も出來、終には次の發作の起るべき日時さへも正確に豫告し得たのである。更に不可思議なのは自分の病氣を治療すべき醫藥の處方まで自分で發見したと言ふ事である。

コメット夫人が催眠的啓示によつて自分の病氣を癒やし得る様になつた顛末や、夫人の内的組織の透視力に關する報告はフラパール博士の著書「磁氣催眠に關する手記」の中に悉く採録されてあつて、最早その眞實を疑ふ余地のないものである。而もコメット博士の此觀察に次て又、アルフォン、ステスト博士が自身彼の細君について研究した同様な現象を述べてある。總て此等の研究は一八四〇年頃の事である。著者は「科學が此等の事實の價値を公然と認むるに至るまでには恐らく今後五十年の歲月を待たなければならぬ」と云つて居た。けれども、一八九〇年になつても尙ほ暗黒時代の產物である偏見は未だにその影を没してゐなかつたのである。否現代でさへ然うである。

時は目まぐるしく過ぎて行く。人類は遅々として進まない。巻頭に述べた様に予が此の研究を始めから既に半世紀余の歲月が流れ去つたのである。而して遙かに一八六五年と云ふ年號を回想する時、予は人智の進歩の餘りに遅々としてゐる事を必々感じる。

吾人當面の問題の解決を助くる幾多實驗の中から、予は茲に頗る驚異すべき一例を引用しやうと思ふ。此は前巴里病院附醫師ヂビエ博士の著書「事物の分析」の中に掲げられた報告の一つである。最初其事の發見されたのは一八八五年の四月であつた。後、博士は屢々立會人の面前でそれを實驗したのである。即ち視覚器官とは全く關係なく、單に催眠状態に於て書物を読んだと云ふ一例である。次はその當時の記録である。

『此の被實驗者は二十才許りの若いユダヤ婦人であつた。嘗て彼女は一種の睡眠状態に陥つた事があつた。其は昏睡でもなく、催眠でもなく、又夢中交話の種類でもなかつた。専門家はその睡眠状態を「透視催眠」と稱して居る、彼女が此の状態に陥つた時予は綿布を以て彼女の兩眼を被ひ、更にその上に廣い厚いナブキンや、絹手巾を巻き、頸部で確りと結んだ。予は先づ最初の實驗に於てその鮮かな成功に痛く驚かされたのである。事實予はその時迄は未だ斯の種の事に就ては何の經驗もなかつた。そして其後の長い研究に依て予に示して呉れた様な色々な事實に對して

も全く門外漢であつた。予は先づ書齋から手に觸れた本を一冊取出し手當り次第に頁を開いて其を催眠者の頭上に翳さした。本は彼女の頭髮から一寸位上に、表紙を上側にして支へられたのである。勿論予もその頁の文句を見る事は出来なかつた。斯うして置いて、予は左側の頁の最後の行を讀めと彼女に命じた、すると彼女は一寸の間黙つて居たが臚て、「あゝよく見えます！一寸お待ち下さい」と云つて彼女は更に語を續けて讀み始めた。「類似は統一を齎らす。何となれば若し精神にして……」其處で彼女は語を止めて「私には其れ丈けしか讀めません。そこに書いてあるのは其丈けなのです。私は非常に疲れました」と言つた。予は彼女の云ふ通り實驗を止め本を返へしてその文句を改めて見た。書物は哲學の本であつた。そして其最後の行は正に其催眠者がその透視力で讀んだ通りであつた」

斯の記事の確實なる事は今更蛇足を要さないのである。嘗ては予自身さへもこの種の實驗を單なる手先の術策に過ぎないものと思惟して居た事もあつた。現にその證據さへも見た。殊に或る婦人の如きは最も甚しい者であつた。其婦人と云ふのは豫てから巫術を行つて居た者で、その地方での上流に屬する婦人であつたが、或る日その女は少し氣分が悪いからとて私の書齋に入り込み、一時間許り休んで行つた。そして其書齋に居る中、彼女は一冊の古書を讀んだ。其は後日彼女が催眠を装つて其本

を讀む爲の準備なのであつた。斯様な術策や、胡魔化しの例もあるが、今日では最早用を爲さないのである。けれども先に予が引用した實驗に至つては既に些の疑問を容れる余地はないのである。吾々は決して自ら自己を盲目であるとする必要はない。

吾々はこの種の實驗の頗る多種多様なものである事を認めると同時に、此等の實驗から普通の視力とは全く異つた別種の心的能力に依る所謂精神^{精神的}視力なるものの存在を確認し得るのである。況して此等現象の實在を立證すべき色々な材料は寧ろ多きに過ぎる程現はれて居るのである

更に予は他の二三の實驗を比較して見る。

サー、オリバーロッチの名著「人間の生存」の中に、ステイントン、モーゼスの不可思議なる靈的交通の例がある。

倫敦大學教授ステイントン、モーゼス氏は毎朝獨り室内に引籠つて、恰も巫術者の様に自動的にペンを走らせる習慣があつた。斯くして得られた幾多の手記は既に出版されて此等の問題を研究する學徒に普く知れ渡つて居るが、次に掲ぐるのは遠方のものを透視した頗る驚異に値する實例である。

それはステイントン、モーゼス氏がスピリア博士の書齋で行はれた降神會に臨んだ時、彼の手で自動的に書き記されたもので、彼が目に見えない話相手と物語つた對話を書いたものと思はれる。

此はステイントン、モーゼスが或る心靈と語り乍らの自問自答である。

ステイントン——「讀めるか？」

答——「いゝえ、讀めない！ だがツアカリア、レガリーヤ、レクートルは讀めやう」

ステイントン——「彼等は何處に居る？」

答——「余は彼等の一人を探して見やう」(彼等は暫くの間待つて居た)、「レクートルは此所に居る」

ステイントン——「讀るめか？」

答——「然う！ 何うにか讀める」

ステイントン——「そんなら余にイーネイド第一巻の最後の行を書いて呉れないか？」

答——「暫く待て！」

Omnibus errantem terries et fluctibus aestas.

ステイントンは此文句を調べて見た。其は全く正確なものであつた。併し彼はその靈が偶々その文句を知つて居たのか、或は不知不知の間に其が記憶されて居たのではないかと思つたので、彼は更に他の質問を試みた。

「余が書庫に行き第二段目に置かれた圖書の中、右から二冊目の本の九十四頁の最後の一句が讀めるか？ その本が何の本であるかが予には分らないし、その題目さへ知らないのだ！」

暫時の後ステイントン、モーゼス氏は猶自働的にペンを走らせつゝ次の様な文字を綴つた。

「余は彼の絶大な法皇權が一朝一夕に大きくなつたものではなく、そは、最も純粹な基督教の初期の時代から今日に迫んで偉大なものに發達して來たもので、彼の使徒の時代や、教會と地上の王國とがコンスタンチヌス帝によりて契合せしめられた嘆くべき時代だけの産物ではなかつたと云ふ事を簡單な史的事實に依て證明する」

先に質問された書物は頗る珍らしい著作でその表題は寧ろ狂氣じみたものであつた。其はローヂアの著書「法皇」の管轄より基督教を救ひ清めんとする計畫即ち「反法皇政治論」と云ふ稀有な書物であつた。

此事實をさへ心的透視の力でないとしたらば一體何であらうか。

然らば此語を讀んだ者は果して何者であつたらうか。其はステイントン、モーゼス自身が不知不知の間に讀み當てたものであらうか。若しさうだとすると、彼は如何にして其を讀み得たのであらうか？ 或は彼以外の或る靈が彼の手を導いたのであらうか。吾等は今、此所に急いでそれを穿鑿する

事を控へ、唯だ其が明かに心靈によつて讀まれたのであると云ふ事、從て其が決して肉眼に依つたのではないと云ふ事實だけを認め得れば可いのである。

茲に又、上記の事實に關聯したサー、ウイリヤム、クルークス氏の實驗を思ひ出す。其は彼自身にも、又その媒介者にも未知な文句を讀み當てたと云ふ事實である。その媒介者と云ふのは一人の婦人であつたが、彼女の心は本の鉛筆に附てあつた一枚の板切れ即ち占板（俗に狐狸の類）に傳へられ、それが彼女の手を導いて紙の上を動いたのであつた。

「余は如何にかして彼女の書くものが彼女の頭腦からの無意識の働きによるものでないと云ふ證據を發見しやうと希望して居た。所が、この占板を見ると、たとひ、それが彼女の頭腦や、手によつて動かされたものであつても、其を導く靈智は恰も樂器の上を躍る様に、未知未見の或る物が彼女の頭腦の中に活躍して彼女の筋肉を動かすものであると云ふ事を確かめ得たのである。

そこで予は此靈智に向つて、

「此室に在るものが見えるか？」と聞く。

「見える」と占板は答へた。續いて予は、

「此の新聞紙が讀めるか？」と言ひ乍ら予の背後に在る卓上の「タイムス」紙の或る部分を予の

指で被ふた。予も亦その新聞紙には眼を向けなかつた。

「讀める」と占板は言つた。そこで、予は更に、「そんなら今予が指で被へる文字を書き示して貰ひたい。當つたら予は本當に思ふ」と問ふた。占板は徐々に動き始めた、そして、大した困難もなく「然し」と云ふ一語を綴つた。予は身を轉じて新聞紙を見た。果して予の指に隠されたのは其文字であつた。

予は此實驗に際し故ら努めてその新聞を見ない様に注意したのである。故に其婦人は假令その新聞を見やうと試みた所で其は到底不可能であつたに相違ない。何故ならば彼女の座つて居た桌子と新聞紙の置いてあつた桌子とは別のもので、新聞紙の桌子は予の背後に在つて予の體が彼女の視力を遮つて居たからである。」

此等媒介者の讀書現象は何等かの外的靈智の活動を示すものの如く思はれる。

ボルドーの控訴院檢事で醫學博士であるマックスウエル氏は、嘗てアングラナーナ夫人に向つてほんの試験的に催眠術を施した事があつた。所が夫人は頗る敏感な人で、次の様な極めて珍らしい透神能力を博士の前に示したのである。

「アングラナーナ夫人は今、家の外へ出たと云つた。そこで予は夫人に向つてB氏の所へ行つて氏

が今何を爲て居るか見て来る様にと望んだ。B氏と云ふのは予の友人で、夫人もよく知つて居る人である。其は夜の十時二十分過ぎの事であつた。夫人の語る所によると、B氏は今半狂亂の姿で冷い石の上を素足で歩き廻つて居るとの事であつた。此の答が余りに馬鹿々々しいので、吾々は何うしてもそれを信する氣にはなれなかつた。然るに其の翌日、予がその友人に會つて聞くと、「昨日予は非常に氣分が悪かつたが、予と同居して居る友人が切りにクナイップ療法をやつて見ろと勧めるので、予はその友人の折角の厚意に背くのも悪いと思つたから昨晚始めてそれをやつて見た。そして冷い石の上を跣足で歩き廻つて見たのだ」と答へた。そして彼は催眠現象などには豫て精通して居た男であるが、今更乍らその顯著な現象に驚いて居つた。

次に予は最近の實驗を調べて見る。其はかの有名な合衆國の物理學者エヂソン氏に關する事であつて、その實驗の價値は何んと言つても異議を挟む余地のない程確實なものである。次に掲ぐるものはエヂソン氏の自ら記した記録である。

「今、私が話さうとする人物は、私の一舊友が態々予の許に紹介して寄越した人であつて、其友人からも「此のリーズと云ふ男は不可思議な事を行ふ能力を持つて居る、私は貴下に此男を御紹介する。貴下は此者の能力をよく理解されよく説明し得らるる事と思ふ」と云ふ意味の添状を持

つて來た。

そこで私は更めて會見の日を定めた。すると、リーズは其の日の夕刻私の研究室へやつて來た。私は豫め二三名の助手を呼んで實驗の用意をして置いた。リーズはその助手の一人のノルウエー人に向つて、次室に行つて紙片の上に貴方の母親の名、出生地その他二三の事を書いて下さいと言つた。そこで其のノルウエー人はその通りを行ひ、紙を疊んで堅く手の中に握り締めて居た。リーズはその紙に書かれた事を一の誤もなく云ひ當てたのである。更に彼は其青年のポケットの中には十クラウンの金が入つて居ると云つたが、其も全く其通りであつた。

彼は又、他の助手達についても同様な實驗を行つて見せた。それから私は自身でも一つ試して見やうと思つたので、その事を彼に告げて室を出た。そして他の離れた室へ入つて次の様な文句を紙片に記した。

「アルカリ性電池として水酸化ニッケルよりも善きものがあるか？」

其頃私はアルカリ性電池の研究に没頭して居たが、其成功に就ては多少の疑問を抱いて居たのであつた。私は上記の文句を認めた上更に一の問題を頭に浮べて、一心に其を考へた。それか或はリーズが私の心を読まふとして居るかも知れないと思つたので、態と自分の心を他に轉じて其

を防いだのである。それから私はリーズの待つて居る室へと引返した。私が室へ入るや否やリーズは「否、アルカリ性電池としては水酸化ニッケル以上のものではありません」と言つた。彼は正しく予の質問を見透してしまつたのである。

私は此不可思議な能力が直ちに解き得らるべしとは云はない。唯予は文明の進歩がやがて此の種の能力を授けられた者によつて何物か偉大なる発見を産み出されると云ふ事を確信するのである。現代に於てこそ甚だ珍奇な此等の透視者も、来るべき次の時代に於ては或る數をかぞふるに至るであらう。恐らく將來に於て普通の事となるべきこの知識が今日の普通の知識で行はんとする仕事を、啓發し完成せしめるのであらう。

此の經驗を得てから約二年ばかり経つた後の事であつた。或る日研究室の給仕がやつて来てリーズが今、應接間で私に面會を望んで居ると傳へたので、私は直ちにペンを取り極めて細い字でMemo. と記した紙片を疊んでポケットに入れ、それから給仕に向つてリーズを連れて来る様にと命じた。彼の顔を見ると私は、「リーズ君、私のポケットの中に紙片があるが其に何と書いてあるかね」と尋ねた。すると、リーズは言下に、「それはMemo. です」と答へた。

其後暫く経つてから、かの著名な精神病學者のチエームス、ハンナ、トムブソン博士がその自宅で随分大袈裟な降神會を催した。其際博士は書齋に入つて小さい紙片に數語を書き記して隠して置いた。リーズは博士が出て来る迄は人々と話をしつつ居たが博士が現れるや彼は直ちに「貴下の卓上の左の抽斗の後の方に一枚の紙片があります。其にはoporieの文字が記されてあります。それから同じ卓上の書物の中にはaudierierと記した紙があります。更に又他の紙片にはanigenと書いてあります」と言つた。

此報告は全く正確であつた。トムブソン氏は唯だ茫然として最早此證據に對しては一言がないと告白した程であつた。

數年前私は何等かの方法を以て一人より他人への思想の傳達を試みやうとして種々の實驗を行つて見た事があつた。然し何の効果も得られなかつた。又、私は實驗者の頭へ電氣装置を取り付け、それを應用して解決しやうとした事もあつた。その時、初め四人の實驗者は各々別室に陣取つてお互に上記の電氣装置を連結して見た。けれども何の反應もなかつた。今度は四人が一室の四隅に坐を占めて試みた。かくして次第々に椅子を引き寄せて遂には四人の膝と膝とが接觸するまで近寄つて見たが結局何の結果も得られなかつた。

然るにリーズだけは何の器械も用ひずに又何んな状態の下に在つても此種の作用が出来るのである』

斯くエヂソン氏は語つた。氏と共に此の實驗を行つたものは皆此事件に對して證言を與へて居る。その中には特に詳細に此事件を研究したシュレンク、ノツチング氏も居る。

此の透視者の生涯に一つの面白い挿話がある。それは彼が詐欺事件で告訴された時の事であつた。豫審が終つてから、彼は自ら裁判官の許を訪れて何か紙に書いてそれを緊つかり手の中に握つて居て呉れと頼んだ。そして一々その文句を読み當てゝ見せた。そのお陰で彼は無事に放免されたのであつた。

予は今まで「精神的視力」に關する此種の實例を既に數百件も蒐めたのである。その中でも最も興味あるもの一つはモントビエールのグラツセル教授の實例である。其は教授が自ら記して堅く封じて置いた四行の文句が三百米の遠方から讀まれたと云ふ事實である。其を讀み當てたのはフェセル博士が使つて居た神秘術者であつた。(一八九四年「心靈學年報」三三二頁)

猶ほ幾多の確實な材料があるが、私は更に此處に紹介したいのは佛蘭西天文學協會の同僚で頗る學識の高いエム、エツチ、ダブロン氏が齎らした事件である。氏は其の報告と共に次の様な手紙を添へ

て寄越した。「余は貴下がその著「未知の世界へ」の中で企てられた心靈の研究は極めて興味深いものと信じる。そして予は眞理を憧憬して居る心から此の偉大な事業が何んとかして繼續されて行く事を讀者と共に希望するのである。若し別紙の事件が未だ貴下に始めての事ならば予は喜んでそれをお知らせしやうと思ふ。其はオルレアン公爵家のバラティン夫人の手紙からの抜萃である」と。

「今から約十年前の事で御坐います。一人の佛蘭西紳士が加奈太から土人を一人伴つて來た事が御坐いました。其の紳士と申すのは嘗てユミエール元帥の近習を勤めて居たんで私の侍女の一人と結婚した者で御坐います。或日の事、人々が卓子について居りますと、其の土人は急に顔を皺めて泣き出したのです。ロンゲュー——其紳士の名です——は彼に向つて一體何うした譯か？

何處か痛むのかと尋ねましたが、彼は只一層泣くばかりでございました。尙ほロンゲューが問ひつめますと、土人は「何うぞお聞き下さるな、それは私の事ではございません。貴下に關係した事なのですと申すので、それは又、何んな事かと執拗く問ひ詰めた結果彼は漸く「私は今此窓から貴下の弟様が加奈太の某地で殺されたのを見ました」と答へました。ロンゲューは笑ひ出して、「お前は氣でも狂つたな」と言ふと土人は「否え、少しも狂つては居りません、どうぞ私の申す事をお書留めなすつて下さい、今に其が間違ひか否かが解るでせう」と申しました。そこでロン

ゲーニは其を書留めて置いたので御座います。所が六ヶ月の後、加奈太からの船が到着した時、彼は始めて弟が殺されたのを知つたのです。其は時間も場所も土人が窓を通して幻に見たのとす分違はぬ事件で御座いました。此は全く眞實の御話です。

一七一九年三月二日

ベルサイユにて」

パラティン夫人は宮廷に於ても中々の確り者としての評判ある人で容易に欺かれる様な婦人ではなかつた。その夫君と云ふのは時の攝政オルレアン公であつた。その當時巴里やベルサイユの都は神秘主義とは全く縁りのない都會であつた。それから考へて見ても上記の事實は恐らく確實なものと思はねばならぬ。然らば何うして其の加奈太の透視者は空中に此の悲劇を見たのであらうか、其は恰も人が透明球を通し、或は水球を通して物を見た様に、換言すれば豫言者の精神の作用によるものである。此等の觀察から其れ以外の結論を抽象する事は不可能であると思はれる。

著名な懐疑的文士にして豫てプリニーの妖怪談や、シセロの刺客談等を嘲笑して居たグラチアン、セミユール氏は、一八四三年に、「誤謬と偏見」と題する頗る興味深い著作を出版した。彼は其の書中に於て彼の近隣に起つた讀心的感覺の場合を一つの例外とした擧げて居る、(彼は將來此語が作られ、此の感覺の價値を認めるべき事を疑つたのではなかつた)、次は彼の説明と其の手記である。

「私等の幼年時代、屢々私共の家にやつて来るサウルスと云ふ名の四十歳位の婦人があつた。彼女の夫はサント、ドミンゴの裕福な植木屋で、この二人が佛蘭西に住む様になつたのは革命の頃からであつたと思ふ。サウルス氏は夫人を巴里に残して島の方へ旅行する事が多かつた。夫人は極めて柔順な少しも神経質な所のない善良な人であつたが、私等がともすれば襲れ勝ちな滿らぬ想像などに耳も藉さなかつた。それは夫の旅行中であつた。或る夜夫人は仲間の者とカルタを遊んで居た。すると、夫人は突然後に轉倒しつ、「あつサウルスが死んだ」と叫んだ。人々は急いで彼女の周圍に集まり、其様な幻影は決して心配するに及ばないと諭したので。夫人の神経は漸く平靜に復した。けれども、人々が散會して夫人獨りになつて見ると、先刻の豫感が再び擡頭して來て容易にその印象を脱する事が出来なかつた。以來夫人は不安の日を送りつゝ、只管、夫の便りを待つて居た。其後彼女の許へは數通の便りがあつたが、別に何の異状もなかつた。だがそれは皆幻を見た日より前に認めたものであつた。然るに或る日一通の黒封緘の手紙が彼女の許へ配達された。其はサントドミンゴからの便りではあつたが、その宛名もサウルス氏の手蹟ではなく、サントドミンゴの或る植木屋から送られたものであつた。彼は突然夫人を驚かすことを氣遣つて、故らに恚うした手紙を送つて來たのである。實際夫人があゝの怖ろしい幻に打たれた

其日に土人の爲めに殺されたのである。此の二重の出来事は當時社會に相當な地位を有つてゐる人々が二十人以上も證言を與へたもので、私の少年時代に最も強く私の腦裡に刻み込まれた事件であつた。私が再びサウルス夫人に會つたのは其れから十年後の事である。その時夫人は猶喪服をつけて居た。其喪服こそは彼女が自ら永久に身にまとい誓つた永遠の服裝であつた。』

話は更に續く。

『斯様な事實に對しては、吾々は全くその去就に迷ふのである。何者も直ちに其の眞實を證する事は出来ないと同時に、其の虚偽を證することも絶対に出来ない。けれども吾々は彼のシユリーの様な權威者が凡ゆる疑問を斥けて提唱した所の、同様な事例から得た結論を此處に適用する事が出来る。即ち彼は「ヘンリー四世が彼の慘憺たる運命の豫感を有つてゐたことは餘りにも明かな事實である。彼はその戴冠式の日が近づいて来るに従つて彼の心中には或る言ひ知れない恐怖と嫌忌とか益々深く滲んでゆく。彼は屢々予の許を訪れては頗る萎れて、その苦惱を慰へるのて予はその都度彼の餘りに女々しい氣の弱さを嗤つてゐたのである。けれども彼の次の言葉は今尙深い印象となつて予の腦裡に残つて居るのである。」あゝ君よ、何故予はこの戴冠式の事を考へると何うして斯うも氣が減入つてしまふものだらう予は何が何やら自分で自分を解らないが、只

何かしら不幸が迫つて来る様な氣がしてならないのだ」と、彼は恚う云ふと何時も椅子の上にとつかりと身を投げ出し、眼鏡のサックを指先で叩き乍ら、深い物思ひに沈みつゝ暗い考への中に自分を引づり込んで行く様にしてゐたのであつた。

シユリーの此の言葉から吾々は何うしても一種の豫感なるものが存在してそれがヘンリー四世をして聽て彼を刺さんとせる短劍の切尖を暗示せしめたものだと言ふ事を疑ふ事は出来ない。吾に此の事實だけではない。吾は又、有力な他の實證によつても其存在を證する事が出来る。レストアールや、バツソンピエルも亦その手記の中に同様な事件を述べて居る、然し、吾々は此豫感に關する珍らしい事例は固より充分正しい物であるとは信するが、只例外的現象としてのみ認めらるべき物であると云ふ事を附言して置きたい』

以上はグラチャン、セミールの物語りである。唯だ彼が此を公にするに當つて余り氣が進んでゐなかつたと云ふ事丈が想像される。そして彼の此の追懐談は本書中に記さるべき最も適切な物語である。彼は總ての事物を受入れる人ではなくて、寧ろ凡ゆる事物を否定せんとする傾向のある人であつた。由來兩極端の思想は動もすると人々の陥り易い弊害である。吾々が深く理性に省みる時、吾々は常に此の兩極端の中間にある獨立の道を歩まねばならぬ事を考へる。

此處に又、上述の觀察に遜らない興味深い現象がある。

「エヂンバラのグレゴリー教授が嘗て三十哩遠方の都市に居る一友人を訪問した事があつた。その時彼は豫てその友人が催眠術を施して居た或る婦人に面會した。その婦人と彼とは未だ一面識もなかつたのであるが、驚く程詳細に彼の家の隅々の事までも明かに云ひ當てた。そこで彼は一つ別な事で試して見る氣になつて次の様な實驗を行つた。

彼は婦人に向つて其所から五十五哩も離れたグリーンノックへ行く様にと命じた。其所は當時彼の息子が住んで居た所である。勿論婦人は未だ一度もその子供を見た事もなければ聞いた事もなかつたのであるが、明かにそれを云ひ現はし、且つその子供が犬と戯れて居る小屋の有様をも示した。彼女はその犬は白い斑の交つて居る黒いニューファウンドランド種の小犬であると云つた。そして彼女は「子供と小犬とは大層愉快さうに遊んで居ます。小犬は子供の帽子を喰へて行きました。その傍には一人の紳士が讀書をして居ます。紳士はそんなに年寄ではありませんが頭に白髪が交つて居る人です。彼は長老教會の牧師です。」と言つた。それからグレゴリーはその婦人に家の中へ入つて見なさいと命じた。婦人は應接室、食堂、臺所等の有様を述べてから「臺所には若い召使が食事の用意をして居ます。羊の足が火に燻られて居ます。更に其處には一人の召使

が居ます。紳士が戸口の方へやつて來ました。子供は尙ほ犬と遊んで居ます。やがて彼は別荘の二階にある臺所へ走り込みました。そして食べ始めました」と告げた。教授は直ちに筆を取つて今、婦人から聞いた詳細を書き送つた。すると別荘の主人からは正にそれに相違ないと云ふ返事が來たのである。此事件に就て教授は次の様な注意をして居る。「私は子供の居た場所については何も知らなかつた。その婦人には行つて來る様にと命じたもの、私はその土地の事は全く知らなかつたのである。それ故此現象を以て單に思想の傳達によるものと解する事は出來ない」と。斯の種の幾多の觀察記事は實に私の机上に山をなして居る。けれども吾々は適當な所で筆を擱かねばならぬ。要するに此等の研究の結果は「人類は眼を以てせずとも心靈を以て物を視得るものである」としてふ事實を肯定する事になる。

但し、予は此の異常な視力を認容するに當つて、豫てから個人的にもよく知合つて居り且つ尊敬して居る幾多の學者——就中博士會のアルフレッド、マウリー氏と見解を異にして居る事を告白して置かねばならぬ、氏は全然、此の種の能力を認めないのである。氏は自ら夢遊者について確認した「視覚過敏」なる事實だけは信じて居る。此は確かに存在して居る事實ではある。けれども、吾々は何んな現象も總てこの中に包括せしむる事は出來ない。殊に上述の此場合はこの視覚過敏では説明出來な

或る場合に於ては吾々は此等の視覚機能を猫や、梟や、蛾や、洞窟中に棲む爬蟲類、深海魚類の様
な暗中に物を見得る夜間動物の視力に似た物とも言ひ得る。光には程度の差はあるが全く無くなる事
は決してない。

人間にも夜盲なる物がある。

ローマのチベリウス帝も亦偶々深夜の眠から醒めた時、彼の室に在る總ての物を暗中に識別する事
が出来た。而して彼の眼は頗る大きかつたと傳へられて居る。

ロシエル大學の教授であつた僧ミュソー氏は一八二〇年「視力の話し」と題する頗る珍らしい著作
を公にして次の様な報告をして居る。彼はその町の或る婦人を知つて居た。此の婦人は暗の中で明瞭
に物を見分ける眼を持つてゐた。然もチベリウスの様に短時間ではなく、地上に在る一本の針をも看
取する事が出来たのである。彼女の眼も矢張非常に大きかつた。けれども、此の視力は彼女が常に具
へてゐたのではなくて、彼女の體の具合の悪い時か、或は非常に倦怠を覺えた時ばかりであつたと云
ふ。

一八九九年正月三日、予の親友にして偉大な彫刻家であるバルトルデイと晚餐を共にした事があつ

た。彼女はシャイユー博士とペーテル夫人との間に出来た令嬢である。彼女の話によると、その従妹
に當るヴァランス嬢も矢張り此の視力の持主であつて、或る夜彼女が聲高く本を讀んで居たので、人
々は何事かと近寄つて見ると、彼女は床の上に坐つたまま、博士の書庫から取つて來たボール、ルイ、
クーリエのバンフレットを燈も點けずに讀んで居たとの事である。彼女は一種の夢遊者であつた。

予は學術上の質問を寄せて來た通信者の中から非凡な心靈的能力を具へた而も相當に學問もあり、
身分も高い或る婦人を見出した。其はフランス天文學協會の會員たるエスヘランス夫人であるが、彼
女は全くの暗中に於て見たり、書いたりする事が出来た。夫人が未だ少女の頃、古典の研究をして居
た事があつたが、或夜中、夫人は一種の夢遊状態に陥つたまま、すらくと一文を草したと云ふ事
である。夫人の知己で、且つ「カルル、チュ、ブレル」の譯者であるエメルン夫人も亦同様な實例を少
なからず知つて居た。

「催眠現象及び是に類似の状態」と稱する内容の頗る深みのある著作の中で、リエポール博士は「視
覚機關に於ける過敏」と云ふ事實のみは認めて居る様である。そして博士は此問題について自ら行つ
た數種の實驗の模様をも記載して居る。其はパートランド、アンコントル、マカリオ、アルカンポー
ル等の實驗と同様に夢遊者に就いて試みられたものである。此夢遊者と云ふのは瞳孔の擴大して居る

のと、視神経集中の訓練を積んだ爲めに暗の中でも物を透視し得ると云ふ男であつた。夜間物を視る此の能力は決して僅少ななものではない。けれども今吾々の問題とする所に關係して適用し得る範圍は極めて僅少な部分に過ぎない。遠距離に在る家屋の説明、何千哩遠方に起りつつある光景の表現、或は密閉した書中の文字を読む事等は勿論、更に吾々の引用した實例の大部分は何れも此の夜間視力の現象を以てしては説明し難いものである。

眼によらないで物を見得る被術者が、自己の前額や、腹部や、或は足を以て物を見得るのだと思惟は全然誤つて居る。視る者は彼等の靈である。

彼等は又、時には、耳を以て物を見る事が出来るのだと言つて居る者がある。ロムプロゾは一八九二年に彼が未だ一度も會つた事のない患者の現象を見て大に手摺つたと云ふ事を物語つて居る。彼の手記には次の様に書いてある。

「予は嘗て自分の故郷で、或る一高官の令嬢の治療を引き受けた事があつた。彼女はすでに妙齡に達した婦人であるが、度々烈しいヒステリーの發作に襲はれる事があつた。而も彼女は發作と共に病理學的にも、心理學的にも説明のしやうもない一種の徵候を示すのであつた。そして彼女の眼は屢々視力を失つてしまふ事があるが、一方には耳を以て物を見る事が出来たのである、彼

女は眼を縛し乍らその耳邊に示された書物の幾行かを讀む事が出来る。吾々が彼女の耳と太陽との間にレンズを置いた時、彼女は宛も眼に感ずると同様な眩しさを感じ、吾々に向つて「一體貴方は私を旨にしやうとなさるのでですか」と云つて泣き出したのである。殊に彼女はその身に起りつゝある將來の事件を盡く豫言する事が出来た。それは宛も一と一と合せて二となると云ふ様に、全く逸れる事のない豫言であつた。或る時彼女は自分が今から一月と三日の中に物を噛み度くて堪まらなくなる事があらうと云ふ事を豫言した。予はその間彼女に深く注意し殊に彼女の氣を紛らせ、時間の觀念を失はせる爲に態と有るだけの時計を狂はせて置いた。然るに彼女の豫言した時が來ると、果して彼女は物を噛み度くなつた。そして彼女が幾枚かの紙を噛み砕いて了つた後で始めて安靜に復したのである。」

此等の事實は必ずしも珍奇な現象ではない。けれども少くとも現代の心理學や病理學では到底説明の出来ない事實である。

吾々が今茲に探索しやうとする新しい世界は、かのクリストファー、コロムバスの發見した大陸よりも更に驚異に充ちて居る世界である。上に述べた様な所謂耳による視力の問題は確かに純然たる靈的現象である。而して此現象に關しては視覚神経も聽覚神経も共に全然無關係なのである。

然らば彼等が額を以て見、鼻を以て見、顎を以て見、更に膝を以て見、足を以て見、然も内部的組織を具へたる精神的機關又は實際に夢や幻を見る視覚機關によらないのは何が故であらうか、X光線は肉體を通過する。試みに厚く衣服をまとふてX光線の前に立て、諸君の骸骨は明瞭に現出するであらう。靈が肉體の何れの部分からでも働くのは此と同じ理である。

そこで此内的能力と云ふものは抑も何物であらうか。吾々は此を以て大脳の働に歸する事が出来やうか、或は又、全然解剖學的組織と無關係な精神の作用とのみ見得るであらうか。

大脳が吾等の全思想に聯關して居る事は疑もない。純眞な感情、犠牲の精神、健全な克己心、崇高な敬神の念、恚うした事は吾人が全く物質から離れて考へ得る心の働により、大脳の助けによつてのみ思想となり得るのである。けれども大脳は決して此等思想の作者ではない。それは單に機械たるに過ぎない。吾々が今腕を挙げんとし、或は誓を立てんとし、又は思索せんとする時、眞に活動するものは吾等の精神である。動作の原因は精神である。そして神經乃至筋肉組織は只精神に自働的に従ふものであつて、何等その原因に關係してはゐないのである。思索、慾望、視感、戀愛、決意凡て皆精神の働きである。それは腦細胞系統の作用ではない。

心的視力は精神即ち心靈の働きによつて起るものである。けれども其處に働く能力は吾々には「未

知の世界」である、最初吾々は腦が此の現象の原因であらうと思惟したのである。即ち腦から或る一種不可見の波動が發せられて遠方に傳導されるのであると考へてゐた。而して此等の現象が未だ吾等の精神の獨立的存在を立證するには足らぬものであると思つたのである。併し乍ら此の假説は全然不充足であつた。何となれた精神の獨特な作用は明かに此分解の中に啓示されて居るからである。

吾人は既に多くの實驗者の中で此の「隠されたる書物を読む」と云ふ超自然的能力を以て一の外的心靈即ち中間者を通じて實驗者と相通する一種の精神の働きに歸して居る人が尠くない事を述べた。此は必ずしも許容し得ない説ではない。けれども、その説は未だ説明に迷つてゐるのであつて、要するに困難なる問題の解決を一段と延長してゐるのに過ぎないのである。然らば其の未知の精神の本質は抑々何物であらうか。

既に多くの讀者は予の著書に於て屢々同様なる假説を掲げた事を承知して居られる。それは素より單なる假説として掲げたのである事は言ふ迄もない。何となれば其は直ちに證明し難いものであるからである。けれども、此場合多少にても想像的説明を加へる事は科學的方法の主義に反する。要するに此の問題は從來既知の世界に止つて既知の知識によつて説明し様と試みられたのであるが、吾人が不可解の事件に直面する時、遂にその不適當なる事を認めなければならない事になつたのである。而も

其れ等の現象を錯覺に關する生理上の理論を以て全く否定しやうとしても猶ほ満足なる解決を與へ得ないのである。そこで、更に他の何物かを以て説明せねばならぬ。然し乍ら、吾々自分の精神でさへ必ずしも常に眞に満足なる説明を與ふるものではない。して見ると何うしても其處に何等か靈妙な力が働いてゐるものと考へられる。

予は他の著書に於て一般から認められる理論から推して次の様な結論を樹てた、それは「宇宙は、一力であり、分子は無形の力によつて規整されて居る」と云ふ事である。

有名な心靈學者フランクポドモール氏については既に述べたが、彼は是等の現象や變怪の現象を「思想の傳達」によつて解し得るものと確信し、一切の事を理論で解釋して居る。予はかのポルドーの神學生が全く暗黒中に於て眼を縛しつゝ、その説教文を書いたと云ふ動作の中には、何等思想の傳達と見るべきものが行はれて居なかつたと考へる。或は催眠者が自己の内的疾患状態を示した事實、或は密閉された室の中から母親の手術の詳細を目撃したと云ふ様な事實に於ても同様である。又、アレキシスが眼を閉ちてカードをやり乍ら常に勝利を博した様な、或は裏返されたカードを讀んだ様な事實から更に又、彼の辯護士が盜賊を追跡して巴里からブラツセルに、そして又更にスバに行つた事や、ステイントン、モーゼスが自ら知らない書籍の中の一句を書き出したと云ふ様な實驗や、クルックが

未知の文字を見抜いた實驗の如きは皆思想の傳達とは全く交渉のない事である。

吾々は到底その總てを了解する事は出来ない。又其れ等を一々説明し得るとは言はぬ。嘗てソクラテスは「汝自身を知れ」と言つた。正に吾々の標語である。吾々の内的自我を知り得ない點に於ては二、三年前の時代も今も全く變りはない。けれども、吾々の心靈は吾等が今日まで數へられて來た様に爾かく簡單なものではない様である。多數の心靈説も決して徒爾な言説ではない。抑も個性の分割とは何であるか、無意識とは何か、潜在意識とは何か、そして又、闕下意識とは何か、遠感的視力に關する迥か古代からの而も些かも議論の余地ない實例が既に史家フィロストラタスによつて「テヤラのアポロロニユースの生涯」の中に紹介され、多數の目撃者によつて立證され、彼等の主張は長い間に亘つて種々に論議されて來たのである。アポロロニユースはクリストと同時代の人である。彼がエフエサスに居た時の事であつた。彼はその内的視力によつて、ドミチヤン皇帝が羅馬で暗殺されたのを目撃したのである。彼の華奢残忍な暴君の最後は既に周知の事である。皇帝の弑者は實に其寵臣の一人で奴隸より解放された者であつた。彼は皇后ドミチヤロンギナと謀り「我は皇帝の覺え目出度い時でも、その逆鱗に觸れた時でも同様に危険な地位に在る」とて直ちに皇帝をその宮中に刺したのであつた。

アポロニユースの幻覺は恰もその悲劇の刃が振れて居た瞬間に起つたのであつた。茲にフィロストラタスが吾等に告げた當時の驚くべき詳報がある。

『それは眞晝中であつた。アポロニユースは偶々、エフェサス郊外の小公園に於て、多くの聴衆を前にして嚴かに哲學の問題を説いて居た。すると、突然彼の聲は途絶へた、それは宛も彼が俄かに何物かの感動に打たれた様な趣であつた。然し彼は再び言葉を續けた。彼の聲は前より緩るやかに進んで行つた。併し彼の面には明らかにその心中に漲る何物か、あやしくも胸かき亂す物狂はしがあらはれて居た、彼は遂に全く語を止めた、最早彼は物をも云ひ得ぬ狀であつた。終に彼は叫んだ「確りせよエフェサスの市民よ！ 暴君は今、殺されたぞ、今日而も今、予はミネルバの神に誓ひて言ふ、彼は今、正に予が語を止めたその瞬間に殺された！」と民衆はアポロニユースが狂氣したのではないかと疑つた。然し、彼等は心からその眞實である事を欲したのである。同時に又、彼等はその言葉の爲に彼の身に危害を招きはせぬかと懸念してゐた。アポロニユースは續いて、

「予は全く驚いた。諸子は猶予の言ふ事を信じないかも知れない。ローマ自身すら未だ全くそれを知らないかも知れない。けれども、ローマは今それを知りつつあるのだ。報導は飛ぶが如くに廣

がつてゐる。すでに千餘の人はそれを知つて居る。否な、刻々増加してゐる。それを聞いた人々は喜び狂してゐる。喜びの叫びは聽て此地にも達する。諸子は今直ちに予の言を信する要はない。間もなく分かる事である。而してこの事件の爲めに諸子が神に捧ぐべき犠牲は其の時まで延ばすがよい。けれども予は今予の目撃した事について神に感謝を捧げる」と云つたのである。エフェサスの市民は猶容易に信じなかつた。果然使は來た。そして喜びの報知を齎らして來た。アポロニユースの正しい豫言が證明された、暴君の暗殺、その日、時間、更にその詳細に至るまで悉く神がアポロニユースにその市民への演説最中に示した所と同様であつた。

フィロストラタスは斯く語つて居る。現今では最早この豫言者アポロニユースを神人に祭り上げる要はない。法皇バイヤス五世が「聖」の稱號を得た時にも同様なる「奇蹟」が彼に授けられたのである。其は法皇がパチカン宮殿の窓からレバントの戦の光景を目撃した事實である。即ち一五七一年十月七日であつた。彼はその幻を見て近侍の者に向て「立て、吾等はすぐ祭壇に行きて神に感謝を捧げなければならぬ。見よ吾等の軍は今大勝利を得て居る」と叫んだ。

史を繕く時、吾等がかゝる第二次的の視力に關する實例を幾等でも見出す事が出来る。ルイ十一世の年代記編纂者であるコミネーは次の様な事を記して居る。「勇者チャールスがナンシイの戦に敗れた

時、王はツールの聖マルタン教會で彌撒の祭を行つて居た。すると、王の御用牧師たるアングレケ
 ー、即ち後のヴィアナ大僧正は王に聖マリヤの像を刻める接吻板を授けつゝ、「神は汝に平和を授
 け給ふ、汝の仇敵アルゴンヌ公は今や及に斃れた、而して彼の軍隊は敗走しつゝある」と告げた。」

アポロニユースや、法皇バイヤス五世や、コミネー、其他に係る恚うした數百の物語は不幸にして
 一切の俗説と共に葬られて了つた。即ち十八世紀には其等は一顧の價値ない物として簡単に否定され
 てしまつてゐる。十九世紀には單に錯覺に過ぎないものと解せられた。けれども、今日吾等は此の立
 派な隔感的視力を認容せずには居られない。吾等は幾多正確な同様の實例を知つて居る、吾々は最早
 其の事實の存在を否定する事は出来ない。此等の事件は吾等の想像以上に古くから、そして多數に存
 在して居たのである。然も吾等は一般に其等現象に對して全く無智であつた。

思想は空間を横切つて行く。然らばそれは何うして移つて行く。放射か、波動か、太陽より地球
 へ、其間には電子が流通して居る。それは中心たる恆星即ち太陽から發するものである。太陽は其處
 に磁氣の現象を作り、極光を現はし、電氣的動亂を起す、此等は放射の結果である。放出された放射
 物は一種のエネルギーを帯びて來る。大氣を通ずる音波。エーテルの中を通つて來る光波——波動そ
 のものは音でも光でもない——は一のエネルギーの原泉から來るのである。何うして引力は空間を通

つて傳へらるゝや。絶大な此の力はその手を以て幾多の世界を支へて居るのである。地球の重量は六
 百萬兆噸である。木星は地球の三千倍の大いさがあり、太陽は地球の三十萬倍の重みがある。凡ての
 恆星は各々太陽である。最大のものから最小の物まで此等の世界は交互に引合つて居る。地球から八
 百三十億吉米離れてゐる犬狼星でさへ吾々の地球へ或る影響を及ぼして居るのである。斯様な物理的
 遠感の本性は抑も何であらうか。引力の波動と云ふ事はない。人の思想は事物や、空間や、時の様に
 普遍的な計量を有たない。結局吾等は此については未だ確かな觀念を有し得ないのである。吾等の腦
 細胞は未知の世界に浸つて居る、而も吾々は波動と振動との解けない網叢によつて不知不識の間に凡
 ゆる實在と結ばれ、既知と未知とに拘らず凡ゆる自然力との交渉が見出されたのである。而して人の
 思想は實にその空間を通じて働く唯一の手である。

此等の説明には何等想像も、幻覺も技巧も交へられてはゐない。それ等は正に天文學、氣象學の觀
 察と同様に正確な説明である。従てこの研究は當然科學の部門に入れらるべき充分の資格を有するも
 のと言はなければならぬ。

吾々の精神的實在は肉眼の力を藉りる事なしに物を見得るのである。予は多年此等の現象に關する
 説明を蒐めて段々に自己の信念を固めて來た。而して予は今この研究の結果を諸子の前に開陳して諸

子の判断に資したいと思ふ。

此に關する報告は實際に多種多様である。吾等は全くその選擇に迷ふ程何れも正確なものである。殊に次に掲ぐるもの、如きは吾人の主張を證據立てる上に於て最も有力な好實例である。此の心的視力はカンネーのフアントン博士が一九一〇年十二月の「心臓科學通報」中に發表されたものであつて、若い婦人に關する事實である。其婦人と云ふのは非常に舞踏に熱中してゐる間に幾多の事件を惹き起した結果、重いヒステリーに陥り、而も殆ど無耻の状態を見る様になつた。當時婦人はマルセーユに住み夫はゼネバに居たのである。

「彼女の監督者であつたフアントン博士は或る日彼女の夫から彼がその晩の七時の汽車でゼネバを出發すると云ふ一通の電報を受け取つた。其汽車は九時にクロツワを過ぎ、十時にリオンに着き、翌朝五時頃マルセイユに到着するのであつた。電報の封筒には「陸軍大臣」の文字が讀まれた、然しそれはインキの滲みで半ばかくれてゐた。

患者の容態が頗る危険だと云ふので、博士を呼びに來たのはその夜の七時であつた。然し博士は別に何の返事も與へずその間に夕食を取つた。夕食はオムレツの御馳走であつた。

患者の家は醫師の家から三百五十米ばかり離れてゐた。博士は云つた「私が其處に到着した

時、患者の周圍には八人の附添が居た。そして次に記す事はその八人の前で行はれたのであるが、その中六人は今尙存命してゐる人々である。彼女は私の行く前、附添ひの人々に向つて、「お醫者は中々やつて來ませんよ、併し今彼は漸く來かかつたのです」と言つた。そして又暫くたつて彼女は、「今彼は玄關に來ました、そして呼鈴を鳴らして居ますよ」と告げた。その途端私の押したベルが響いたのであつた相です。私が室へ入ると彼女は私の顔を見て笑ひ乍ら私に向つて、「お、貴方は私が使を上げた時は中々お立ちにならうとなさならなかつた様でしたね。そして貴方はお留守だと仰しやいましたね！ その貴方は御夕飯を召食つておいでよした！ 御馳走はオムレツでしたね！」とからかひ、更に言葉を續けて「いえ、何もご辯解なさる事はありませんよ、私はその時貴方が何をなさつていらしたかよく存じてゐるのですから！ それより貴方がお持ちになつたアルフレッドからの電報を早くお見せ下さい」と言ふのであつた。斯う言ひ乍らその病婦人はまだ私のポケットの底深くしまい込んである電報を明瞭に讀み上げたのである。尤も其所に居合せた人々の中でその電報を知つて居る者は一人もない筈である。事が頗る唐突であつたので私は全く面喰つてしまつた、附添の人々も無論驚いたのである。そこで私は強ひて自分の驚を取り鎮め故ら平靜を装ひつゝ、患者の言葉の實際な事を彼等に告げ、そして半時間前に私が受取

つた電報を彼等に示した。

何うしてA夫人はその電文を知り得たのであらうか、彼女は夫君の歸宅について何等豫言されてなかつた。ましてその時間、その道筋等については何も知つてゐる筈はなかつたのである。此問題こそ正に吾々の説明せんとしてまだ説明のつかない事なのである。

すると再び彼女は更に聲高くさも愉快氣に洪笑してから、

「夫は今、汽車の中で寢込んで居ます、彼は此所へはまだ何うして！ 何うして！ 來ますまいよ」と云つたかと思ふと笑ひ聲は次第にかすれて、後は小さい呟きになつて了つた。その呟きは明瞭に「彼は今眠つて居ます……」を繰り返へして居るのであつた、其は丁度九時であつた。

翌朝、彼女の夫君アルフレッドの乗つた汽車が着く時間に私は二人の友人と出迎へる事にした。私は附添ひの者に向つて私の不在中患者の容子を詳細に注意する様にと頼んで出掛けたのである。所が、彼はリヨンからの汽車には乗つてゐなかつた。そこで私達は再び患者の許へ引返した。私達が出ると行違ひにクレノーブルから一通の電報が來て、アルフレッドは正午迄には着き兼ねるだらうと云ふ事、その譯は彼が汽車に乗り遅れたからだと言ふ事を報らして來たのである。私は十一時に患者の許を出た。

午後私はその夫君に會ひに出掛けた。そして彼が未だ誰とも話を交へぬ前に昨夜の行違ひの事を質すと彼は昨夜シャンベリー行の汽車の中で眠つてゐる中にクロツツを通過してしまい、その終點で始めて眼が醒めたとの事であつた。この失態からマルセイユには七時間も遅着する事に氣が附いたので、彼は直ちに電報を打つたのであつた、彼は昨夜から患者に附添つてゐた人々にもこの話をした。それから私の方の出來事を彼に話した結果、患者は彼の旅行中彼に付き纏つて居た事から彼女の示した旅程の變更が全く正確な事であつたと云ふ事が確められたのである』

其當時、ファントン博士は、吾々が今茲に研究してゐる問題については何等の知識もなかつたので、彼は實際その異常な現象に驚倒したのである。既に吾々は此の精神的能力の正に否定すべからざる事を認めて居る。吾々は單に視神経や、網膜の助によつて物を見る許りではなく、精神の働きによつて物を見る事が出来るのである。

茲にオステイ博士が最近の調査に係る二、三の事實を紹介する。

「一九一四年二月の事であつた、カミーユと名告つて居る一夫人が、ナンシイで巫術師となつて居た。或る日夫人は催眠状態中に、その頃前年の暮から行衛不明になつて居たカディユー氏の死體を發見したと云つてその顛末を語つた。氏の失踪については當時その原因さへも分らなかつた

ので、新聞などでは大騒ぎをはじめ警察官や判事は妙ならず頭を悩ましてゐた。そこで所謂賢明な人々は、その催眠術者こそ何か爲にするものゝ爲に買収された共犯者であるとして告訴したのである。

バーンハイム教授はマタン紙の記者と會見して所謂占断豫言の様なものとは決してあるものではないと断言した。そして彼は「予は長い半生に於て未だ嘗て隔感的視力などゝ云ふものや、占卜の様な現象を認める事が出来なかつた。凡ゆる吾が科學的教育はかゝる現象の存在に對する革命である、而して確乎とした證據の見出される迄は予は飽くまで斯様な現象の眞理でない事を争ふであらう」と言明した。けれどもこの催眠的啓示は結局何物よりも確實な事實であつたのである。

それから一ヶ月の後、即ち一九一四年三月十九日、プールソー城の管理人アンドレ、リフォー氏が失踪した。人々は森や林を探した、マルヌ河が溢れて出来た所の湖も探して見た。警察やランスの在郷軍人も極力搜索し廻つた。然し官憲側の努力は結局何の効果もなかつた、そこで弟のリフォー氏はカヂウー家の者に做つて數人の巫術者に觀て貰つた。然るに彼等は一様にその失踪者は殺されて水中に投入されたと断言した。カミーユ夫人も亦その一人であつた。彼等は三月二

十四日、次の様に語つたのである（これはヂュルナル紙の記事による）

「貴方は御身内の方を探して居られるのですね、私には其の方が見えます、その方は制服を着た人と幾らかの紙幣を交換し乍ら淋しい道を歩いて暗の中に隠れました。その少し先には川があります。その方は段々お宅の近くへ來ました。すると突然一人の男がやつて來てその方の後頭部を棍棒で擲ぐりつけました。お氣の毒にもその方は倒れて人事不省になつて了つたのです。それから犯人はその身體を擔ぎ上げて川の中へ投込みに行きました。私にはその死體が見えます。數日の後にはその場所から餘程離れた所で死體が発見されるでせう」と

四月十二日リフォー氏の死體は數人の漁夫によつて引き上げられた。漁夫等はアインのヂャルゴンヌでその死體が流れて來るのを發見したのであつた。検死官のブレイ博士は明かに其の他殺體なる事を鑑定した。その證言によると、プールソー城の管理人は棍棒で撲り倒され、頭蓋骨を碎かれて無惨にも水中へ投棄される前にすでに絶命して居たものであるとの事である。」

次に記す事實の如きは更に驚異に價するものであらう。

一九一四年三月一日の事、オステイ博士は一通の手紙を受け取つた。其はケール市に於てエチンヌ、レラスルと云ふ當年八十二歳の老人が失踪した事、そして種々搜索して見たが何の手掛り

も発見し得ないと云ふ事を報じて来たのである。その頃巴里に住んで千里眼を業として居たモーレル夫人と云ふ人があつた（私も曾て面接した事がある）博士はこの夫人の許へレラスルが所有して居た絹手巾を持つて行つた。すると夫人は居ながらその道を辿り、森を越えて捜索に出かけた。そして彼が地上に打ち倒れて居るのを発見したのである。それは老人がその地まで来ると、疲れ果て、死を決したのであつた。其は三月二日である。市長の依頼で彼の家族の者達や、村の人々八十余人は十五日も林の中を隈なく捜し廻つたが、その行衛は皆目知れなかつたのである。千里眼者の詳細なる指圖を受くると彼等は夫人が示した道を辿つて遂に死體を探し當てる事が出来た。死體は夫人が目撃したものと全く同じ様子をして居た。老人は例もの通り杖を曳き乍ら大木の下の小川に身を投げて再び浮き上らずに死んでゐた。勿論モーレル夫人は以前から此善良な老人の事や、ケール附近の地については未だ何の知識もなかつた。彼女の心靈的能力は家出した老人を追求する事も出来、又過去を見、將來を感得する事も出来たのである、私はこれを生理的組織とは全く關係なく存在する吾人の精神的要素の一證據であると信じる。絹の手巾には何の手掛りもなかつた事は言ふまでない。其は單に被発見者と千里眼者との間の靈的交通を成立せしむる媒介をしたのみである。其所には何等以心傳心とか、思想の傳達と云つた様な事實はなかつた。

。事實人々は全く手掛りを失ひ五里霧中に彷徨つて居たのである、そこには只肉眼によらない遠感的視力がある。それは本章に掲げた幾多の實例と全く同一なものである。」

所謂透視者とかカードによる運命判断とか稱する俗な陳套なものと混同することの出来ない事實の實驗が澤山ある、吾々は何處迄も排他的な心を棄て、凡てを驗察する必要がある。鬼に角吾々は肉眼を以てせずとも物を見得るのである、そしてこの透視現象は正に科學の一部門として許さるべきものでなければならぬ。

一般の人は盲目者がよく視、讀み、書き得ると云ふ事を知つて居るか、次に掲ぐるものは一八四九年サン、ローラン、シユル、セーヴルの村に於て一醫師が實驗した事實である、醫師は其の目撃者の姓名を明かに示して居る。

『近隣の一醫師が曾て此の村の修道院を訪れた事があつた。彼の手記に「我々は教父ダレーレ氏から懇ろな待遇を受けた。氏は僧院の長で、又尼院にも有力な地位にある人であつた。吾々が二院を參觀した時氏は私等に向つて一紳士諸君、私は今此の尼院の最も珍らしい物を一つお眼にかけませう」と言つて一冊のアルバムを持つて来た。その中には數多の美しい立派な水彩畫があつた。其は花鳥山水とりぐの種類のあつた、氏は又、「此等の畫は實に此の院の若い一人の盲目の

尼が書いたものです」と説明して。

「數年前の事でした。ラ、ロシユジャクレン侯爵その他數名の訪問者の前に、私はその尼を呼び出して何か書いてご覧に入れるやうにと望みました。それから吾々は繪具を溶かしてやり、鉛筆と繪筆を與へました。彼女は直ちに一つの花束を書きあげました。今貴方の御覽になつて居る繪がそれです。彼女が書いて居る間、參觀者連は何遍も不透明な厚紙で彼女の眼を遮つて見たりしたので。然し、彼女の繪筆は依然としてなだらかに動いてゐました。參觀者が此の花束は少し細長すぎると言つた所が彼女はこれに答へて「はい、それでは此の枝の分れ目に一の蕾を添へませう」と云つて彼女が修正をする間に、一人の者が洋紅の繪具皿と青と取りかへて置きました。すると、彼女は其に氣が附かなかつたと見えて御覽の通り青い蕾が出来上つたのです」と説明した。

此事實を語つた人は更に附言して「ダレーレ神父はその敬虔な人格と同様に科學やその他の方面に深い知識を有つた人であつた。而して予は氏の如く予の胸中に愛情と尊敬の念を刻んだ偉大なる人物には以來會つた事はない」と語つた。

此の年若い盲婦人の言葉から考へると確に彼女にはその繪が見えて居たに相違ない、さうでない

すれば彼女は何うして「私はこの枝の付け根から一つ蕾を生やませう」と言へやうか、同時に又、彼女が決して其の肉眼で視たのではないと云ふ事も分る。何故ならば、彼女は不透明體を以て遮られても猶、依然として書き續けてゐたからである。彼女は正に精神の視力によつて物を視たのである。言ふまでもなく、彼女の肉眼の視力は既に奪はれて居たのである。要するに所謂夢遊者と稱する者は此と同様な状態に於て物を視るのである。赤の代りに青の繪具を置いた事については、彼女は只だ蕾の位置にのみ氣を奪はれて居た爲めか、或は其れに注意しなかつたのか、若しくは其を色として視なかつたからであらう。

斯の如く幾多の事實を眼の前に見る時、吾々は最早や其の可能性を否定し去る事は出来ない。即ち、肉眼以外の視力が不透明體を通じて動き、且つ又、時間空間を通じて働き得る人間の機能の存在は最早疑ふ事の出来ない物である。

此等の眞實をも否定せんとする人々が、賢いげにも「それは幻覺錯誤乃至瞞着或は錯覺若くは他の無智の爲めに外ならない」と揚言し、而も「吾々は自然の法則を知る」と誇り、「宇宙の森羅萬象にして吾眼に觸れないものはない」と考へ、精神と云ふものは人間にも宇宙にも存在するものではない。萬物は物質とその性質だけで説明される」と信じ切つてゐるに至りては吾々は唯だ噴飯せずには居ら

れないのである。彼等は實に淺薄な理論家である。肉眼によらない心的視力にして、本章に掲げられた幾多の事實はその正確なる點に於て天文學、氣象學、物理學、地質學、人種學等の觀察、その他幾多の實際的科學を構成する諸觀察と竝んで毫も遜色のないものである。

そして此の正確にして絶對に否定を許さない心理學的、或は精神的現象、或は又中間者を通じて得られた此等色々の現象、それは最も慎重に觀察され、既に寫眞によつて表示されたものである。唯だそれは現在に於て吾等の物理、重力乃至生理學に關する觀念と未だ相容れない點があると云ふ事は最も注意すべき現象である。

けれども、其所に何んな力が働いてゐるか、疑もなくそこには何物か超絶的のもの——それは吾々の小さな肉塊、血液、筋肉と神經から成る吾等の普通の生命以外に存するものである。

吾々の形而下の物質的存在は又、此の心靈的要素を破壊する事なしに分離し得るものである。それは肉體とは全く無關係なものだからである。それは科學的にも許容し得る事である。吾人に最も異様の感と與ふる者は此に掲げられた様な現象が遠き以前に於て、即ち幾世紀の古へから何の説明もなく看取されて來たと云ふ事實である。そしてその精神の存在の眞實なる事は既に一八一九年フアリア僧正によつて確められたのである、それは彼の「透視催眠の原因」に關する著作中に同様なる現象を説明

されて居る。而も吾々は今如何にも事新しく此等の現象を發見した様な有様ではないか、識者は依然として極めて少ないのか。

將來に對する透視力、將來の事實を知り得る力は今や吾々に一の證查を與へんとして居る、それは過去のそれよりも一層確實なものである。

第八章 未來視力——事前の豫見——夢中經驗（豫め 夢に見る事實）

事實の眞否を吟味せずして徒らに其事實を否定する臆測的懷疑主義は或る點に於て不合理なる妄信より離す可きである。

アー、フォン、フンボルト

積極的に觀察した事實を基礎とする實驗心理學を創造しやうとする時、吾々の必ず研究せねばならぬものは靈魂の未知の能力である。其の中で予は今吾々が未來を視得る力、即ち未だ存在しない事物を視る能力に就て述べたいと思ふ。

靈魂は空間を透視すると同様に時間をも透視する。

予は此の問題——正確に實證された眞の前兆、豫告的夢、明細に豫視された事變、未來視力と人間の自由、即ち定命論と自由意志との鬭争——に就いて一冊の書「ラ、ヴェー、ドラヴェニル」を書いた。（未だ印刷されない。）予は此の廣大な問題を更に敷衍して書かうと云ふ意志はないが、併し、吾々

の目的は心靈の特殊な能力を證明するにあるのであるから、前の「精神的視力」の報告に次で注意すべきこの種の報告を茲に加へるのは最も適當であると思ふ。特に注意の價値あるものは「先見」と言はれてゐるもので、此の現象に就ては從來激しく論争されながら、特に其の問題を研究し、其報告を深く吟味した人々の間に於てすらも未だに意見が區々である。

未來の事實は前以て極めて正確に視得るものである。

茲に吾々は此の重大問題を形而上學的考察によらず實驗的方法によつて研究するのである。

予は一八七〇年の春、彼の明晰な頭腦の持主であり、最も分別のあるエムマキャロラス公爵夫人に依て觀察された事實の報告によつて始めて此の現象に深い注意を喚起したのである。此の婦人は非常に佛蘭西好きなので、毎年巴里へ來ては予とこれ等の大問題に就て語る事を楽しんでゐた。一般から豫期されてなかつた佛獨間の戦争は、既にこの時から彼女の敏感な感覺に觸れてゐた。そして其の若い婦人は此國際的災害——一九一四年の大戦の前驅——を辛うじて免れたのであつた。此の手紙は予が彼女より受取つた最後のものであつて、この豫告的夢は珍らしく明確である。是れは既に拙著「ランコニー」（未知の世界へ）の中に引用して置いたが、其は一八七〇年から十二年程前に起つた事である。此處に亦それを幾分縮めて紹介する。

「私の愛人の健康を氣遣ひつゝ、私が怡度眠に陥ちた時、夢で私は見知らぬ城の赤色緞子のかゝつた八角形の一室へ何時の間にか運び込まれてゐました。一脚の寐臺があつて、其の中に私の氣遣つてゐたその人が眠つて居りました。天蓋のアーチ形から下つてゐる燈は黒髪の濃い房に縁取られて、蒼白い微笑をたゞへた顔を照して居りました。枕元に一枚の繪があつて、其の題は何とはなしに妙に深く私の記憶に刻み込まれ、目が覺めてからもそれを書く事が出来さうに思はれた程でした。その繪は天の精靈によつて薔薇の冠を被せられてゐる基督で、シルレルの詩が書かれてゐました。その詩を私は讀みました。

二年後私共は或る地方を訪問する爲めハンガリーの奥の或る城へ参りました。そして私共の爲にとつて置かれた部屋に入つた時、思はず慄然として立止まりました。私はあの赤緞子の掛つた八角室の中にあの寐臺とシルレルの詩のついた薔薇冠を被らされた基督の繪の前に立つて居たのです。此繪は曾て模寫された事も、復寫された事もないのですから、それを夢以外に見たと云ふ事は有り得ない事です。そしてあの八角堂を見る事が出来たと云ふ事も同様です。

一八七〇年三月五日

キヤロラス公爵夫人エムワイスバーデン」

既に一八七〇年以來予は殊に此の種の出来事に興味を喚起され、それに關係ある出来事を熱心に吟

味するやうになつた。今日讀者の前に提出してゐる予の著作は實に五十年の間の諸觀察を代表したものである。而して今此を提供するに當つても予が徐々に研究し來つた所から見て正に確信を添へる事が出来るものである。

此の夢に對しても人々は他の類似の夢に對すると同様「其の夢が立證前には記録されてない。そして日附のある消印が切手の上に押されてゐないではないか——それは確に絶對的な證明であるべき——そして又其の說話者の心の中には確かに自分は其の出来事を觀察したのだといふ確信があるかも知れないが、他人には少しもそれは分らない。そこで彼女の所謂立證は如何がはしいものである」と云ふ反對を唱へる。併し此の反對は何の價値もない反對である。何故かと云ふと、寧ろこの觀察者は事實上の確信を見て始めてその豫見の適中に驚いてゐるからである。

吾々は勿論此等の夢が實現しなければ其の價値を重大視する事はない。又、それ等を先に記録する様な豫備行爲は出来ない。吾々が夢で實際に再び現れて來ない多くの風景や、地方を見る事、吾々が多少偶然に起つた暗合ばかり見る事、實現した一の暗合に對し實現しない多數の場合があると云ふのも兎角反對を招く事である。又或者は部屋、家、景色等を見ると一種の突發的の夢が腦裡を掠め、其の景色は嘗て夢の中で見た様な氣が起るものであると云ふ者があるが、是亦一の憶説に過ぎない。

尙、此の種の明かな夢の實現に對しては幾多の説明が試みられて居る。

吾々は今、それ等の反對論を取扱ひ、一々その説明を吟味するのは後廻しにして、此處では單に生理的には種々の夢があると云ふ事と、今吾々が調査を始めやうとするものは些かでも漠然とした夢ではなく、徹頭徹尾極く些細な點に至るまで深く腦裡に刻み込まれた様な明瞭な幻夢であると云ふ事を心に留めて置かれない。併し論議は後にして事實文を擧げる。公平な讀者は最良の批評家である。吾々の義務は事實を事實として何等の先入主をも交へずに、それ等の事實を迎へる事である。假設は科學を構成しない。精神科學に於ても、自然科學に於ても科學を構成するものは實に此純眞な觀察である。

予は茲に再び「ランコニー」に公表された數多の例（一九五件）——それは非常に明瞭に未來の視力を示してゐる——を反覆しやうとするのでない。併し一八九九年以來、同問題に關係して來た讀者の興味を喚起するに足るべき他の實例を澤山手に入れたのである。「夢中經驗」は未來視力の中、未だ説明されない現象の一つである。吾々は此の章で靈魂の一機能として其の眞の實在を立證しやうとするのである。

此の「夢中經驗」の印象は從來一般に錯覺と考へられ、「偽認」、「記憶顛倒」、「擬似的記憶」、「先天

的記憶」等其の他の假定的の名稱を冠せられてゐる。予は眞理の探究者が次に掲ぐる様な慎重な諸種の觀察に深く注意されたいのである。

就中左の觀察の如きは、單にこれ丈でも吾人の所説の眞實さを證明するに十分だらうと信じる。

豫告的夢によつて明確に示された「夢中經驗」は、それが現在の心理學では假令何んな説明もつかないものであつても、其の事實は依然否む事の出来ない一個の事實である。茲にラングルの僧正管區に屬する有徳な僧侶で、元神學校の教授であつた、カノン、ガルニエ氏の率直な、そして絶対に拒否を許さない報告がある。

「一八四六年、私が神學校の上級に教鞭をとつて第二年目の事であつた。或る夜、私は眠つてゐる間に旅行した夢を見た。私の辿つた道——白く平坦でその縁には疎ばらに木が植ゑてあつた——はなだらかな傾斜をなして山の脇へ下り、それが眼のとゞかぬ所まで擴がつた平原に達してゐる様に思はれた。午後の四時と五時の間なので、太陽は將に地平線に没しつゝ、其の邊りに平和な光を投げ、色と影の濃淡を微妙に描き出してゐた。其の光景の描寫は筆に書くより心に描く方が容易である。

私は何う云ふ譯か知らないが、歩いて來た道に他の一本の道が直角をなしてゐる地點で、急に

立止つた。だが其處には別段に其の旅行者の目を捕へ得る様な珍しい物も無く、又自分の注意を引く變つたものさへなかつた。併し自分は像の様に眞直ぐに立つて吾々が毎日見てゐる田舎の景色を眺めてゐたのである。

左手を見た時、私は其の道が今來た道を横切り、山を巡り、其の巡つてゐる所には、土を支へる爲、道に沿ふて約一米位の塀が建てられてあるのを見た。そして此の塀に沿ふて三本の木が植はつて濃い影を投げてゐる。

私の立つてゐる所から約三十呎程の眞向ふにはよく平らにならされた庭の中に、道路に近く白堊の様に白い綺麗な一軒の家が日の光を浴びて立つてゐた。そして、道路に面した方の一つの窓が開いてある。其の窓の内にはあつさりと、上品な服装をした婦人が腰掛けてゐた。彼女の衣服の明るい色の中でも赤が目立つてゐた。頭には透細工の刺繡のついた頗る珍しい形の白帽を戴いてゐる。年は三十位でもあらう。

彼女の前に十一二の少女が立つてゐた、私は彼女の娘であらうと思つた。少女は編物をして見せてゐる母親を餘念なく見守つて居た。跣足で髪を後に垂らし、母親と幾分似通つた着物を着てゐた。少女の側の地上には三人の幼児が轉がつてゐた。四五才の男の子が跪いて小さい二人の弟

に何か見せてあやしてゐた。其の二人は兄の前に仰向けに寐轉んでゐた。さうして三人で何かしきりに感心してゐた風であつた。二人の女は私が彼等を眺めて居るのを見つけた時、ちらりと、私に、一度、目をくれた。しかし動かなかつた。確かに彼等は旅行者の通るのを度々見慣れてゐるらしかつた。

一匹の大きな犬が彼等の側に長々と寐轉んで折々體を掻いては蚤を追ひ出して居た。廣く開かれた戸口を通して私は室の一番奥で三人の男が一脚の食卓を圍み、二人は片側のベンチに、一人は反對側のベンチに腰掛けて戯れ乍ら飲んでゐるのを見た。彼等は近所で傭はれた労働者の様に思はれた。彼等はリンネルの前掛を掛け、アブルツチの尖つた帽子を被つてゐた。

反對の右手の方には三頭の羊がさも不味さうな草を食つてゐた。時々親しげに角を撞き合はせた。栗色と白毛の二頭の馬が塀に繋がれてゐた。あちこち遊びまはつてゐた美しい一頭の小馬は戯れてゐる人々の食卓へ向つて行つた。彼等の頭髪を鼻でこすつて甘へる積りであつたらうが、年若の無邪氣者は御褒美にビシヤリと平手を御馳走した。

私は又、四五羽の牝鶏と一羽の立派な尾を持つた牡鶏を認めた。此の種の牡雞の青黒色の羽毛は伊太利の山國の人々の帽子を飾るのである。鶏は物欲し相に僅かの食を庭で探し廻つてゐた。

庭の雑草は日光に萎れてゐた。

私は物の十分間もこの平凡な田舎の景色を見て居たのである。而もそれは突如として現れ、忽然として消えてしまつたのである。かゝる光景は以前にもその後にも見た事がなかつた。私はその光景が永劫に夢の流れに亡びてしまつたものと計り信じてゐた。

次はそれが再生して如實に見た事である。其は宛も昨日見た村の時計塔を今朝も亦た見る様に明かであつた。

一八四九年私は二人の友と伊太利に旅行した。

マルセイユに着きジエノアへ行き、レグホーン、シエナ、フロレンスを一寸見て、それから羅馬へ進んで行つた。

吾々はアベニン山脈中の一寒村を過ぎる時、田舎自慢の一臺の馬車が吾々を迎へた。それを曳く四五頭の馬が澤山の小鈴を一度に鳴らして矢の様に走り出す。馭者はアフリカヘルメットと云ふより寧ろ道化役者の帽子を被つてゐた。彼は絶えず鞭の音をさせる、——今にも關節をはづしさうである。

彼は此の自慢の異様な馬車を得意に町中へ曳込んで彼の勇ましい働きを人々に見せる。吾々は

それを稱讚する邊もない、吾々の馬車は走るのではない寧ろ飛んで行くのだ。

併し其町を離れると今までの活劇は皆消えて吾々はすっかり気が落付く。吾々は山の頂上に着いた。馬車は五分間止まる。四頭の馬は疲れた馬に代る、馭者が鞭をあげる。馬は埃と共に飛ぶ。吾々は魂を神に委ねて、嵐の様に下る、(こんな事まで書くのは何うして吾々があんな無鐵砲な乗り方をやつても無事でゐられたのかと今でも思ひ出されるからである。)

終に、馬車は速力を緩めて無事に馬糞所へ着く。

止まつてゐる間に私は馬車の戸口から外を見る、すると汗が出て来る。私の心臓は激しく鼓動する。私は何だか眼に見えぬヴェールで顔を被はれて居る様な気がして鬱陶しさに堪へぬので、それを除く爲に私の手は幾度となく顔を擦つた。私は夢を見て不意に覺めた人の様に、鼻や目を擦つた、私は本當に、夢を見てゐるのだと思つて見ても、自分の目は現に皿のやうに開いてゐたのだ。私は自分が狂つたのでも、又非常に珍しい錯覺に捕はれてゐるのでもない事を確めた。而して私の目の前にはずつと前に夢で見たあの田舎の景色が今、歴然と展開して居るのだ。

私が我に返つた時、先づ頭に浮んだのは「此は見た事のある景色だ」と云ふ考へであつた。——何處だか知らないが儘かに見たと云ふ事は疑ひない。けれども、私が伊太利へ行つたのはこれ

が最初である。

あの交叉した二本の道路、庭の横に在る土支への小堀、あの樹木、あの白い家、開いた窓、編物をしてゐるあの母親と彼女を見守つてゐる娘、犬を見て喜んでゐるあの三人の子供、酒を飲み巫山戯てゐるあの三人の労働者、ピシヤリとやられたあの小馬、あの二頭の馬、そしてあの羊もゐる。何も變つた事はない。其の人物は前に見たのと寸違はない。そして私が前に見た通りに、同じ態度の身振等で同じ事をして居る。何うして斯様な事が有り得るだらうか。併し事實は何處までも事實である。五十年の間私は不思議でならない。眞に不思議だ！ 初めに私はそれを夢で見た。次に三年後に私はそれを現實に見たのだ。(第九百一信)

カノンガルニエ

原文は恠うである。殊に其の詳細な點が頗る興味あるので、故らその全文を出したのである。此筆者が單なる平凡な人でもなく、又、不真面目な人でもない。勿論錯覚者でもない點から考へても、此報告の眞實を疑ふ譯には行かない。そして其が眞實であると認める時、吾々はこの報告の中に二個の事實で記録されてある事に注意せねばならぬ。即ち第一にラングルの神學校の一室で見た光景の夢と、第二に三年後此の夢と全く同じものを見たと言ふ事である。

夢中に見た事が錯覚であると教へる心理學者は誤つてゐる。報告者の見た景色は事實前以て見たものなのである。

勿論夢の旅行と現實のそれとの二つの光景は五十年の間に更に當時より、もつと完全に類似點を修飾されたとも想像し得ないでもない。併し其の基礎には變りはない。彼は二度續いて同一光景を見たのである。一度は夢で、一度は實際に、そして最初のものはそのれについて何等疑念の起らぬ位強く彼に印象を與へたのである。

此の話から既に讀者の知つて居る彼のサンメクサンのニオールの豫告的夢の事を思ひ出させる。セント、ラドゴンドの牧師グルサル氏は十五才の時ニオールの學校で次の様な夢を見た。彼はサンメクサン(彼はその名前すら知らなかつた町)で彼の學校の校長と狭い辻廣場にゐた。その傍に一つの井戸があり其井戸の向側に一軒の藥屋があつた。彼は一度彼がニオールで會つたと記憶してゐる近所の一婦人が自分の方へ歩いて來るのを見た。此の婦人は彼に言葉を掛けて或る事柄を話した。——其は非常に變つてゐた事なので、朝になると、直ぐ彼は校長にそれを話した。校長は非常に驚いて彼に其話を繰返へさせた。數日後、其校長はサンメクサンに用事があつたので。其の少年を連れて行つた。到着すると直に二人は子供が夢の中で見た辻廣場に(グルサル氏が予に送つた地圖に印づけられた二

點に)来た。そして問題の婦人は彼の方へやつて来て校長と一言一句も違はずに生徒の話した通りの會話をしたのである。

實際此の種の出來事は往々想像以上に頻々と起るものである。予一人でさへ随分澤山に聞いた事である。次の出來事には未來の光景を正確に見たと云ふ事が明瞭に示されてゐる。(九二〇信)

「一八九八年の六月、私は深く慕つて一人の叔父と一緒に暮して居ました。彼の健康上の必要から私共は今まで居た部屋を引拂つて、庭に囲まれた南向きの家に移る事にしたのです。

私共が引越す前の晩の十一時に、私は獨り自分の部屋で此の住みなれた部屋を去るのが何となく物悲しく思つて居りました。其の時、突然私は新しい住家の庭の六月頃の景色——木の葉は繁り、花が一面に咲き満ちてゐた——を見ました。それから、次第に大きく明瞭に見えて來ました。そして今度は冬の有様に變つたのです。残つてゐる縁は常春藤ばかりでした。同時に私は一人は大きく、一人は脊の低い二人の葬儀屋が町へ出る道を歩いてゐるのを見ました。此の幻覺は非常に濃厚で私は初めの中は非常に深い印象を刻まれたのです。其の後、叔父の容態を心配してゐる間に、幻影の事は段々に考へなくなりました。けれども、それから七ヶ月後、一月に叔父は亡くなり、殊に彼の埋葬の日死骸が運び去られる數分間前、私はあの一人は大きく一人は小さい

二人の葬儀屋が幻で見たと同じ場所の道を下りて行くのを見たのです。

ル、アーヴル、コルネイユ街十五 マリー、ルバス

此の手紙は筆者が全く名利を離れて正確に確かめられた未來視力の一例を、特に予に知らせる目的を以て送られたものである。筆者が彼女の叔父の死を豫知した事は想像し得る。併し事はそれだけに過ぎない。七ヶ月後に起つた事即ち冬の景色、二人の葬儀屋を見た事は合理的常感の範圍外に在る。

「夢中經驗」の現象は瞬間的幻覺の現象で説明しやうとする者もあるが、其は不可能である。何故ならば筆者は一八九八年六月の或る晩にそれを經驗し、其の出來事は一八九九年の一月に起つたからである。

更に「夢中經驗」の證據は澤山ある。次の報告は一九一八年五月二十六日發行の「ラ、ヌーヴル、モード」に出した記事で、「ラ、グラーン」の讀者から送られたものである。

「私は次の様な夢を見た事があります。其は學校の休暇に私が例年の通り某地へ出掛けて行つた光景でした。併し私に與へられた部屋は私が毎年占領する部屋とはちがつておりました。而も衣裳戸棚の後に火が燃えてゐるのが見えたのです。餘り馬鹿げた夢なので、私は間もなくそれをすっかり忘れてしまいました。

六ヶ月後の事です。私は其地に到着しました。すると私は一軒の頗る小さい夏向きの別荘に案内されました。私は今までこの別荘を一度も見た事はありません。が、私の爲に調へられた此の狭い場所には確かに見覚えがありました。夢に見たと全く同じ場所に置かれた衣裳戸棚を見た時、私は同じ夢の火事を思ひ起さずには居られなかつたのです。そこで其の事を云ふと、皆は此近所は十年の間一度も火事のなかつた所だから大丈夫だと云ひました。然るに私の恐怖心が漸く消えかけた頃、其は私が來てから第四週間目頃でした。警鐘が鳴り渡りました。大火が起つて私の住家から遠くない農場を焼き拂つたのです。そして火は藁と屑で燃えひろがつて遂にあの衣裳戸棚の後の壁迄も焼けてしまひました。

エイメー、ローデユ

此等の前兆は人が想像する程例外的な、そして不確實なものでもない事が分る。

伊太利の學者ポツツァノは、彼の「前兆現象」に關する研究の著作の中に「夢中經驗」に關して全く代表的な次の出來事を記載してゐる。それはパレルヒの劍客の第一人者と稱せらるるジョヴァンニ、デ、フィゲロアはその身に起つた事件の物語である。

『一九一〇年八月の或る夜の事、私は奇態な夢に驚かされて目が覺めた。其の夢は非常にはつき

りとしてゐたので、妻を起して残らず物語つた。それは次の通りである。

「私は何處とも知れぬ田舎の白い塵ぼい道の上を歩いて居た。其の道を通つて私は廣いよく耕された畑に入つて行つた。此の畑の中央には一階が店と家畜小屋になつて居る田舎風の建物があつた。其の家の右手に澤山の木の葉や乾いた材木で造られた一種の小屋があつた。そこには又、二輪荷馬車が置いてあつて、其の枠は取外されてゐた。そしてその車の上には馬具が載つてゐた。それから、一人の農夫——その人の顔は今でも明確に私の記憶に残つてゐる。黒味がかつたズボンをはき、ソフトを被つてゐた。——が、私の所へやつて來て、後に踵いておいでなさいと云つた。私は彼の云ふがまゝに従つた。彼は其の建物の外へつれて行つた。そして低く狭い入口を潜つて、四五米突四方位の、汚物と肥料に満たされてある小さい家畜小屋へ這入つた。此の小さい家畜小屋の中には短い石段があつて、小屋の入口の上を通つて奥の方へ向つてゐた。一つの槽に一頭の驢馬が結付けられ、その驢馬の後半身は石段に上る道を塞いでゐた。農夫がその獸は溫柔しいからと保證したので、私はその馬を動かして段を上つた。段を上りきると、私は何時の間にか木の床の小さい部屋——屋根部屋——に入つてゐた。そして冬の西瓜、緑色のトマト、葱、未熟の小麥束が天井から下つてゐるのを見た。

此の控室には二人の婦人と一人の女の子が居た。婦人の一人は年寄つた人で一人は若かつた。私は若い方が小供の母親だらうと思つた。此等三人の容貌も亦、私の記憶に深く刻みつけられてゐる。隣の部屋へ入る戸口から非常に高い今まで私の見た事もない様な二重寐床が見えた。——以上夢であつた。十月に私は同市民アメデオ、ブルカト氏の決闘に助太刀する爲めにネイプルスへ行つた。此の助太刀から私が蒙つた災難に就ては茲に話す必要はない。只此夢に關係があるのは私とその事から私自身に決闘せねばならぬ事情が生つたのである。

此の決闘は十月十二日に行はれた。其の日私の補助者——ネープリ守備隊第二輕歩兵隊のブルノ、パラメンギ大尉フランツエスコ、ブサルドーと私は、生れてから行つた事も、又その存在さへも知らなかつたマラノと云ふ所へ自動車で走つた。私が其の平坦な田舎へ數町も入つたかと思はれた時、私は其の廣い塵埃で白くなつてゐる道を見て私は非常に感動を覺えたのであつた。それは私は其の道を何時か何處かで見た事がある様に感じられたからである。私達は畑の縁で止まつた。其の畑は既に私が夢で見た事があるので決して未知な場所ではなかつた。私達は自動車から下り、畑の中の、叢林や木々に縁取られてゐる道を歩いて行つた。私はその時側にゐるブルノ、ペラメンギ大尉に向て、「僕は此の場所を知つてゐる。僕が此處へ來たのは今が始めてぢやないんだ。此の道の終る所に一軒の家がある筈だ。その右手の方には木造りの小屋がある」と云つた。實際その通り皆そこにあつた。而かも馬具が載つてゐて、鞍の取外してある荷馬車まであつた。

間もなく、黒ズボン、黒ソフトの農夫——二月前夢で見たのと寸違はぬ——が私に、彼の後について其の家に入れと勧めにやつて來た。私は彼より先に立つて私の既に知つてゐる家畜小屋の戸口へ行つた。入ると驟が槽に繋がれてゐるのを見た。其の驟の後部が小さい石の階段を上るのに邪魔をしてゐるので、私は農夫に向つて其獸が溫柔やさしいか何うか訊ねた。彼は危くないと請合つた。階段を上り切ると、いつの間にかあの屋根部屋の中うちにゐた。そこに私は天井から下つてゐるあの西瓜、緑色のトマト、葱、未熟の小麥束を見た、そして小さい部屋の右の一隅には、夢で見た通りの老婦人と若い婦人と女の兒が居た。

自分の身廻りの物を脱ぐ爲めに私は隣室に這入らうとした。其處にも夢で非常に高いものだと思つた事のある寐臺が置いてあつた。其の上に肌着と帽子を置いた。

私はこの夢の事を種々の友人に話した。殊にパラメンギ大尉、辯護士トマツソ、フオルカシ氏、アメデオ、ブルカト氏、デントレ、ディアズ伯爵、ナボリのロベルト、チアンニナ氏は、決

圖の時に居た人間と場所に就ての正確な證人である。

武人としての私の言葉に詐りのない事を誓ふ。併し、是非證人の證明に據らねばならないのならば、私は前に名指した友達の一人一人に照會されても少しも差問はない。彼等は喜んで説明して呉れる事と信じる。此は事實の儘である。その解釋は學者にお任せする。

デオヴァンニ、デファイゲロア」

「此話も其の確實性を疑ふ事が出来ない程注意に値するものである。それは話をした人間は自ら所謂武士の言葉の權威を誇る人であり、又、彼の夢を其の實現する前に物語つたと云ふ假定を全然容さなからである」とポツツアノは書いてゐる。

ポツツアノは唯靈論者で再生を信じてゐる人である。彼は精神の生命から此等外見上の矛盾を立派に説明が出来るると信じて居る。

けれども此の神秘の説明は未だ實際には與へられてはゐない。吾人の研究に貽されてある所は即ちそれである。

存在せぬ物、未來——三年でも、三月でも、三日後でも、大した違ひはない——の他には存在しない物をも見ると云ふ事は最早吾々には毫も不思議を感じないのであるが、未だに吾々の研究を了解し

ない人にとつては承認し難い事であらう。此事に關する吾々の記録も亦多數に蒐められてある。此處にもう一つの例を擧げる。

露國ツヴェル縣の官吏で、大學校の顧問をしてゐるプレトネフ氏は、一八九九年予に手紙を寄せ、(七七七七信)。彼が夢で友人のオセロフが棺に入れられ、親族や友人に取圍まれて運ばれるのを見た云ふ事を知らして來た。當時彼はオセロフの健康状態は勿論、その所在さへ知らなかつたのである。事實オセロフは彼のその夢と殆んど同日にツヴェル縣の一市ヴィクトニ、ヴァロチエクで亡くなつたのだと云ふ。

此の手紙には次の事も加へてある。それは此筆者が非常に尊敬してゐたツヴェル縣の法官の一人イヴァン、サゾノフ氏は或る日一軒の家の前を通る時、彼の意識は全く明瞭であつたに拘らず、其の外側に會て存在しない石の階段を見た。プレトネフ氏は其の同じ日に其處を二度も通つたので此の外側の階段は實際其處にないと云ふ事は全く確かであつた。併し三四日後に通つた時、彼は其處に白い石が壊されてゐるのを認めたのであつた。

故に此の存在しない階段は、未だそれが建てられない以前にすべて目撃されたのである。而してその目撃者が其の側を通り乍ら「この階段はすでに見たものだぞ」と信ずるのも無理はない事である。

次に又之に類した他の一例を挙げる。

『マルブルクで數學を教へてゐたボエム教授は、或る夕友達を訪問してゐた時、彼は是非歸宅しなければならぬと云ふ不安に捕はれたのであつた。是時彼は強いて落付いて茶を飲みつゝ、故らに此の氣分に反抗して見たが、何うしても堪らなくなつたので、彼は急いで家へ着いた。彼の家には何の異状もなかつた。けれども、彼の一種異様な懸念から、幾らそれが莫迦氣た事に考へても何うしても彼のベッドの位置を變へなければならぬ様な感じがした。そこで彼は僕を呼んで手傳つて貰つて、ベッドを部屋の他の側へ引張つて行つた。それが終つた時、彼は全く安心を感じた。彼は再び以前の友達の所へ戻つて行つた。彼が歸宅して寐に就いたのは十時であつた。夜中彼は大きな音で目が覺めた。見ると、一本の重い梁が天井の一部と共に落ちて来て、以前彼のベッドのあつた所に横つて居たのである。』

斯様に吾々に警告を與へる不思議の力は抑も何であるか。さうだ此の事實——存在しない物を見る事——總ては全く承認出来ない事の様に思はれるものであると云ふ事を予は繰返して云ふ。一八四九年にアベ、ガルニエの觀察した光景は一八四六年には存在しなかつた。即ちあの若い女はその時から三つ若く、彼女の小供の一人は未だ生れてなかつた。ルバス女史の叔父はその七ヶ月前にはまだ墓の

中には居なかつた。マラノの十月の光景は八月に見られる筈はない。けれども事實は事實である。何處までも拒否する事の出来ない事實である。

最も興味ある談話に就て予の照會に對して態々送られた次の手紙を接手した時は、此の著の原稿は既に印刷の方へ廻した後であつた。けれども有益な材料として此の夢が事件を其の證據と共に予の著作に加へる事にした。

「御約束通り、貴君が發表したいと言はれた不思議な夢の話、二つの證據と共に同封御送り致します。

一九一九年九月九日巴里にて

A、 サウレル

一九一一年のある晩、私はまだ一度も見ない片田舎に居る夢を見ました。

緑の若草で蔽はれて、何となく圓味を帯びた、なだらかな傾斜の裾を引いた、稍々小高い丘の上に、半ば田園か別荘の様な、半ば防備を施した農場の様な、中世風の宏莊な建物が見えます。高い城壁が久しい間の風雨に荒れ果ててもまだ昔の原形を偲ばせる。其の建物を取り圍んで、餘り高くない頑丈な塔が四隅を支へてゐる。建物の手前から牧場へ向つて美しい小川が清く、さらさらと流れてゐました。

人々——それは軍人でした——はその小川から水を運んで居りました。又他の者は城壁に沿へる又銃の側で焚火して居ました。これ等の軍人は私が未だ見たことのない淺黄の珍らしい制服をつけてゐました。そして又、私には非常に奇妙に見えるヘルメットを被つて居たのです。

所が私自身は將校の服をつけて、野營の命令を與へてゐたのです。

多くの人々がよく經驗する様に、斯かる不思議な現象中に、私は夢の仕事にたづさはりながら考へました。「何と馬鹿な仕事であらう。俺は一體何うしてこんな所へ來たのかしら。何うしてこんな變な服を着てゐるのだらう。」と。

目が覺めてからもこの夢の印象は極めて明瞭に精確に残つてゐました。そして此の夢に現はれた事は現在の私に取つては極めて不自然な事柄で、殊に私が軍隊を指揮すると云ふ様な事は、殆んど有り得べからざる事實と思はれます。けれども、不自然な事柄の中にも少しも不合理な點もなければ滑稽な意味はない事は最も興味を覺えずには居られませんでした。

その日一日、私は周圍の人達に此の夢の事や、不思議な青い兵隊の事を話して聞かせました。その後はこれ以上考へたことはなかつたのです。

然るに大戦は多くの人命を奪ひました。私は後、歩兵中尉になりました。そして私の聯隊はオ

ープの正面に接近して對陣してゐました。私の部下は一九一九年度の補充兵であつたのです。

私の大隊は早朝から前進してゐました。長く延びた青々としたライ麥を萎らせる程の暑さには、私共の若い新兵達はいたく苦しみました。疲れ切つた何千の足から揚げられる砂塵で、自分が今何處を歩いてゐるのかも分らなかつた位です。その時私は城壁の下で宿營すべき命令を受けました。宿營係の話には、その城は右方二百米の場所にあると云ふ事でした。私は自分の小隊にその命令を與へてから大隊長の所に行きました。

間もなく、私は中隊へ戻つて來ました。城は並木で見えなかつたのです。然るに私が並木路を通過して、そこに展開された景色を眺めた時、私は本當に驚きました。

それはなだらかな斜面の牧場です。六月の女神がまき散した美しい花で彩られてゐました。城壁も、塔も、凡てのものが七年前の夢の中で見た光景と全く違はないものでした。唯だ物足らなく感じたのはちよろ／＼音を立て、流れてゐた小川と記念の城門のない事だけでした。

私が恚うして夢と現實との間に迷つてゐる時、副官がやつて來て、何處にか水があるまいかと聞くので、私は「小川へ行け」と答へて笑ひました。何も知らない傍にゐた下士官は當惑した様に私を見つめてゐました。私は續いて「いや、若しこちら側になかつたら、向ふ側には必度ある

管だ。一緒に来たまへ」と言ひました。

私達が此の隅を廻つて行くと、其處には苔むした小石の上を綺麗な水がちよろ／＼流れて居るのを見つけました。そして城壁の眞中に向つて私が夢の中に見たのと少しも變らない古い煉瓦の柱のある大きな城門がありました。

私達は先づ先頭二小隊の水の問題は解決しました。私の部隊は城壁の蔭に沿ふて又銃しつゝ、楽しく休息してゐました。

こゝに描かれた實景は一九一一年の夢のそれでありました。私はこの場所には何等の知覺を持たなかつたのです。此夢は明らかに私が未來の地位を明かに示してゐる驚くべき現象であつたのであります。そして此の事は一九一一年には絶対に豫想を容さない出來事である事は茲に斷るまでもないのです。

A、 サウレル

此の豫告的の夢は極めて精確である。サウレル氏は彼が一將校として從軍した一九一四——一九一八年の大戦中の一挿話は既に一九一一年に見たのである。それは拙著「未知の世界へ」の中に引用した一八七〇年の戦争中に現はれた自分を見たと言ふレグニール氏の話と同様である。此の場合幾多同

様の事實にも適用される事ではあるが、其處に次の疑問は起る。即ち若し或る者が一年先の事、或は七年先の事、或は今引用したアツベガルニールの場合の様に三年先の事が事實の上に現はれて、其時當然現出すべき事實や、光景が、或る期間を隔て、豫め見られたものとすれば、そこに人の自由意志は無くなつて、そこに生ずる主張は絶対的の宿命論に終つて了ふと云ふ事になるまいか。

一八七〇年のある時、レグニール氏はプロシヤ軍とババリア軍に對抗すべく從軍する事を前知して居つた。又一九一八年にはサウレル氏は未知の塔の下に水を求めた。斯様に同様な先見の例が澤山ある。何れの場合も皆眞實である。何處に吾々の自由意思があらう。何處に吾々の個性的自由の力が見出されるであらうか。此處に絶対的の矛盾がないと言はれるだらうか。吾々の行爲の自由と未來の視覺を一時に、そして同時に、許すことは出來得やうか。

此の疑問は次の章に於いて充分に論議されやう、唯だ此處には此の問題は極めて微妙なものである。而も外見上相撞着せる此の二つの條件を調和する事と、人間の意志は是等の事件を惹起せしむる一つの素因であると想像する事に依つて解決されるものであると言つて置く丈に止める。或る事は常に起るであらう。併しそれは必ずしも避け得ないものではない。そして人は思想を超越し、時間を超越して、單純に起るべきある事を見るのである。此の場合それに對して時間は存在しない。そして過

去も未來も共に永劫の現在の中に含まれてゐるのである。

若し人が此の調和を許さないとしたならば、佛蘭西軍を陥れんとしてエムスから偽せの使を出したビスマルクに何の責任があらう。又、サラジエボの殺人事件を巧みに利用したオーストリアの術策に對して、ウイリアム二世の責任を問ふ譯には行くまい。そして世間には放蕩者、盗人、詐偽師、人殺し等の悪人も又、慈善者、篤信家、正直者、又は人類の道德的、智識的幸福の爲に献身する善人も全く存在しないものと思はなければならないのであらうか？

吾々は次章に於て一九一一年フレデリック、パシーから特に予に寄せられた通信を紹介する時、この問題に就て詳しく述べやうと思ふ。

かくの如く、多くの経験は何れも吾等の驚異に値するのである。今反對にこれ等の事實と矛盾すると思はれる方面から種々の臆説を求めて見る。例へば既に見たことがあると言ふ感じを説明する爲に、ある地方又はある光景に依つて網膜の上に形作られる印象は、記憶と意識の中に同時に印せられるものと想像する。そして非常に微かな遅延（一秒の何分の一）に依つて影像の貯への方が意識よりも前に記憶の中に起ると想像する。此の場合、記憶の感覚は一刹那の瞬間でも實際の視覚よりも早く感じられるので、吾々は現在の光景を既に何時か前に見たことがあると思ふ。何故かと云ふと、夢に

於ても證明されてゐる様に、斯様な場合には何秒と云ふ短い時間ですら非常に長く感ぜられるのであると云ふのである。又他の臆説から言ふと、前に見たことがあると思はれる光景の知覚は、一つの物像をプリズムの二つの面に達せしめて、二つの異なつた平面に屈折する二重屈折の光學的現象の様なものである。即ち此の場合には過去と云ふ平面向ふ物と、現在と云ふ平面向ふ物との二重屈折である。ある一瞬間吾々の精神は二重に見るのであらうとするのである。

これ等 實に巧妙な説明である。併し一方から云ふと、それは證明されて居ない、全く證據とすべきものがない、純然たる想像に止まつてゐる。想像は科學的確率の上に何等與る所ではない。又地方に於いては今まで述べ來つた事實そのものが既に是等の想像説を反駁してゐる。即ちネオルの若い學生が未だ全然知らなかつたサン、メクオンの十字街を數日前に見た事や、小兒がコロブ病に罹つたが、それは彼が一日前に豫見した事や（未知の世界）、リエポルト博士の絶望的患者の場合（前出）。カシミールベクエールの選挙の話（前出）等充分に彼の臆説を打破るものでなくて何であらう。是等の場合を考へる時、彼等の説明は殆んど常識に欠けてゐる臆説と云つても可いのである。たとひ彼等の言ふ様な場合が實際に在るとするも、それは寧ろ甚だ稀なことであると斷言出来る。

學院のリボー教授は此の問題を彼の著書「記憶の病」の中に次の様に取扱つてゐる。

「外國に於て路又は河筋が突然に曲折した所などにて、何時か見たことがあると思ふ様な風景に面する事や、又は或る人に始めて紹介された時、吾々は何處かで會つたことがある人だなと感ずる。又何か書物の中で新しい事を読んで見て、既に其の事が一度心に觸れたことの様に思はれる事が屢々起る。」と。

此の著者は此の様な錯覺は次の假説に依つて説明せられると考へてゐる。

「吾々の意識に受け入れらるる印象は、吾々の過去の同じ様な印象を喚起する。それは極めて漠然とした、混亂した、そして容易に捕捉し難いものではあるが、而も新しい印象の反復であると信じるに充分な原因である。即ち根底に於いて速に二つの意識の状態の間に類似を見出すのである。それは吾々をして其の二つを同一なりと速断せしめるものである。それは言ふまでもなく錯誤である。けれども單に部分的の錯誤に過ぎない。何となれば實際吾々の過去には最初の經驗に似たあるものが存在するからである。」と。

此の説明は確に當らない。それは予の掲げ來た事件の何物をも説明するものではない。殊にこの著者は他の場所にて次に引用する現象から却て自家撞着に陥つてゐる。

「サンダーと呼ぶ病人が或る日彼の知己の者の死を聞いて非常な不可解の驚愕に捕はれた。それ

は、彼は前に同じ様な印象を経験したことがある様に思はれたからである。彼は儘かに俺は何時かこんな氣持がした。俺が斯うして同じ床に寐すると、X——がやつて來て「おい、ムラーが先刻死んだよ」と話したつけが。あいつは二度死ぬ譯はない。と叫んだ。」と。

リボー氏は此の奇妙な事實を彼れ一流の生理的に解釋するのに非常に苦しんだに違ひない。彼は又次の例を引用してゐる。之は前の例に似た點も多い。

ウイガン氏はその著「心靈の二元性」の中に經驗を報告して居る。その著書は吾々の腦の二半球に依つて強て説明を試みてゐるのである。ウイガン氏はウインドソールの禮拜堂に於てシャー・ルロッテ公夫人の葬儀に列席した時、突然何時か此と同じ葬儀に立會つた事があると云ふ感を感じた。その錯覺は甚だ刹那的の物であつたと云ふ。

臆説は受け入らるべきではない。又、世人は往々前に何時か見たことがあると云ふ錯覺は、吾々が現在始めた事を曾て知覺した先祖より傳はつた無意識的の記憶の一つではあるまいかと想像する。併しこれも亦當らない説である。

實際、如何なる説明も殆んど不可能である。リボー氏はこれ等の同時現象に對して「誤つた記憶」の作用であると稱へてゐる。併しそれは説明ではない。リボー氏は更に進んでアーノルド、ピツク博

士の研究から引用した次に掲ぐる事件を擧げてゐる。

相當の教養あつて、且つ自分の病氣に就いて深く自覺を有つてゐる一人の男が、三十二才の時、變つた精神状態に陥つた。それは何を聞いても、何處を訪ふても、又は誰に會ふても、彼の周圍の有様が彼には既知の事に思はれるのであつた。即ち前にも同じ様な經驗をし、たしかに同じ人々に出會ひ又は同じ事物に面し、同じ空や同じ天候の許に在つたことがある様な氣がするものであつた。彼がある新しい仕事に取り掛ると、既にその仕事は一たび完成され、そして同じ状態にあつたことがあると思ふ。此の感じは、時には同時に起つた。又は數分乃至數時間の後に起つた。時には翌日に起ることもある。併しその現象は明瞭なものであつた。

これは明らかに病的な状態である。

リボー氏は「これ等の誤つた記憶の現象に於ては其處に吾々より逸出する精神組織作用の變態を見るのである」と言つてゐる。併し此の「誤つた記憶の」なる名稱は吾々に何の説明も與へない。けれども博學な生理學者リボー氏はそれで解かうと試みて、それに都合のよい理由を附けて居る。彼は「過去の事を見定める爲め機械的作用は後方に働らくものである事を認め得る」と説き、そして彼はその例として次の説明を提出して居る。

「かくして形成された幻覺的性質を帯びた心象は甚だ豊富である。而してその錯誤を訂正するものがない爲めに、すぐ眞實なものにしてしまふ。其の結果この眞實なる印象は曖昧な記憶の性質を帯びてゐる背景の中に投げ込まれる。そこで誤つて吾々が物事を客觀的に思考しても、正しく主觀的に考察しても、それは皆過去の中に見定めてしまふのである。此の幻覺的狀態は事實甚だ鮮明なるものであつても、決して眞實な印象を抹殺するものではない。而して此の状態が眞の印象から出る時、それは餘りに緩漫に作り出されるので、宛かも第二の經驗の様に現はれて来る。斯くして眞の印象に代つてしまふ。それが甚だしく最近の様に思はせるのである。事實さうである。何もない所から、そして外部に現はれて来るものに從て判断する時、吾々は印象が二度受け入れられたと考ふる事は誤りである。同時にその意識せる觀念に捕へられて判断する病人などが同じ印象を二度受けたと考へるのは無理もない事である。

吾々は此の博識な教授の所謂説明なるものが、遺憶乍らその實際の説明にもなつてゐないと言ひたいのである。茲に互に異つた幾多の心理現象が存在する。而もそれに對して同一な原理を適用することは不可能である。

リボー氏は結局記憶なるものは一の生物學的の事實なのであつて、それが偶々心理的事實を含む事

があると云ふに過ぎない。兎に角腦の細胞の数は六十萬乃至一億二千萬である。そして腦の神經の数は四十億若しくは五十億と計算されて居る。故に人の腦髓は絶えざる運動の充溢せる製作場と考へらるべきである。そして其處には數千の労働者が同時に動いてゐる。記憶の印象も確かに多いに違ひない。而してその中のある印象は既に述べた通り物理的ではなくて寧ろ心理的なのである。若し記憶が心理世界に屬する事を以て單に偶然であるとすれば、此の偶然は宇宙の體素の外見上の不規則や、その攪亂の原因が天文学上の發見に最も重大な素因である様に、恐らく未知の世界の發見を助くる唯一の要因ではあるまいか。吾々は彼の天王星の軌道の擾亂から海王星の發見、犬狼星の屬星の發見其他にも斯うした事實を見るのである。何時か見た事があると云ふ氣持は決して腦の生理的事實ではない。必ず既に見た事を認知する形而上學的現象であると考へる。進んで未來の知識に関する問題を充分に研究しやう。

第九章 未來の知識

意思は常に運命を指導する力として働く——ピタゴラスの黄金詩

既に見たことがあると云ふ現象に關して今まで考察し來つた吾人の研究は自然に未來の知識を構成する豫告的視力を確證すべき觀察の考査に吾人を導く。

予は一九一二年三月一日と四月一日の「公論」に未來の事象がある條件の下に前以て見られ又は知られる場合のあることの證據を「未來の知識」の表題の下に發表したことがある。爾來多くの著書は盛んに此の問題を取扱ふ様になつた。而も彼等は何の骨折なしに予の觀察した實例を自由に擧げてゐる。併し斯んな事は何うでも可いとして、此處に吾等の甚しく興味を感じるのは、未來の事象が時に驚く程精密に豫知される事である。即ち人間の中に物質の本質から全然獨立した能力を附與された一種の心理的原理——肉體より分離した心靈の存在を確かむる事である。

先づ予は一九一一年「心靈科學の解剖」に、そして又上記の「公論」の中に發表した夢に依る豫知

の極めて面白い例を挙げやう。

フレデリックパシイは人類戦争の反対者として多年平和主義を鼓吹して来た尊敬すべき學院の一員であるが、彼は一九一一年の一月私を訪ねて来た。八十九才の老體とも見えぬ程の元氣で五つの階段を昇つて来たのである。併しそれは彼の最後の訪問であつた。

彼は「此の事件は未だ貴著の『未知の世界へ』にも載つてないが、これは彼の慎重な著者であり、非常に正直な人であるクエーカーエティン、ド、グレーから直接話された事であるから、屹度貴方に興味を與へる材料と思ふので、私が特に彼のロシア紀行の中から書き抜いて置いたのですが、それは彼がベテログラードに滞在中、トーチコフ伯夫人が旅上のクエーカーに話した事です」と云つた。

「佛蘭西軍が露西亞に侵入する約三ヶ月前、彼女は夫の將軍と共にその所有地トゥラに居つた。ある晩彼女は知らない町のあるホテルに宿泊してゐる間に、彼女の父が彼女の唯一の子供の手を曳いて現はれた夢を見た。そして彼女の父は明瞭な聲で彼女に「お前の幸福は終つた。お前の夫はやられた。ポロチノで戦死したぞ」と言つた。

彼女は甚く恐怖して目が覺めた。しかし夫が側に寐てゐるのを見ると、始めてそれが夢であつたことを知つて、再び眠つて了つた。同じ夢は又繰返された。彼女はそれが氣に懸つてならなかつた。

つた。

夢は三度續いた。彼女はもう堪らなくなつて遂に夫を起して「ポロチノとは一體何處ですか」と質ねた。

夫も其の地は知らなかつた。翌朝、彼等の父と三人で地圖を出してポロチノを探した。何うしても見付からなかつた。其の頃のポロチノは餘り世間に知られてゐない地名であつたが、後その附近の激戦から俄に有名な場所になつたのである。伯爵夫人が夢から受けた印象は存外深かつた。斯かる中に戦争の舞臺は段々移動して来た。佛蘭西軍はモスコウに到着する。當時トーチコフ將軍は豫備軍の先頭にあつた。ある朝伯爵夫人の父親は彼女の幼い子供を抱いて夫人の泊つて居るホテルの一室に現はれた。夫人が既に夢の中に見た様に、父親は悲し氣に「お前の夫は死んだ。ポロチノで戦死したぞ」と告げた。

夫人は同じ室に居る。そして夢に取り囲まれてゐた事物と全く同じ事物の中にあるではないか。彼女の夫はポロチノ河に起つた激戦の夥しい犠牲者の一人であつた。

フレデリックパシイ

此の豫告的の夢は悲劇的に精確な、全く獨特の趣を有つてゐるものである。

これをしも話者が勝手にこしらへ上げた作り話であると考へ得やうか。既に最初から其の實現を豫感せしむる深刻な印象を以て始まり、而して其の實現の三ヶ月前に彼等はロシアの地圖の上に其の場所を求めたのである。

それは有らゆる確實性を具へてゐる。併し予が既に注意を惹いて置いた様に、ポロヂノに於ける將軍の戦死が數ヶ月前に既に豫見されてゐたものならば、此の死と此の戦ひは絶対に避け得なかつたものであらうか。さうなると斯かる場合に於ける人間の自由意志とは一體何んなものを指すのであるかと云ふ問題が當然に起つて来る。ナポレオンが征露軍を全滅せしめた事も彼の意志ではなくて、當然歸着すべき運命に導かれたものであつて、彼は何等の責任もないと云ふ歸納になりはしないか。責任は單なる錯覺に止まるべきものであらうか。

吾々は後にこれ等の頗る混亂した結果に就て解剖して見るが、先づ吾々は茲に何を考ふべきか。宿命論は凡ての人間の過程に相容れない様に思はれる、けれども宿命と宿命論とを同一のものとして考へるのは誤りである。

これに關して、ナボリのヴェラクンツレル嬢と云ふ若い女性から、一九一七年四月、悲歎の言葉に充ちた手紙を予に送つて來た。それは未來を視る力に就ての動かすべからざる事實に關して、嘗て予

の發表した文章を読み、これ等の深く觀察された事實と、人間の自由意志と吾々の自由、責任の觀念は何うして調和し得るものであるかと云ふ事に就ての説明を求めたものであつた。彼女は最近彼女自身の家庭に實現された悲しい豫告から深刻な感激の衝動を受けてゐたので、殊更ら熱心にその解釋を求めてゐたのである。

予は宿命論と宿命論は全然相異つた二つの教義であり、一般に行はれてる様に決して兩者を混同してはならないと彼女に答へた。第一に、人は受動的なもので、避け得ない所の事件を待つてゐる。第二は、其反對に、人は能動的なものであつて自分がそれにたづさはるべきものの原因を作る。人は起ると決まつた事を見るのではなくして、未來に於て起るであらう所を見るのである。何事かは常に起るものである。吾々が見る所の物は此のものである。そして而も之は絶対に避け得られないものではない。その差別は——實際に差別である——著しく微妙なものである。併し十七才の純眞な、凡ての豫想觀念を有たない若い彼女の心と、彼女の通信の間に特に予の胸底に極めて微妙オウキヤトに觸れた彼女のすゝましい感受性とから考へて、若し彼女に必要な注意を與へたならば此の差別を知覺し得るであらうと予は思つたのである。そこで予は彼女の家に實現され、彼女を斯程までに苦しめた豫言を詳はしく知りたいと言つてやつた。かうして予が受け取つた彼女の手紙を茲に掲げる。

「敬愛する大先生、——貴方のお手紙を拜見して、私はどんなに幸福に思つたこととせう。あのお手紙を頂いて二重の喜びを得ました。それは第一にあのお手紙は先生から来たこと、第二には私の小さな頭を掻き亂してゐた怖ろしい煩悶の中に一筋の光明を與へて下されたことなのです。私は先生のお手紙で深く考へました。そしてたとへ先生が未來に起るべき事が見えても、それは避けられないことではないのだと私によくお教へ下された意味が分りました。あのお手紙は本當に私を救つて下されたのです。事實、私は今まで、私達はもう何物の主ではあり得ない、自分自身でさへも自由にすることも出来ないのだと云ふ考へに獨りで悶えて居たのです。」

次に私に恚んな宿命を信じさせたあの事を聞きたいとの御尋ねによつて、私は出来るだけくはしくお話致します。

それは七年前、一九一〇年の春のことでした。其の時分私達はヘレン、シュミットと云ふ獨逸の婦人と昵懇にして居りました。その婦人は奇妙な力を有つてゐる巫女でした。私のお母さんはこんな神降かみかろしに凝つて居た時ですから、ある日此のシュミットさんに神降して貰ひました。

私はその頃まだ十二、三才の子供でしたから學校へ行つて居りまして、その時は家に居なかつたのです。それでもお母さんや家の年寄つた召使から時々其の話を聞いてました。

その時、シュミットさんは手を机の上へ載せただけで急にぶる／＼と烈しく震ひ出したのださうです。先生、若し魂があるものとすれば、その魂と通信する仕方は御存知の事と存じます。筋肉の力では抑ても持ち上げることの出来さうもないあの大きな重い机が魂が乗りうつつてコトコトと規則正しく動き出したのです。其の時お母さまはその魂の名をたづねました。すると魂は自分で、アントンと云ふ名前だとアルファベットで告げました。巫女は此のアントンと云ふ名前も知らなければ、その人も知らないのです。アントンと云ふのはアントン、フィードラーと云ふオーストリア人で、私の叔母、お母さんの妹の前夫の名前なのです。叔母は二度目の夫としてアドルフ、リースベックと結婚しました。此のアントン、フィードラーは私の叔母の一番近い身内ですから、お母さんは叔母の未來について何か聞かうと思つたのです。そして最初に「リースベックは永く財産を維持して行きませうか」と質きました。すると魂はぶつきらほうに「否」と答へたのです。そこで再び。

「何年後に彼は財産を失ひますか」ときくと、

机は二つ鳴つて、「二年間」と答へました。

お母さんは次に「彼は財産を失つてから後も長く生きて居りますか」と問ふと、その答へは明

際「五年間」とありました。それからお母さんは何うして彼が死ぬのであるか知りたいと思ひましたが、叔父は突然に死ぬとばかりでした。それでは病氣、事故、自殺、難船、或は犯人の手にかゝつてかと聞いても、魂は「否」と答へる丈でした。その時分は誰も戦争のことなどは夢にも考へてゐなかつたのです。最後に私達が「リースベックの子供は彼が死ぬ時何才になつてゐますか」と聞くと机ははつきりと「十七才」と答へました、それで何もかも済みました。

先生、私は自分でそれを註釋する力はありません。私はたゞ事實だけを申上るのです。母上さんはすぐこの事を叔母に話しませんでした。それは叔母がそれを夫に話されるのを惧れたからです。不幸にも恐ろしい程本當に豫言は當つたのです。一九二二年の春、丁度豫言から二年後、私の叔父は大きな投機に手を出して財産を無くしました。間も無くお母さんは未だゼネバに居た叔母にその豫言の事を語り、又、その後の事も告げましたら、

叔母はそんな馬鹿なこと、「そんなことを信じられません」と言ひました。けれども、不幸にも豫言の第二番目も矢張り實現したのです。其後母と私は折々此の豫言の事を話し合つてゐました。そして私は「魂が告げたことが本當かも知れない、叔父さんは一九一七年の初めに死ぬんでせう」と言つて居りました。

先生、アドルフ、リースベックは一九一七年二月十二日に戦地で亡くなりました。突然の死亡でした。頭部に弾が當つて全く突然に死んだのです。その時私の従弟のマリオは十八才でした。魂が私達に精確には告げ得なかつた、病氣でもない、事故でもない、犯罪でもない、想像される如何なる死でもなかつた死といふのは此の戦死なのでした。

先生此の手紙と共に私の叔母が夫を失くした時私達に寄越した手紙の一部をお送り致します。それは獨逸語で書いてありますが、先生は無論お読みなされると思ひます。そして私は此の手紙の終りに母に署名して貰はうと思ひます。

私は此の不思議な豫言が先生の御研究に幾分でもお役に立てば幸福と思ひます、そして大戦役後先生が未來の豫見について御發表になる御著書を一日も早く讀みたいと御待ちしております。私は今まで、私の叔父の死は未だ弾丸が銃口を飛び出さない前からもう定まつた運命であると云ふ考へに苦しめられて居たのです。そして凡ての事は絶対に避けられないものではないと云ふ事の御教示を蒙つたのを本當に嬉しく感じるのでした。

先生の貴い時間をお妨げした事を御許し下さい。私が幾度も先生に御伺しやうと思ひながら、その都度躊躇して居たのは全くその爲なものでした、併し、今は斯うして先生のお手紙にお答へ出

來るのを嬉しく存じます。私の申上る事は全くなのです。

佛蘭西天文學會の貴方の教子

ウエラ、クンツラー

私の娘の書いた事柄はそのまゝ全部事實であることを保證します。

E、クンツラー

この疑ふ餘地のない、誠實さの溢れた手紙について兎や角註釋を試みる事は、讀者にとつて餘計な事であらうと思ふ。談者が私に呉れた最初の手紙に溢れてゐる、堪え難い苦惱と限りない好奇心からしても、私はこれを信ぜざるを得ない。私は茲にも未來の豫覺に關する代表的な例を持つてゐる。

その一見パラドックスに似た定命論との一致について述べて見やうと思ふ。

この様な事實を否定する事は最早不可能である。すべての否定は無智——或はこれと同様な心的状態——の明かな例證たるに過ぎないであらう。

これに關聯して、トーチコフ將軍の豫告と私の註釋が一九一二年三月及四月の「ラレヴェー」に發表された時、フレデリック、バツシイは私に次の様な手紙を寄越した。

「フラマリオン足下——私は貴方が彼の論文中に述べて居られる豫告の可能性を信じ兼ねるもの一人であります。何故ならば、事件が豫め絶対に決定的なものである以上、最早、自由意思の

存在が否定されてゐるからであります。ですが、私は貴方が引用された様な事件の一つを茲にお知らせしやうと思ひます。

先づチー、ルノートルの著、「ローリー侯爵と一七九〇——九三年佛國陰謀」の中にも同様な事件がある事を述べて置きます。

サン、オーリエル夫人——陰謀者の一人であるノイヤン氏の女——は或朝その父に、父が逮捕されて巴里の革命裁判に附せられる事と、自分が首尾よく父の命が助かると云ふ事などを語りました。父は勿論そんな事があらうとは少しも信じてゐなかつたのです。この話は夫人——夫人はずつと後に死にました——の直話で、その令息もこれを保證して居ります。令息は其の當時十五歳位で、後王政復興及ルイ、フィリップの時フランス、アカデミーの一員として重要な人物となつた人であります。

此の事件を如何に解釋すべきものでせうか、御教示願はしう存じます。

一九一二年四月二十七日

フレデリック、バツシイ

この豫告は正しく實現されたのである。

人間の自由意思の問題は確かに研究に値する事項である。

フランスの誇とも言ふべき、最も偉大な、最も洞察力に富んだ人物で、同時に亦最も純潔な著作家である、かの大幾何學者ラプラスの著述を讀む毎に、今も尙切實な審美的な喜びを禁ずる事が出来な
い。これは自由意思に關する彼の著作、「蓋然性に關する哲學的論文」の中に收められてゐる。彼は次
のやうに述べて居る。

「あらゆる出來事は、自然の大法則に何等關係を持つて居ないと思はれる程の些細な出來事でも、太陽の運動と同様に、自然法則の必然的結果である。これ等の事件を宇宙の全組織に結び附ける係連（カウゼン）を知らなかつた結果、これ等が規則的に相繼いで起るか。又は外面的に何の順序無く起るかに従つて、或はこれが終局的原因であると考へられ、或は偶然に基くものと考へられてゐた。併し、この想像的原因は吾々の知識の範圍の増大するに従つて漸次撤回され、遂に健全なる哲學の前には全く消失するに至つたのである。この哲學は吾々がその眞の原因である無智の表現をのみこれ等の中に看取する。

實際の事件とこれに先立つ事件との關係は、事物はこれを生ずる原因無くして存在し得ないといふ自明の原理に根據を持つてゐる。この「充足理内の原理」として知られてゐる公理は、如何に些細な事件にでも適用される。どんなに自由な意思でも決定的動因なくして事件を生ぜしめる事は出来ない。若し全く同一な二つの状態に於て、その一方に於ては自由意思が働き、他方に於ては働かないとしたならば、その選擇は事實何等原因を伴はないと言ひ得よう。その場合にはライブニッツの所謂エビキュリアンの盲目的選擇である。この反對意見は、意思の種々異つた事物間に於ける選擇に對する不確かな理由を見失つて、意思は自ら自身を決定して何等理由を伴はないものであると自ら強ひて信じやうとする心の錯覺である。

故に吾々は宇宙の現在の状態は、その過去の状態の結果であり、又次いで來るべき未來の状態の原因であると思ふべきであらう。與へられた瞬間、宇宙の原動力たるあらゆる力、及び宇宙を成してゐる存在の各個の状態を直ちに了解し得る様な知力、そしてその知力が全くこれ等の事實を明かに分析し、又宇宙の最も大なる天體の運動と最も小なる原子の運動とを同一の公式中に包含する事を得るものならば、その様な知力にとつてはすべてが確かに解決さるであらう。そして未來も過去と同様に一目瞭然にする事が出來やう。僅かに天文學の上に置られたかの完全さの中に、人間の心に有つてゐるこの知力の微かな輪廓を示してゐるのである。」

今暫くこの推理を論議して見よう。

吾々は普通この説の起源をラプラスに歸してゐるが、すべての思想家は彼以前に於て既にこれを述

べてゐる。けれども、これは當然歸着する事であるが、矢張りその起源が「ラプラス」にあると言つても差支へない。この蓋然性に關する著書の第一版は、一七九五年ラブレラが師範學校に於て講義した教程から成つてゐる。

併し一七八七年イマヌエル、カントはその著「純粹理性批判」に於て次の如く書いてゐる。

「時間とその正しき順序の見地から見て、若し吾々がある人の心を觀破する事が出来、その心が外的行爲と同様に内的行爲に依つても自身を啓示するならば、且我々が、その如何に微かな動機も、そして、同時にその外的影響をも理解し得るならば、彼の未來の行爲は、日食或は月食の豫測と同様に正確に豫測し得る筈である。」

併し、カントも亦この説の創始者ではない。これは最も古い著作家の間にも見出される説である。

例へば羅馬のキケロの如きがそれである。「占斷」に關する彼の論文に於て、後はその弟クインタスが未來の豫見と宿命との關係を説明した事を書いてゐる。彼は言ふ――

「占トを説明するためには、神、運命及び自然にまで溯る必要がある。理性は萬事が運命に依つて支配される事を我々に信ぜしめる。私は希臘人が *συνεχόμενα* と命名したもの、即ち相聯關して結果を生ずる一團の原因を指して運命と呼ぶ。永遠のそのものの中にその根源を有する不變の眞理がある。これに依つて自然は未來のあらゆる事件に對し既に充分なる理由を持つてゐる。かくして運命はすべての事件の永久不變の原因、即ち過去、現在、未來の事件を解釋する原因となるであらう。かくして吾々は觀察に依つてあらゆる原因の結果を知り得るに至るであらう。然らずんば、靈感及び夢を説明するものはこの原因と結果の連鎖である。

序だが、あらゆる事件が運命に依つて支配されるからには、そして又人がすべての原因の間の關係を知悉し得るならば、決して思ひ誤る事はないのである。實際事件のすべての原因を知る者は、全未來を理解し得ない事はない筈である。」

この様な推理はそれ自身に於ては誤謬ではない、繰返して言ふがラ、ブラス氏の言ふ所は眞理に近いものである。原因なくして結果の生じない事は明かである。併し乍ら宿命、即ち絶對的定命論の結論を、この單純な常識論を以て裏書する事は出来ない。

ラプラス——彼の著作に依つて私は薫陶されて来たのだが——に對する深い讚嘆の情を以てしても尙、彼の自由意思の絶對否定には賛成する事が出来ない、讀者諸君は私がこの困難な點に關して私の記録の中に書いた事を既に御承知であらう。

「地上の如何に自由な意思も決定的動因なくして行動する事は出来ない」。これは疑ふ餘地がない。併し選擇に關係する原因の中には、吾々自身の個性も含まれて居り、而も看過すべからざる原因である事を忘れてはならない。

或はこの個性はその優越した動機によつて行動するものであり、個性そのものは以前の原因に基くと言ふ者があるかもしれない、勿論それには議論の餘地がない。併も、個性は吾々の品性と平行して存在し、又この場合更に重要なものであり、更に確かなものである事は、吾々が次の様な事を強く感ずるからである、即ち事件が骨折甲斐のある場合、吾々は心の中で考慮に考慮を重ねて、そのすべての責任感を以て決定するといふ事を強く感ずるからである。

秤が丁度平衡を保つてゐて、どんなに軽い重さでもこれを一方に加へるとその平衡が破れる場合のある事を私も認める。併しこの僅かな重さは吾々の空想でも、氣まぐれでも、意思でも、又豫め分つてゐる結果を破る事に對する吾々の物好からでもよい、——一言にして言へばこれ等は吾々の自由の

行使である。すべて心の幻影に過ぎないと断言する事も、又、證明された眞理としての假説であると言ふ事も共に不可能である。「充足理由の原理」は、これを良心といふ法廷に於て論議する時、吾々自身の中に存在するものである。

吾々が優越した動機に従つて決定する事は、吾々がその性格に従つて行動しないといふ事にはならない。吾々自身の意思はこの性格と聯合し、而もその奴隷とはならない。アリストートルはその「天國」に關する論文に於て、「飢と渴とに苦んでゐる者が、食物と飲料とから同じ距離に居る場合と同じである。彼は結局何れにも行く事が出来ず、そのまま動かすに止るであらう、」と書いてゐる。ダンテも同様な事を *paradiso* の第四卷にかう述べてゐる。ブリダン人は人を騾に置き換へただけで、これと同じ推理を述べてゐる。

人にしても、騾にしても飢餓のために死ぬ事はなかつたらうとは、何人も心の中で信じてゐる。天地间機械的なものは何にもない。

豫知と自由意思とは絶對に兩立しないものであらうか。これは古代及近代の著作家の等しく述べてゐる事である。

「古代の占卜の話」の著者ブーセクラシー氏は、「自由意思に基く不安定な未來は、宇宙の秩序を見

て感得し得た確乎不動の法則に對する觀念の様な譯には行かない。哲學的理論を豫知する普通一般の本能は、未來を避け得ない決定的のものと考へる傾向は必ず持つてゐる。そして未來は正にそれが避け得ないものであるといふ理由を前提として却つてこれを豫知する事が出来ない様になつてゐる。豫知と意思自由との間には絶えざる衝突があり、一方は他方を排斥する。」と書いてゐる。セクスタス、エムピリカスは「未來の事件が必然的に或は偶然的に起らねばならないものならば未來の豫知は全然無用なものであり、自由行爲に依つて生ずるものであるならば、未來の豫知は全然不可能である」と。教へて居る。

シヨウベンハウエルはその著「自由意思論」に於て、「若し例外なしに凡らゆる事件に適用さるゝ因果律から生ずるすべての宗教的必然性を認容しないならば、未來の豫知はすべて不可能であり、不合理である」と書いてゐる。

明かに自由意思と未來豫知との衝突、限りなき矛盾は一般に信ぜられてゐる。これは吾々が未來の豫知を必然性と混同する誤謬であると言はねばならぬ。

一八二五年十月十三日、ゲオーテとエツケルマンとの會話の中に次の様な言葉がある。

「吾々は何を知つてゐるか、吾々のすべての知力を以てして、一體今何處に立つてゐるのか？人は世界の問題を解決するために生れて來たのでない、問題の範圍を了解し、然る後その知り得る問題の限界内に於てよく身を處するためである。

人の能力はよく宇宙を測る事は出来ない、その知力を以て事物の全體に近附かんとする希望があつても知力が然く見地を制限する時、それは無駄な骨折りである。人の知力と神の知力とは全く異つたものである。

人に意思自由を許す事は直に神の全能の終りを意味する。逆に若し神が私の未來に於てなす事をすべて知り給ふならば、私は神の知り給ふ事以外の事を爲す自由を持たないわけである。私はこのデレンマを私の僅かな知識の一例として、又神の秘密に觸れる事の禍である事を示すために述べるのである。

又最高の眞理の中でも世界の幸福に貢献する眞理のみ説明をすればよい。他の眞理は吾々の心の中に秘めて置かねばならぬ。併し隠れた太陽の和かな光線の様に、これ等の眞理は吾々の行爲の上にその光を投げる事であらう。」

ゲオートはこれ以上論を進めなかつた。何故か？

通常事件や、偶然の出来事は吾々の信する以上に吾々に影響を及ぼすものである。その日常生活の行爲を審かに分析して見ると直ちに理解し得るであらう。自由意思は極く制限された範圍に於て活動するのみである。「計畫は人に在り、成敗は神にあり」と言ふが、これは全く正しいとは言はれない。神即ち宿命——ラテン民族の所謂 *Fatum* は吾々に與ふる自由を著しく制限して居る。

茲に前の諺に反對な諺がある——諺は必ずその逆を有つてゐるものである——「天は自ら助くるものを助く」と言ふのがそれである。

然り、人は計畫し、終局は成敗する。併し、同時に吾々は吾々自身の運命の建設者である。

要するに 眞理は宿命を敷衍する哲學者の所謂形而上學の中には存在しないで、却て今引用した普遍的な箴言の中に總括された一般的な、そして實際的な常識の中に現はれてゐるのである。

私の説明は假定説に基礎を置かないで、専ら積極的な觀察事實の範圍に止る事に充分の注意を拂つて來た。自由意思の吾々の感じが幻覺であるといふならば、それは既に假定説である。私は机に就いて自ら何を爲すべきかを問ふ。私は熟考する、推理する、甲か乙かを決する。私は意思に附帶する環境に欺かれてゐる事を自ら信する。反對に又、若し私が理性を持つて居ないならば、私は唯だその事件の

起るに委せるであらう、そして自由は自分に好ましく見えるものを選択する事に存するといふ事を主張する。如何に私が絶對的である事を欲しやうとも、それは相對的であつて絶對的ではない。吾々の計畫は常に覆され、一つもうまく行かぬ日すらもある。それは極めて不完全ではあるが、議論の餘地のない吾々の感じであり、又この感じを抑へて、これに代ふるに吾々は假定説を以てする權利を持つてゐないのである。それは天日の如く明かである、あるものはこれを一假象に過ぎないと言ふかもしれない。然り、太陽の如き、景色の如き、樹木の如き、肘掛椅子の如き、家屋の如き假象である——これ等はそれが吾々に與へる印象に依つて始めて知り得らるゝものであるが——併しこの假象は現實にその根底を持つてゐる。

その中には日常の觀察事實、永久的な、合理的な、論駁すべからざる事實がある。

確かに吾々はあまりに受動的であり、根本的な決定と云ふ事がない。吾々が心の中に議論を戦はし、充分な反省の後に決定した場合にも、尙それは常に優越した動機に従つて行はれたものである。即ち吾々の伴りの意志自由は、一方の皿に重みを加へればその方が下る秤の如きものであるといふ反對が起る。疑もなく吾々は背嚮輕重を考へ、冷靜に推理する時、自分に好ましく思はれる方に決心する。併し吾々の理性が働くのは正にその間にあるのであり、如何なる詭辯も吾々の心の中のこの確信

を押へる事は出来ない。その反対の場合には吾々が不合理であるとすらも感ずる。時折自分の判断に反対して行動をしなければならぬ時、吾々はある點に於て強ひられて居るとも感ずるのである。

自由意思に關しても、ジュベナルが横柄な婦人に言はせた次の様な斷言は最もよい議論ではなからうか。

「*Sic volo; sic jubeo; sit pro ratione voluntas,*」私はそれを欲する、それを命ずる、私の意思は唯一の理性である。」と。

「そは予が喜びなれば……」とはルイ十四世が後に王威を落す因となつたかの誇を以て言つた事である。

疑もなく吾々はある行爲の自由を與へられてゐる。吾々は選擇する事が出来る、優越した動機に従つて決定する事が出来る。併し絶對的な自由意思を求める事は何うであらうか。各人はその氣質、思想、好みに従つて導かれ、そして又その環境、事件の鎖に従つて引きづられて行くのではなからうか。如何にして吾々はかの鎖から自由に離れる事が出来やうか。吾々の仕事が自分を導くか否かを知らないで大小の仕事を始める。そして自身の生活を省みる時、その個人的の自由が如何に微弱なものであるかが明かに分る。吾々は旋風の中を引きづり廻されてゐるのである。人は計畫し、運命は成敗

する。この運命は普遍的靈氣であり、吾々はその一小部分たるに過ぎない。しかも吾々も亦靈氣である。絶對的自由意思か？ 否々相對的自由意志。

吾々の意思自由が、皮相な人々が考へるより以上に、多くの制限を受けてゐる事は疑ひない。整然たる宇宙の進行は恆に吾々を導く。天文学上、氣象學上の状態、寒暑、風土、靈氣、光、環境、遺傳、教育、氣質、健康、意思の力に支配されて吾々は生活する。その自由は、ヨーロッパからアメリカに船客を運ぶ船に乗り込んだ一乗客の有つてゐる自由のやうなものである。彼の航海は豫め定められてゐる。彼の自由は船の欄干内に限られてゐる。彼はその浮城の上で、歩み、語り、讀み、草煙を吹かし、眠り、カルタを取る事が出来る。併しその浮城の上を去る事は出来ない、吾々の生存の計畫圖は豫め畫かれてゐる。それは宛もある機械の各部分の運動の如きものであり、吾々自分自らその役割を果さねばならない。この條件付きの自由はたしかに多くの制限を受けて居る。又、何人にも同様に存在してゐる。諸君が友人に御馳走に招かれたと假定する。食膳が出される。諸君は白葡萄酒と赤葡萄酒、ブルガンヂイとポルドー、ビールと眞水、その何れをも選び得る。そして又自ら諸君の腹に相談して諸君の理性を働かして、これらを選ぶ自由のあることをはつきり知つてゐる。

若し、何時でも、どんなに些細な行爲であつても、これを注意して觀察するならば、吾々の意思自

由が非常に制限されて居り、朝眼覺めた時爲さうと決心した事が無数の原因のために妨げられるが、それでも自分の主な意思は多少なりとも實現され、其處に選擇の自由が感ぜられる事を明かに知るであらう。

これは大事業に關しても、つまらない仕事に就いても同様である。吾々の最も重要な行爲は、環境及び自分の意思の兩方に依つて決定せられる。

けれども、自由意思と人間の責任觀念を危くする事なくして、未來の豫知を承認する事は出來ない。現在は決して止る事なくして、絶えず未來に連續する。常に何事が起る、併し若し人間の意志が事件の鎖の一部を成すものであり、これに依つて相對的自由を贏ち得るといふ事を容認するならば、それは必ずしも避け得られないものではない。意思の決定した事は現實となるが、併し又意思が決定しなかつたかもしれない。未來は過去の連續であり、未來を見る事は過去を見る事と本質的に異つてはゐない。この事實は決して、人間の意思が事件中の行爲の一因であると認める事を妨げない。起つた事とは違つた、何か外の事が起つたかもしれない、そして未來の豫知に於て考へられる事は即ちこの外の事なのである。

事件は原因の鎖の結果である、假令ひそれが一七九三年、一八七一年の巴里に於て見らるゝ様な、

(そして斯かる事は吾々の愛する地球の到る處に見らるゝのであるが)、その反對者を射殺すべし、絞首すべしと命する復讐に燃ゆる力であらうとも、或は革命の眞中に於てその暴行を止め、進歩を助けた博愛的の力であらうとも。惹起さるゝ事件は、幸福と禍、專政君主とその犠牲者、正者と不正者、無情と同情、智者と愚者、血に飢えたるものと平和を好むもの、利用する者と利用さるゝ者、盜賊と被害者の存在を妨げる事はない。

結果と原因との繼在に依つて未來の事件を豫見する事は、假令如何なる方法に依るものであらうとも、意思自由を含むすべての有効な原因の存在と調和せられ得るものである。

未來は過去と同じく神祕ではない。若し月が地球の周圍を廻轉する運動、地球が太陽の周圍を廻轉する運動のために、一九九九年八月十一日午前十時三十分、太陽、月、地球が一直線上に來り、月の影がフランスに投ぜられ、太陽の皆既食が巴里の北部に於て二分間觀察せられるといふ事を今日豫測するならば、この豫言の中には、一八四二年七月八日ベルベンに起つた日食を溯つて計算するのと同様に、何等の神祕も不可思議もないのである。アラゴーのその郷里に於ける觀測に依つて有名となつた一八四二年の日食の時、私は生後四ヶ月十一日であつた、一九九九年八月の日食の時には私は既にこれより前に死んでゐる事であらう。併しこんな事は何等の價値も持つて居らない、今日私にとつ

て、諸君にとつて、又現代のすべての人々にとつて、未來である所の事は、他の人々に取つては現在の事であり、又ついで過去の事となつて了ふのである。

言ふまでもなく星の運動には自由がなく、星にとつては宿命論は絶對的であるが故に、天文學上の事件と人間界の事件とを比較するのは抑も當らない事であると反對するものがあるかもしれない。併し之に對しては、若し自由意思が積極的原因の中に含まれてゐるならば、その効果は星の場合に於ても同様に感ぜられるであらうと答へる事が出来る。

惹起されるすべての事が積極的原因の必然的結果であり、その中にはどんなに卑しい罪でも、羅馬の炎上も、ネロの迫害による基督教徒の殉難も、獨逸人の白耳義疎も、その市民の暗殺も、ルーベンの火災も、レムゲ城の砲撃も、最後の獨逸戦争の憎むべき虐殺も、包含されてゐる事は明らかである。併し各行爲者はその積極的原因の一部分を成して居り、一部分の責任を持つてゐる。又、ジアンダークが妖術を使ふといふ罪名の下にコーシユーン僧正に依つて火焙りの刑に處せられた事と、後に至つて他の僧正に依つて聖徒の列に加へられた事もまた機械的連鎖であり、科學者ラボアジユ、天文學者ベエーリー、詩人アンドレ、シユミール、哲學者コンドルセル、盲目的な恐しい革命の犠牲者達も要するにこれ等の因果に含まれるものである。そしてこれ等の事は皆決定的の原因によつて齎ら

されたものではあるが、必ずしも避け得ない事ではなく、その成行は或は異つた風になつたかもしれない。この事から責任が存在しないと結論すると渾沌を意味する。一九一四年の戦を惹起して千二百万人の人をして死に至らしめた獨逸皇帝を、聖徒ヴィンセント、ド、ボローに比する事は出来ない。兩者は共に生き人形でもなく、宿命論の奴隷でもない。

意志自由を禁ずる事はすべての責任、すべての道徳的評價を禁ずる事であり、善人と悪人とを平等にする事である。吾々の内部の確信はこれに反對する。かゝる場合、吾々は最も明瞭な觀念を棄てなければならぬ事となる。

各人の前には彼自身知らない運命が横つてゐて、多少そこに各人の自由意志が働いてゐても、事件は種々に起つて来る。そしてその偶發的事件その物がそれからの自由意志の原因となる事がある。人類の生活は多種多様の道を辿つて行はれる。これが原因となり、結果となるものである。

そこに理屈では推されない馬鹿と利口がある。——但し馬鹿の方が遙かに多い——特に統治者に於てこの二つが著しく顯はれてゐるのである。

吾々の前に自ら知らない運命があるとしても、各人は尙この運命を自ら創造する、吾々はその能力、遺傳、教育、判斷に従つて行動し、自ら相對的意志自由を有し、自ら決定をなし得る事を熟知し

てゐる。吾々は運命を作るものである。

どんなに跳いても、吾々の死すべき時は既に決つてゐる。何故ならば事件は相連続し、その中に吾々の氣まぐれ、弱點、不注意、誤謬をすべて包含し、吾々の周圍に來り去るすべての事を含んでゐるからである。人は生來その能力、心性に従つて行動する。正直な人は嘘をいふ様には造られてゐないし、大まかな人は貪慾になる事はないであらう。それにも拘らず各人の能力の制限を受けた行動が存在し、時にはその決心を定めるまでに數週或は數ヶ月の反省を必要とする場合がある。然るに吾々の行爲は相聯關して、豫め未來を知つてゐてもこの連鎖を變へる事は出來ない。

心理現象解剖學の大家ボザノがこの明かな矛盾を定義して、「精神——但し條件的自由の精神を包んだ肉體には自由な判斷もなく絶體的決斷もない」と書いてゐるのは合理的である様に思はれる。

諸君は尙大方これに反對して、若し事件が必然的に起らねばならないならば、事業に成功しようと努力する事も、争鬪に勝利を得ようと努める事も、病人のために醫者を求める事も、反對者と闘ふ事もすべて無意義となるであらうと言ふかもしれない。この反對は正しく吾々の日常の行動を證明するものである。諸君が如何に定命論を信じてゐようとも、出來るだけ早く醫者を呼びに行くだらうし、侵略者に對して國を守るだらうし、火事があれば消防署に走り、仕事場の紙に火花が落ちればすぐに

その火を消すであらう。諸君は理性を持つて居り、常にこれを利用してゐる。この事は決して諸君が理性を缺いて居り、生き人形に過ぎないといふ事にはならない。

吾々の自由、選擇自由の力、自覺的決斷を有つてゐると云ふ事の最上の證據は、吾々が其中に詭辯を容さない親密的な、絶對的感情を有つてゐると云ふ事ではあるまいか。諸君は自分勝手を推量の出來ることを知つて居る。諸君の指を屈けやうと云ふ氣持の前に先入觀念が繼在して居る事は言ふ迄もない。此の氣持即ち意象こそ既に其れ自身に於て實在であり、精神的自由を有する吾々の單なる心から出て居るのである。

未來なるものは環境に依つて決定される。其處には人間の自由は勿論、不條理に斃された動物の復讐や、其他吾々の常に想ひ浮ばない様な特種な場合が夥しく生ずる。

人間の個性は人類の間に起る一切の事件中に積極的動機の一部をなすものである。

此の問題はシセロ、セイントオーガスチンや、ラブラスや、その他の人々に依て種々に解決を試みられてゐる。

宿命論と人間諸事の避け得られない連鎖とを混同しない様に、此處では最も明確な區別をしなければならぬ。例ひ其れが原因に對して必要な結果であらうとも、起つた事件を避け得られない事はな

い。或る人が群集の中で急いで行く人に、後を拳骨で一つ擲られたとする。併し彼は其を受けずに済んだかも知れない。何故かと云ふに、一方には其の日彼は家を出なかつたかも知れぬ。又は其方向に行かなかつたかも知れぬ。或は又彼を襲つた人が其場に居らなかつたかも知れなかつたからである。事は種々に違つて起つたかも知れない。そして其の結果は又違つて来るかも知れない。併し豫告的幻想は特に起るべき物を示すかも知れぬ。唯だこの場合、その幻像にも、それを見る者にも自由意志が缺けて居るだけである。吾々は事件の進行に協力して居る。茲に吾々自分丈の事に就いて言ふのは當らないかも知れないが、併し自分が一番良い判断者である事は確かだ。そこで自分丈の適確な例を用ひて見る。私は多年の間世界に天文学の知識を普及する事に努力して來た。そして私は或る程度迄それに成功した。科學界の知名な人士や、心ある人々の佛蘭西天文学會の創立と其發展に對して援助して呉れた。私の此の事業に就ての苦心、そして私が此の事業を個人的仕事ではないとした事は何人も私の心から抹消する譯には行かない。總ての關係者は私と同等に働いて居る。意志とは無益な言葉ではない。誰でも各々自身に關して居る事に對して同じ様な反省をする。吾々は活動する、そして未來は吾々の續次的動作から作られる。其は宿命ではない。寧ろ其の反對かも知れない。宿命論とは所謂寐て待て主義の説明だ。彼等は唯だ想像した事の何か、願はれて來るのを待つてゐるのだ。吾々はそれ

と反對だ。吾々は働く、吾々は事件の進行と共に其れと協力して行く。吾々は受動的ではない、全く能動的である。吾々は自ら未來の殿堂を作る。定命論と宿命論とを混じてはならない。後者は不活動を示し、前者は活動を表はす。

宿命論は東洋主義である。土耳其主義である。定命論は歐州主義である。そこに二つの文明の間には底知れぬ深淵が横たはつて居るのだ。

未來を見ると云ふ事は唯だ將に起らんとする何かを見る事である。其は豫視でない。單に見る事である。天文学で吾々は彗星の軌道、例へば正理論的軌道、空間曲線——楕圓、拋物線、双曲線——を計算する。併し彗星が大きな恆星の附近を通つてその引力の作用を受ける事は有る。此障礙の爲めに其軌道の進行が變はる。そこで彗星を觀測するには其の位置と此の障礙を考量しなければ確かでない。

何んな影響でも、事實の上に何等かの結果を置たらす。人間には例ひ或る獨立性を持つて居ても、惑星の障礙と同様にその進行に受ける影響を無視する譯にはゆかぬ。

故に人間の遭遇する種々の事件を豫知する事と、吾々の自由の感情とを一致される事は不可能である。

観測者が其の麓に廣大な平原の展開してゐる山の頂の近くに居たとする。彼は村に通ずる路を行く人を見る。彼は此の旅行者を或る用事で其の村に行くのだと推量する。彼が行人を見ると云ふのは個人的自由である。それを妨ぐるものはあるまい。

歩いて行く人の自由意志は観測者の見る事を妨げない。豫め事件を期待して見る事はその事件の進行に何の影響も與へない。吾々は又、山の上から二列車が轉轍の間違で互に双方から猛烈な勢で走つて來てるのを見たと思像する。災禍は刻々切迫して居る。そこに吾々の視覚、吾々の先見には最早何の意義もない。其を見てると云ふ事と事件とは全く無關係である。未來と云ふ事から其の事件を離して見ても、それは、過去から離れて物を見ると同様に、その決定的原因——此の中には人間の意志が働いてゐる事は勿論である——から生ずる影響を免れる事は出來ない。

諸君が小説を読む。其の話の残りを正確に豫想した事は無かつたか。そして作者の最も偉大なる技能は彼の空想的人物に眞實味を與へて、讀者をして其の話の残りを待たしむる程の興味を與へると云ふ所にあるではないか。例へば劇作家の巨頭アレキサンドル、ヂューマは「皇后の頸飾」の次に「ヨセフ、バルサモ」を發表してゐる。此の作者の多くの著作表を見て行く中に「シャルニーの伯爵夫人」と云ふ表題がある。此の最後の筋を読まずに、又此の伯爵夫人は誰かゞ分らない中に、「皇后の

頸飾」の第十二章のマリー、アントアネットがアンドリー、ド、タバネーに向て、シャルニー氏の美しい性質の事を語つて居る。そしてアントアネットが殆んど色を失つて感動してゐる所を読む時、ド、タバネー嬢が深く愛してゐたシャルニーの夫人となると云ふ事を瞬間的に氣がついた事はなかつたか。諸君は未來を卜した事はなかつたか。

私の説に同意しない或人は、アレキサンドル、ヂューマの性格は、自分の意志で何うにも動く傀儡であるから、私の比較は當らない。反て私の説の反對を證明する様なもので、何等價值のない説だと云ふ事や、結局男や女は全く自由人どころではない、結局吾々が神、運命又は機會と呼ぶ所の作者の手中にある人形に過ぎないものだと言ふかも知れない。

だが此の反對も當らない。アレキサンドル、ヂューマは彼のロマンスを自分の考へ通りに作つて行く時、自分の欲した事、氣に入つた事、その註文、そして讀者に最も多く興味を與へると思はれるものを並べて行つた。そしてこの筋道を作る上に於て、最も働いてゐるものは彼の想像である。彼の性格は空想的にも、實在的にも——アンドリー、ド、タバネー、シャルニー伯爵夫人、サツフレンの執行人とその甥のシャルニー、マリー、アンドネーカーヂナル、ドローハン——劇作家としての非凡な才能の走る所に從て舞臺の上に色々な風景を表はしてゐる。それはアレキサンドル、ヂューマが大き

な顔と粗末な假髪を持つてゐるのだ。故に彼の自ら欺く空想的事實が定命論に反するとて、眞面目に文句を言ひに來たエコールの心理學者を見て、彼は自分の想像は何うしても宿命的に書いて置かねば面白くないから遺憾ながら貴方の註文に應ずる事が出來ないと言つて心の底から笑ひ出す事であらう。

要するに、未來の事件に對する任意的幻想はその場合が非常に多いのであるから、從て偶然一致の假説は何の價值もない事になる。こんな假説は絶對的に排斥しなければならぬ。充分に此の問題を研究した人は、それが下關的見地から來るものであると云ふ事に全く疑義を持たない。そして、これにはまだ實際の科學的解釋はされてゐない。併しこの場合にも意志の自由は失ふ事はない。

表現の形式は如何にあらうとも、又此の特別な問題を充分に研究して居らなかつた哲學者が其れを何の様に考へ様とも、未來を洞察することは全く人間の動作の自由や自由意志と何處までも矛盾して居ない。吾々は將に起らんとして居る物を見る。吾々は時と云ふものを棄ててしまふ。それは吾々の住む惑星の運動から生ずる果敢ない産物であつて、そのものは自らが存在するものではない。時の觀念は人間が棄てて了へばそれで済むのである。吾々は既に起つた事件を見る事が出來ると同様に、未來に起らんとする事件をも見る事が出來る。若しも、意志、氣紛れ、環境が外の異なつた何物かを賣

らしたならば、又、違つた外のものが見られる事であらう。從て未來の知識は過去の知識と同様に人間の自由に何の累をも及ぼさない。

絶對空間には時間は存在しない。若し地球が二倍早く廻轉するならば、一日は半分となるであらう。これを測るのは相對的であつて基本的でない。吾々人間の印象に、時間を構成する事件の連続と絶對とを混同してはならない。天文學は既に吾々に此の區別を示して居る。例へば今晚シリウスと、ヴェーガと、アルデバランを見る。諸君は現に見てゐる星は現在その位置にない星を見てゐるので、彼等に取つては本當に現在の位置ではない。シリウスは八年以前の狀態を、ヴェーガは二十五年以前の狀態を、アルデバランは三十二年以前の狀態を現在に於て吾々に示してゐるのである。吾々の現在は彼等の過去である。吾々は一九〇一年二月二十二日に、天の彼方に星の大爆發を見た。それは事實一五五一年頃に起つた事である。恆星は吾々に見えるときは既に其處に存在して居ないのである。同様に木星や土星の現在は此の地球の現在でない。

形而上學者は空間と時間とを一緒にして、其れに實際的に或る關係を持たせ、そして彼等に共通な性質を與へやうとして居る。其は抑も誤りである。空間は其れ自ら存在してゐる。其は例へ空であるとも依然として絶對的のものである。無窮なものである。恆久的のものである。何處迄も空は既に純

粹の空間であるからである。これと反対に時間は其れ自身で存在してゐるものではない。其は星の運動と事物の連続に依りて作られたのである。若し地球が動かなければ、又星が運動をしなければ、時間と云ふものは生れて來ない。併し空間は存在する。世界の間の絶対空間には時間はない。

予は此の問題に就て現代の最も卓越した哲學者等と十五年間も論争して來た。そして予は彼等の多くが自由を犠牲にするより寧ろ未來を豫知する可能性を犠牲にするのを望んで居るのだと云ふ事が分つた。彼等はこの兩者の間に調和の存在し得る事を推察しなかつた。兎も角、吾々は觀察の事實を否定したくともこれは否定出來ないのである。再び是れ等の事實に戻る。

一九一二年、獨逸の哲學者シヨツペンハウエルの著「動物磁氣と魔術」の佛譯が發行された。原著は一八三六年にフランクフォルトで刊行されたもので、一八五一年には伯林で「靈と前兆的夢」に関する著書が刊行された。茲にその本の一節を紹介する。

「夢は時には重大な事件を告げる、併し時には考察者の注意に値しない程つまらない事をも告げる。私は自ら充分の經驗からそれを確かめた。私は此の經驗に就て語らうと思ふのであるが、それは例ひ全く偶然的であつても、極めて必要な事を示してゐるからである。

或る朝、私は非常に注意して最も重要な長い英語の手紙を書いて居た。第三頁の終迄書いたと

キ砂箱と間違ひてインキ壺を取り其れを紙の上に撒いてしまつた。インキは机から床の上に流れた。私がベルをならすと召使がやつて來てバケツに水を持つて來た。そして床を洗ひ始めた。彼女は洗ひながら「私は昨晚インキの汚點を拭き取るため此の床を擦すつて居た夢を見ました」と言つた。私は「それは嘘だ」と答へた。すると彼女は「本當で御座んす。私は一緒に寝る今一人の朋輩にもその話をしました」と言ふのである。

丁度其の時十七才になる今一人の女中が入つて來た。床を洗つてゐる朋輩を呼びに來たのである。私は自ら彼女の所に行つて、「昨晚あれは何の夢をみたか」と尋ねて見た。「知りません」と彼女は答へる。私は再び、「併しあれが起きた時お前に話した夢の事だよ」と云ふと、其時若い召使は思ひ出した様に、「お、さう、彼の方は此處で床のインキの汚點を洗つてゐる夢を見ました」と答へた。

これは私が其の絶対眞實を保證する事の出来る事實である。この種の夢の實際に在る事は最早疑ふ餘地はない。インキの粗相は全く私の意志に反して、私の手の過失から起つたものであるから、それは無意識に因るものである。故に何等注意に値する事ではない。けれども此の行爲は全く必然的に避け難い運命を決せられて居たのであつて、その結果は既に數時間前に他の自覺の中

に夢として存在して居たのである。』と。

私は此の話を私の説の實證としては採用しないで、姑く疑問の場合の部類に分け置く。(何故かと云ふに召使の取調べには時として兎角怪しい點が多い。又數人の召使が共謀して主人を騙して興がる様な事があるからである)例ひシヨペンハウエルが著者としての立場からでなく、且つその事が彼の説の證明に何等關係のない、彼としては單純な事實その儘の提供であつたとしても矢張同一である。彼は二人の召使の眞實を確信して居ると言明した。彼の心には豫告的夢の實在に就ては何の疑を持つてなす。

併し彼は其の解釋に於て既に間違つてゐる。彼はインキ壺を倒した事は決して強ひられた結果ではない。其の事實は其が起つたから見られたのである。

この獨逸哲學者の召使の此の話から予は伯林の「超感覺的世界」(一九〇四年八月)中に載せてあつた他の女中の同様な幻覺を思ひ出した。それは恚うである。

『陪席判事のブーフベルゲル氏は、或る時偶然オーバーマイスに居た事がある。或る朝五時頃彼は夢を見た。其れはオルミツツの彼の家で、召使が火のついた衣物に水をかけられてる所の夢であつた。そして此の不幸な女の身體の色が白かつた事だけを見て眼が覺めた。』

ブーフベルゲル氏は間もなく家に歸つた。彼の妻は召使が火傷をして死んだと彼に告げた。それは彼が夢を見た日の而かも朝の十時に、彼女が假漆を温めて居ると其れに火が移り彼女の衣物に火がついた。室の周圍を駆け廻つてゐる彼女を辛ふじて捕へ、地に倒して水をかけた。それから病院に連れて行つたが、數日後、遂に死んでしまつたのであつた。

此の夢を見たのは、朝の五時頃である。そして其の事件が十時であつたと云ふのは隨かに注意すべき事である。これはシヨペンハウエルの場合と同じである。

此報告にはグラツツ、ルーフェルベルグの陪審判事ブーフベルゲル氏が署名してゐる。『吾々はこの事實の正確を疑はない。けれども茲に不思議なのは此のパラドックスな證言である。即ち未だ存在しない、そして小さな連續せる原因の續きの結果である未來は、恰も其が既に實現されてあつた様に見られると云ふ事である。』

それは單に豫告的夢ばかりではなく、今の所定義するのに六づか敷しい心靈の或る状態に於ても未來を見る事が出来る。此の未來を正確に見ると云ふ事の中で、私の知つてゐる最も珍しい例の一つは心理學協會の私の學友グレイ博士の報告した觀察である。彼の著作は讀者の良く知つてゐる所であるが、此處に其の概紹介する。